



北宋の文学者梅堯臣・曾鞏・蘇軾の妻に対する観念

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-06-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 林, 雪云 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00002518">https://doi.org/10.24729/00002518</a>

博士論文

北宋の文学者梅堯臣・曾鞏・蘇軾の妻に対する観念

大阪府立大学大学院

人間社会学研究科 人間科学専攻

林 雪云

## 目次

第一章 序 論	
第一節 研究の背景と目的 .....	2
第二節 研究の方法と対象とした資料 .....	3
第三節 先行研究について .....	3
第四節 本研究の構成 .....	4
第二章 梅堯臣の悼亡詩について	
第一節 梅堯臣の閲歴 .....	8
第二節 梅堯臣の悼亡詩の特徴 .....	9
第三節 梅堯臣の悼亡詩の歴史上の位置 .....	20
第四節 小結 .....	31
第三章 梅堯臣の詠妻詩とその妻に対する観念	
第一節 梅堯臣の詠妻詩 .....	33
第二節 宋代士大夫の女性観 .....	34
第三節 梅堯臣の妻に対する観念 .....	36
第四節 梅堯臣の妻に対する観念はいかに形成されたか .....	48
第五節 小結 .....	52
第四章 曾鞏の妻に対する観念—女性墓誌銘を中心として	
第一節 女性の墓誌銘について .....	55
第二節 曾鞏の書いた女性墓誌銘 .....	57
第三節 曾鞏の女性墓誌銘における妻のイメージ .....	60
第四節 「説内治」について .....	69
第五節 曾鞏と梅堯臣の妻に対する観念の比較 .....	72

第六節 小結 .....	76
第五章 蘇軾の妻妾に対する観念	
第一節 蘇軾について .....	78
第二節 亡き妻妾を追悼、回想した詩・詞・散文 .....	78
第三節 蘇軾が妻妾を描いた詩文の特徴 .....	82
第四節 蘇軾が妻妾を詠じた作品における継承と創造 .....	104
第五節 小結 .....	107
第六章 結 語	
結語 .....	110
残された問題の所在と今後の課題 .....	111
注.....	113
参考文献.....	134
「附帯資料」	
1. 梅堯臣略年譜 .....	137
2. 曾鞏略年譜 .....	137

## 第一章

### 序 論

第一節 研究の背景と目的

第二節 研究の方法と対象とした資料

第三節 先行研究について

第四節 本研究の構成

# 第一章

## 序論

本研究は、北宋の文学者が妻に対する観念を考察しようとするものである。北宋文化の特殊性は、北宋文人特有の生活態度や価値観を決定づけた。保守的とされる北宋政治社会の中で、北宋の文学者の妻に対する一貫した描写と、妻を観察する独自の視点を手掛かりに、彼らの妻を詠じた作品群及び妻の墓誌銘に分析を加え、彼らの女性観の形成過程を検討して、彼ら妻に対する評価はどうであったのかを分析しようとするものである。

本章では、本研究の背景と目的を明らかにするとともに、研究の方法と資料、構成を述べる。

### 第一節 研究の背景と目的

北宋の文学者梅堯臣・曾鞏・蘇軾が残した著述は非常に数多い。それらの作品の中で、妻その他の女性たちに対する描写が占める割合は大きくはないけれども、我々が研究するに値する高い文学的な価値を持つ。歴代の研究者たちは、この三人の文学者が北宋の文学史上で重要な地位を占めているという点で一致している。

国内外の学者は多様な視点からこの三人の文学者を研究し、彼らの文学作品を批評しているが、彼らが妻妾を対象とした作品に論及した例はさほど多くはない。ここ数年はいささか状況が変わってきているけれども、それほど大きな関心と呼んでいるわけではない。

宋詩の祖師梅堯臣、唐宋八大家の一人である曾鞏、唐宋八大家の一人であると共に北宋文壇の指導者であった蘇軾は、生存していた年代がかなり近く、北宋の著名な官

僚、文学者、詩文の革新運動の指導者欧陽修の直接的、間接的な追隨者、支持者であったという共通点を持つ。欧陽修は曾鞏の師匠であり、嘉祐二年（1057年）、梅堯臣とともに科擧の主考官であった時、曾鞏と蘇軾はともに受験生で、二人の主考官から高い評価を受け、同年に進士となった。とするならば、同時代の三人の師匠と弟子は、妻のイメージという点でいかなる共通点、相違点を持っていたのであろうか？妻に対する愛情や、婚姻の観念あるいは女性に向き合う態度について、三人の文学者は作品の形を借りて自分の考えを披瀝したのであった。彼らは独特な視角と、全方位的な描写により、直接的あるいは間接的にバラエティーに富んだ妻のイメージを造形し、同時にその描写は北宋社会の各層に涉ったのである。本論文は彼らの筆下に描かれた様々な特色をもつ妻のイメージを分析、検討することにより、この三人の北宋文壇を代表する文学者たちの、妻に対する観念を追究していこうとするものである。

## 第二節 研究の方法と対象とした資料

本研究は、梅堯臣・曾鞏・蘇軾の妻に対する観念を考察することを目的としている。従って、本研究は梅堯臣・曾鞏・蘇軾の文献などを対象として分析、考察を進める。分析する時、文献を基礎として、彼らに関わる先行研究は、参考資料として参照、引用し、比較分析をおこなうこととする。

この方針の下、本論文においては、関連する文献資料を系統的に読み、三人の詩人の生涯や経歴、年譜などを全面的に把握し、彼らの作品を分類、分析、帰納、総括することにより、きちんと文献資料に基づいた、客観的な記述をめざす。

## 第三節 先行研究

宋代の文学を扱った研究論文は数多いが、梅堯臣、曾鞏、蘇軾の妻に対する観念を扱った論文はさほど多くない。代表的なものを挙げれば、次の通りである。

- 一、森山秀二の「梅堯臣の悼亡詩」（『漢学研究』第二十六号 一九八八年三月 十

七頁―四十八頁)。この論文は、梅堯臣の悼亡詩を通して、潘岳以来の流れと如何なる係わりを示すか、またこれら悼亡詩の詩が梅堯臣において如何なる位置を占めているかと言う問題を考察するとしている。

二、佐藤保の「宋詩における女性像および女性観」(『中国文学の女性像』汲子書院一九八二年三月 二一一頁―二四二頁)。この論文は、宋の詩人は女性をうたうことにひかえめであったという観点から、宋詩に女性をうたう詩篇の中から、そこに描かれた女性像、ひいては当時の人々の女性観を抽出している。

三、中原健二「夫と妻のあいだ―宋代文人の場合―」(『中華文人の生活』一九九四年一月十九日 二四二頁―二七〇頁)は、詳細な材料を挙げて、宋代の文学者たちが、詩、詞、散文といった各種の文体を用いて直接的に妻に対する愛情を表現した点を論述している。彼らは政治、経済、社会に対する自らの責任を自覚するとともに、一方で日常生活の基礎に立ち、各種の文学ジャンルで多様な表現形式を用いて積極的に妻に対する感情を表明したと論じている。

四、伊佩霞の『内閨・宋代的婚姻和婦女生活』(江蘇人民出版社 二〇〇四年五月)は家庭生活における女性を研究対象とし、客観的に宋代女性の生活状態を描いたものであり、宋代の婚姻と女性の生活を通して、宋代の女性たちが歴史上重要な役割を果たしたと述べている。

以上挙げてきた論著は本論文を書くのに際し、大いに参考にさせていただいた。これらの著作は、北宋の士大夫たちが自分の妻に対して抱いていたイメージや観念だけを専門に研究したものではない。そこで、本論文は、これらの先行研究の基礎に立って、これら三人の北宋士大夫の筆下に描かれた妻が具備していた特徴を主に分析し、その妻に対する観念を検討し、当時を代表する妻に対する観念を抽出していこうと考える。

#### 第四節 本研究の構成



本研究の構成であるが、第一章序論、第二章から第五章は本論、第六章が結語とまとめで構成されている。

第二章の「梅堯臣の悼亡詩について」では、北宋の著名な詩人である梅堯臣の悼亡詩を取り上げた。悼亡文学、つまり亡くなった人を悼む文学は、『詩経』までさかのぼれるが<sup>1</sup>、晋の潘岳の「悼亡詩三首」(『文選』巻23)以来、「悼亡詩」はもっぱら亡くなった妻を悼む作品を指すようになった。潘岳以後、悼亡詩は作りつづけられ、佳作も少なくなかったが、唐代中期すなわち中唐以後になると、量的にも質的にも悼亡詩は発展した。たとえば韋応物、元稹、李商隠などの悼亡詩は、その代表的なものである。こうした歴代の悼亡詩については、すでにいくつかの論考が発表されている<sup>2</sup>。そして、北宋に至ると、南宋の劉克莊に宋詩の「開祖」と言われた<sup>3</sup>梅堯臣に、大量の悼亡詩を見ることがでる。本章では、梅堯臣の悼亡詩の具体的な分析を通して、その特徴を明らかにすることにある。さらに、梅堯臣の悼亡詩の独創と思われる一面、とくに結婚生活における女性の価値と地位に対する新しいとらえ方に注目し、梅堯臣の作品の悼亡詩の歴史上の位置について分析している。

第三章の「梅堯臣の詠妻詩とその妻に対する観念」においては、前章の「梅堯臣の悼亡詩について」に引き続き、梅堯臣の詠妻詩を対象として、彼の妻に対する観念を分析している。

第四章の「曾鞏の妻に対する観念—女性墓誌銘を中心として」では、宋の代表的散文作家の一人である曾鞏の妻に対する観念を、彼の著した女性墓誌銘を中心として考察したものである。第三章の「梅堯臣の詠妻詩とその妻に対する観念」に引き続き、宋代の女性観の変容という大きな流れのもとで、曾鞏の作品の内容を対象として分析し、同時に梅堯臣の詩を比較材料として考察している。本章においては曾鞏が書いた女性の墓誌銘を子細に読み、彼の視野にとらえられた女性の日常生活、及び曾鞏の描く理想の妻像を探究している。

第五章の「蘇軾の妻妾に対する観念」では、北宋の文学者、官僚、思想家であった

蘇軾が妻妾のために書いた詩・詞、及び墓誌銘を始めとする散文を分析することにより、彼の妻妾に対する愛情の性質、結婚観を探究し、彼の妻妾に対する観念を分析している。さらに蘇軾の妻妾観と梅堯臣と曾鞏の妻に対する観念とを比較検討している。彼らが生きたのはほぼ同時代であるが、その妻に対する観念がどのような特色を持っているか分析している。蘇軾の妻妾観は二人の先達のどのような点を継承し、またどのような新しい創造を付け加えたのかを探っている。

第六章では、残された問題の所在と今後の課題について述べる。

## 第二章

### 梅堯臣の悼亡詩について

#### 第一節 梅堯臣の閲歴

#### 第二節 梅堯臣の悼亡詩の特徴

#### 第三節 梅堯臣の悼亡詩の歴史上の位置

#### 第四節 小結

## 第一節 梅堯臣の閲歴

梅堯臣は、天聖5年（1027年）、二十六歳のときに太子賓客の謝濤のむすめ謝氏（二十歳）と結婚したが、慶曆4年（1044年）、呉興（いまの湖州市）の税務官の任を終え、みやこの汴京（いまの開封市）に船で向かう途中、高郵（江蘇省）で妻の謝氏を亡くした。妻の突然の死は、志を得ずに鬱々としていた彼を悲哀におとし入れ、悼亡詩の制作が始まった。2年後、慶曆6年に梅堯臣は刁涓のむすめと再婚したが、謝氏を悼む悼亡詩の制作は止まず、謝氏の亡くなった慶曆4年から慶曆8年までの足かけ5年間に、純粋な悼亡詩とは言えないが亡き妻に言及する詩を含めると、40首を越える詩を作っている<sup>4</sup>。悼亡詩で有名な中唐の元稹でも30首余りであり、梅堯臣ほど多くの悼亡詩を作った詩人はなかったと言える。本稿では、この梅堯臣の悼亡詩の特徴を探り、これをそれまでの悼亡詩の流れのなかに位置付けたいと思う。なお、梅堯臣の悼亡詩についての専論には、森山秀二氏に「梅堯臣の悼亡詩」（『漢学研究』第二十六号）があるが、検討<sup>5</sup>の余地は多いと思われる。

まず、本論に入る前に、簡単に梅堯臣の閲歴を確認しておこう。

梅堯臣は、あざなを聖俞といい、宣州の宣城（いまの安徽省宣州市）の人で、咸平5年（1002年）に当地に生まれた。父は梅讓、太子中舎で致仕している。祖父や曾祖父は官僚にならなかつたらしい。26歳の時に太子賓客の謝濤の娘と結婚した。これが後に悼亡詩の対象になる謝氏である。

梅堯臣が最初に得た官は太廟齋郎であるが、これは科挙を通つたのではなく、叔父の梅詢が高級官僚（翰林侍読学士）であつたためであり、いわゆる門蔭であつた。天聖8年（1030）、29歳の時に桐城県（安徽省）の主簿となり、以後、長い地方官暮らしが始まつた。翌年、河南県（洛陽）の主簿に転任し、河南府の長官である錢惟演にその詩を認められ、また終生の親友となる欧陽修との交際はこのときから始まつた。

その後、天聖10年（1032）に河陽県（河南省）主簿、翌年には徳興県（江西

省) 令に転じた。その後は、建徳県(安徽省) 知事、襄城県(河南省) 知事、湖州府(浙江省) の監税官、と地方官を歴任した。慶暦4年(1044)、湖州の監税官を終えて汴京(開封) へ向かう途中、7月7日に高郵(江蘇省) の三溝で妻の謝氏が亡くなり、これより悼亡詩の制作が始まる。

慶暦5年(1045) には、忠武軍(許州・河南省) 節度使の属官となり、翌年、都官員外郎刁渭の娘と再婚。8年(1048) には鎮安軍(陳州・河南省) 節度使の属官に移っている。その後、皇祐元年(1049) には父の梅讓が亡くなり、故郷の宣城で喪に服し、3年に喪が明けたが、5年(1053) には母が亡くなり、再び故郷の宣城で喪に服している。至和3年(1056)、55歳のときに至って、はじめて中央官僚(国立大学教授) となり、嘉祐2年(1057) には知貢举欧陽脩の下で科挙の試験委員をつとめるまでになったが(合格者の中には蘇軾兄弟、曾鞏などがいた)、嘉祐5年(1060) の4月、疫病に倒れ、59歳の生涯を閉じている。梅堯臣の官僚生活は、ほとんどが地方官として過ごされたのであって、官僚としては不遇の人生であったと言えるだろう(以上述べたところを附帯資料一にまとめておく)。

## 第二節 梅堯臣の悼亡詩の特徴

### 2.1 梅堯臣の悼亡詩の特徴(1)

梅堯臣の悼亡詩の特徴としては、まず第一に、「平易なことばによる感情表現」が挙げられる。

梅堯臣の詩はなめらかで分かりやすい点ですぐれ、「平淡」が彼の詩の特徴とされるが、「平淡」は本来的に梅堯臣が追求したものであった。彼はその詩文の中で何度も平淡の美への傾倒を表明している<sup>6</sup>。彼の悼亡詩も同様に、表現を飾らない。分かりやすいことばと白描<sup>7</sup>の手法で、情景や心情を述べて、自然で平淡な美を現出しているのである。まず、取り上げるのは、「涙」(1044年作) である。

平生眼中血 平生 眼中の血  
日夜自涓涓 日夜 自ら涓涓たり  
瀉出愁腸苦 瀉ぎて愁腸の苦しきを出し  
深於浸沸泉 浸沸の泉より深し  
紅顏將洗盡 紅顏 將に洗い尽くさんとし  
白髮亦根連 白髮も 亦た根 連なれり  
此恨古皆有 此の恨み 古も皆有り  
不須愚與賢 愚かなると賢なるとを須いず

この詩は全篇を通して、その思いを飾らずに、典故も用いず、まったくの白描で詠じている。非常にわかりやすい表現で妻を思う心情の深さを伝えていると言える。

また、1046年の作「秋夜感懷」を見てみよう。

風葉相追逐 風葉 相い追逐い  
庭響如人行 庭に響きて 人の行くが如し  
獨宿不成寐 独り宿りて 寐を成さず  
起坐心屏營 起きて坐り 心は屏營たり  
哀哉齊體人 哀しい哉 体を斉しくせる人は  
魂氣今何征 魂氣 今 何にか征く  
曾不若隕籜 <sup>かえ</sup>曾 <sup>お</sup> <sup>たけのこのかわ</sup> <sup>の</sup> 若かず隕ちし 籜 の  
繞樹猶有聲 樹を繞って 猶お声有るに  
涕淚不能止 涕淚 止むる能わず  
月落雞號鳴 月 落ちて 鶏 <sup>きけ</sup> 号び鳴く

詩は冒頭から「風葉相追逐、庭響如人行」と白描でみずからの錯覚を述べる。つづいて、妻を亡くした悲しみを「獨宿不成寐、起坐心屏營」と直叙している。その後で、「哀哉齊體人、魂氣今何征（妻の魂はどこへ行ったのか）」と、ふとみずからに問いかけるのだが、妻に対するひたむきな愛情が一層はっきりと表れている。次いで、「曾不若隕籜、繞樹猶有聲（剥落して地面に落ちた竹の皮でさえ、風に吹かれて樹木のまわりでまだ音をたてているのに、妻はまったく声もない）」といい、最後の「涕

涙不能止、月落雞號鳴」は文彩を加えることなく、分かりやすいことばで、悲しみで眠ることもできない詩人の様子を巧みに描き出している。

さらにまた、「戊子正月二十六日夜夢」（1048年作）は、次のように言う。

自我再婚來 我 再婚して自り来  
二年不入夢 二年 夢に入らず  
昨宵見顔色 昨宵 顔色を見て  
中夕生悲痛 中夕 悲痛を生ず  
暗燈露微明 暗灯 微かな明りを露わし  
寂寂照梁棟 寂寂として 梁棟を照らす  
無端打窗雪 端無くも 窓を打つ雪は  
更被狂風送 更に狂風に送らる

これも全篇が作者の近況と亡き妻への思いを直接に述べたものである。再婚はしたが、「昨宵見顔色、中夕生悲痛。暗燈露微明、寂寂照梁棟」、と昨晚、前妻を夢見た時の悲しみをそのまま述べている。梅堯臣の前妻謝氏への思いがよく分かる。

また、「日常の瑣事への注視」も梅堯臣の悼亡詩の特色に挙げられる。日常のささやかな物事に目をとどめて、これを題材にするのは宋詩全体に通じる特色である<sup>8</sup>。そして、宋詩の開祖とされる梅堯臣の悼亡詩にも、こうした特色を備えている。たとえば、「謝師厚歸南陽效阮步兵」（1044年作）に「解劍登北堂、幼婦笑粲粲、弊裘一以縫、征塵一以瀚（劍を解いて北堂に登れば、幼婦 笑いて粲粲たり。弊れし裘は一に以て縫い、征の塵は一に以て瀚う）」と言い、「悲懷」（1045年作）に「夜縫每至子、朝飯輒過午（夜の縫いものは 毎に子のときに至り、朝飯は 輒ち午を過ぐ）」と言い、「元日」（1046年作）に「草率具盤餐、約略施粉黛（草率 盤餐を具え、約略 粉黛を施す）」と言うのなどがそうである。夫婦間の愛情は日常のこまごまとしたことに表れるもので、梅堯臣の悼亡詩は、過去の、妻との生活の中のささやかな出来事を選び取ってうたい、亡き妻への哀切な思いをみごとに表現していると言える。

以上のふたつの特徴は、梅堯臣の詩全体の特徴にも通じるもので、悼亡詩にも彼

の詩の特色が十分出ていることを確認しておきたい。

## 2.2 梅堯臣の悼亡詩の特徴（2）

第3の特徴は、「物を媒介にした今昔の対比」というべき表現法である。

まず、簡単に分かりやすい例を挙げよう。「梨花憶」（1046年作）である。

欲問梨花發	梨の花の発くを問わんと欲して
江南信始通	江南 信 始めて通ず
開因寒食雨	開くは寒食の雨に因り
落盡故園風	故園の風に落ち尽くす
白玉佳人死	白玉の佳人は死して
青銅寶鏡空	青銅の宝鏡は空し
今朝兩眼淚	今朝 兩眼の淚
怨苦屬衰公	怨苦 衰えし公に属す

おそらく埃をかぶっていたであろう鏡はもう妻の顔を映し出すことがない。その鏡を前にして亡き妻の姿を思い浮かべる。今昔の対比は詩人の悲しみをいっそう痛切に表現しているのである。もうひとつ例を挙げよう。「悲書」（1046年作）である。

悲愁快於刀	悲愁は刀よりも快く
内割肝腸痛	内に肝腸を割きて痛ましむ
有在皆舊物	在る有るは 皆 旧の物
唯爾與此共	唯だ爾のみ此と共にす
衣裳昔所製	衣裳は昔の製りし所
篋笥忍更弄	篋笥 更に弄ぶを忍びんや
朝夕拜空位	朝夕 空位を拜し
繪寫恨少動	繪に写せるも 動きを少くするを恨む
雖死情難遷	死すと雖も 情は遷り難く
合姓義已重	合姓は 義已だ重し
吾身行將衰	吾が身 行ゆく將に衰えんとすれば
同穴詩可誦	穴を同じうするの詩を誦す可し



「有在皆舊物、唯爾與此共（目の前にあるのは、みなあなたの生前ゆかりの物）」という第3・4句は、非常にストレートな表現で、その後で、「衣裳（衣装）」、「篋笥（竹かご）」というように、妻の生前を彷彿とさせる物をならべて、暗に現在と過去を対比させ、「空位（位牌）」、「繪寫（肖像画）」に向かっている詩人の悲しみを表現するのである。

このように、梅堯臣の悼亡詩は、しばしば妻の不在と妻ゆかりの物に触発された悲哀を詠じる。妻ゆかりの物は往々にして、詩人の感情を触発する導火線となり、逆に言えば、そうした物こそが詩人が感情を表出するための触媒になっているのである。こうした悼亡詩からは、梅堯臣の過去への回帰の心理が窺える。彼は過去のなつかしい生活の情景と目の前の悲しみに満ちた現実を対比させて描き、過去のすべてが、現在や将来よりも美しいとするのである。その代表的な例として、先に一部を引用した「元日」（1046年作）が挙げられるだろう。

昔遇風雪時	昔 風雪に遇いし時
孤舟泊吳埭	孤舟にて 吳の埭に泊まれり
江潮未應浦	江の潮は未だ浦に応ぜず
盡室坐相對	尽室は坐して相い対す
行庖得海物	行の庖には海の物を得て
鹹酸何瑣碎	鹹きも酸きも何ぞ瑣碎なる
久作北州人	久しく北州の人と作れば
食此欣已再	此を食して欣び已に再びす
是時值新歲	是の時 新しき歳に値い
慶拜乃唯内	慶拝するは乃ち唯だ内のみ
草率具盤餐	草率 盤餐を具え
約略施粉黛	約略 粉黛を施す
舉杯更獻酬	杯を挙げて 更ごも酬を獻じ
各爾祝鮐背	各爾おの鮐背を祝る
咀橘齒病酸	橘を咀めば 齒は酸きに病み
目已驚老態	目は已に老態に驚く
豈意未幾年	豈に意わん 未だ幾年ならずして
中路苦失配	中路に配を失うに苦しむと

嘉辰衆所喜	嘉き辰は衆の喜ぶ所なれど
悲淚我何耐	悲しき涙に我は何ぞ耐えん
曩歡今已衰	曩の歡びは今已に衰え
日月不可頼	日月は頼む可からず
前視四十春	前に四十の春を視れば
空期此身在	空しく此の身の在るを期すのみ
世事都厭聞	世の事は都て聞くを厭うも
讀書未忍退	書を読むは未だ退くに忍びず
過目雖已忘	目を過りしは已に忘ると雖も
寧捨心久愛	寧ぞ心の久しく愛せるを捨てん
何當往京口	何当か京口に往きて
竹里翦荒穢	竹里に荒穢を翦らん <sup>9</sup>
行歌樂暮節	行き歌いて暮節を楽しみ
薪菽甘自刈	薪と菽を甘んじて自ら刈らん

第16句の「目已驚老態」までの前半部分は、むかし、船旅の途中、潤州（江蘇省）に停泊して元日を迎えたときに、妻とつつましい祝いの膳を囲んだことを回想する。それは慶暦2年（1042年）のことで、当時、梅堯臣は「歳日旅泊家人相與為壽」という五言古詩に詠じているので、ここに引いてみよう。

舟中逢獻歲	舟中にて獻歲に逢い
風雨送餘寒	風雨 余寒を送る
推年増漸老	推年 増して漸く老い
永懷殊鮮歡	永く殊に歡びの鮮なきを懷う
江邊無車馬	江辺に車馬無く
鑑裏對衣冠	鑑の裏に衣冠に対す
孺人相慶拜	孺人は相い慶拜し
共坐列杯盤	共に坐りて杯盤を列ぬ
盤中多橘柚	盤中に橘柚多く
未咀齒已酸	未だ咀まざれど 齒は已に酸し
飲酒復先醉	酒を飲みて 復た先に酔い
頗覺量不寬	頗る量の寬からざるを覺ゆ
岸梅欲破萼	岸の梅は萼を破らんと欲し
野水微生瀾	野の水は微かに瀾を生ず
來者即為新	來る者は即ち新為り

過者故為殘 過ぐる者は故に残為り  
何言昨日趣 何ぞ言わん 昨日の趣の  
乃作去年觀 乃ち去年のものとして觀るを作すを  
時節未變易 時節 未だ變易せざるも  
人世良可歎 人の世は良に嘆く可し

二つの詩の描く情景は非常によく似ている。当時の妻との生活の一こまは、梅堯臣にとって非常に印象深いことであり、貴重なものだったと思われる。なお、第17句以降は、一転して「豈意未幾年、中路苦失配（当時は何年も経たないうちに妻を失うとは思わなかった）」と現在の悲しみを詠じ、最後に「何當往京口、竹里翦荒穢。行歌樂暮節、薪菽甘自刈」と、隱遁を願うことばで終わっている。

次いで、第4の特徴は、「夢の詩」、つまり、亡き妻を夢に見たことを詠じた詩が多いという点である。これは元稹などに見えるが、梅堯臣の場合は亡き妻は頻繁に夢に現れたようで、その数は際立っている。まず、すでにあげた「戊子正月二十六日夜夢」（1048年作）がそれである。そのほかには、「來夢」（1045年作）「夢感」（1045年作）「不知夢」（1046年作）「夢覺」（1046年作）「樞澗晝夢」（1046年作）「靈樹鋪夕夢」（1046年作）「睡意」（1046年作）「三月十四日汝州夢」（1046年作）「丙戌五月二十二日、晝寢夢亡妻謝氏同在江上早行云云」（1046年作）「夢觀」（1046年作）の10首が夢を詠じている。では、その最初の詩「來夢」を見てみよう。

忽來夢我 忽ち来りて我を夢みしむ  
于水之左 水の左にて  
不語而坐 語らずして坐す  
忽來夢余 忽ち来りて余を夢みしむ  
于山之隅 山の隅にて  
不語而居 語らずして居る  
水果水乎 水は果して水か  
不見其逝 其の逝くを見ず

山果山乎 山は果して山か  
不見其途 其の途を見ず  
爾果爾乎 爾は果して爾か  
不見其徂 其の徂くを見ず  
覺而無物 覺めれば物無く  
泣涕漣如 泣涕は漣如たり  
是歟非歟 是か非か

亡き妻を夢に見たことを詠じた詩は、梅堯臣以前にもあるわけだが、この詩のように、全篇を通じて『詩経』の句法を用いて、やや荘重に亡き妻を夢に見た喜びと戸惑いと、目覚めたあとの悲しみを詠じているのは、めずらしいと思う。次に目に付く作品としては、「靈樹鋪夕夢」を挙げることができる。

晝夢同坐偶 晝の夢には同に坐して偶い  
夕夢立我左 夕べの夢には我が左に立つ  
自置五色絲 自ら五色の糸を置けば  
色透縑囊過 色は縑の囊を透り過ぐ  
意在留補綴 意は留まりて補綴うに在り  
恐衣或綻破 恐らくは衣或は綻び破れたらん  
歿仍憂我身 歿して仍お我が身を憂う  
使存心得墮 使し存らば心墮するを得ん

昼も夜も妻がそばに居るのを夢に見るが（「晝夢同坐偶、夕夢立我左」）、亡くなっても私のことを心配してくれているのだ（「歿仍憂我身」）、とこれほどストレートにうたうのは、梅堯臣以前には見られないと言えよう。さらに一例を挙げれば、「樞澗晝夢」がある。

誰謂死無知 誰か謂わん 死さば知る無しと  
每出輒來夢 出づる毎に輒ち夢に来る  
豈其憂在途 豈に其れ途に在るを憂うるか  
似亦會相送 亦た会ま相い送るにも似る

初看不異昔 初め見るに 昔に異ならず  
及寤始悲痛 寤むるに及んで 始めて悲痛す  
人間轉面非 人間は面を転ずるまに非れど  
清魂歿猶共 清き魂は歿しても猶お共<sup>ともな</sup>わんとす

詩人は、「誰謂死無知、毎出輒來夢」、妻は死んでも私のことが分かるので、外に出るたびに夢にあらわれる、「豈其憂在途、似亦會相送」、どうやら道中が心配で、送ってくれているのだ、とうたう。もちろん「及寤始悲痛」、目が覚めれば悲しみがやって来るのだが、それで作品を終えることはしないで、さらに、「人間轉面非、清魂歿猶共」、人の世は当てにならぬが、妻の魂は亡くなくても、なお私のそばに居てくれる、と詠じている。これは亡き妻に対するこまやかな愛情の表現であり、またそれゆえに、詩人の悲しみをいっそう強く伝えている。

### 2.3 梅堯臣の悼亡詩の特徴（3）

最後に、5番目の特徴として、「悼亡の自悼への転化」というべきものがある。

艱難を共にして、17年間つれそった伴侶を失ったことは、梅堯臣にとって最も大きな打撃だったでしょう。それゆえに、彼の悼亡詩は妻を悼むだけでなく、地方官僚としての人生への一種の感慨を詠じるものでもあり、その「秋日舟中有感」には次のようにいう。

天乎余困甚 天よ 余は困しむこと甚し  
失偶淚傍沱 偶を失いて 涙は傍沱たり  
世事隨時遠 世の事は時に随いて遠ざかり  
秋風順水多 秋風は水に順いて多し  
鰥魚空戀穴 鰥の魚は空しく穴を恋い  
獨鳥未離柯 独りの鳥は未だ柯を離れず  
歲月都無幾 歲月 都て幾も無く  
存亡可奈何 存亡を奈何す可き  
兒嬌從自哭 兒は嬌なれど 自ら哭くに從し

婢駭不能呵 婢は駭かなれど 呵る能わず  
已覺愁容改 已に愁容の改まるを覺ゆれば  
休將舊鑑磨 旧き鑑を將つて磨くを休めよ  
弊衣留暗垢 弊れし衣は暗き垢を留め  
殘藥恨沈痾 残りし薬に沈痾を恨む  
斗厭驅驅役 斗に厭う 驅驅たる役を  
終期老薜蘿 終に期せん 薜蘿に老ゆるを

この詩は慶暦4年（1044年）の秋、妻を失ってまもなくの作で、梅堯臣はすでに43歳。地方官として鬱々とした日々を送っていた。第1句の「天乎余困甚」からはじめて、妻を失った悲しみを書きつづってきた詩は、末の2句に至ると、「斗厭驅驅役、終期老薜蘿」、ふと、あくせくした地方官暮らしに嫌気がさして、隠遁したくなる、と突然隠遁への思いをうたって終わるのである。第15句冒頭の「突然、ふと」の意の助字「斗」の使い方は非常に巧みである。

地方でくすぶる生活の中で、梅堯臣は不遇の思いを強くしていったと思われる。少しではあっても、その気分を軽やかにしてくれたのは、妻の謝氏の存在だったろう。それは、これまで取り上げた悼亡詩や、「初冬夜坐憶桐城山行」（1045年作）の詩から、はっきりと窺える。いま、その一部を引いてみよう。

我昔吏桐郷 我 昔 桐郷に吏たりて  
窮山使屢躡 窮き山を使して屢しば躡む  
路險獨後來 路は険しく 独り後れて来り  
心危常自怯 心 危うく 常に自ら怯ゆ  
(中略)  
歸來撫童僕 帰り来りて童僕を撫い  
前事語妻妾 前事を妻妾に語る  
吾妻常有言 吾が妻 常に言う有り  
艱勤壯時業 艱勤は壮時の業なれば  
安慕終日間 安んぞ終日の間  
笑媚看婦靨 笑媚して婦の靨を看るを慕わんやと  
自是甘努力 是れ自り甘んじて努力し  
於今無所懼 今に於ては懼るる所無し

これは梅堯臣が29歳のころ、桐城県の主簿として職務のために山中に分け入ったときの心細さと、帰宅後の謝氏との対話を回想した詩である。梅堯臣は帰宅後に「艱勤壯時業、安慕終日間、笑媚看婦鬢」と謝氏に苦言を呈されたというのである。また、謝氏の生前に作られた詩、たとえば、すでに挙げた「歳日旅泊家人相與為壽」からも、そのことは窺えるだろう。謝氏が亡くなったということは、官僚としての不遇という現実だけが、梅堯臣の目の前に残された、ということだった。だから、梅堯臣の悼亡詩の中においては、ときに自らの身世を嘆いて隠遁への思いがうたわれるのだと思われる。そこで、最後に「睡意」（1046年作）を取り上げよう。

少時好睡常不足 少き時は睡りを好み 常に足らず  
上事親尊日拘束 上は親尊に事えて 日び拘束さる  
夜吟朝誦無暫休 夜吟 朝誦 暫くも休む無く  
目齒生瘡臂消肉 目齒に瘡を生じ 臂に肉は消ゆ  
今踰四十無所聞 今 四十を踰えて 聞こゆる所無く  
又況喪妻仍獨宿 又た況んや 妻を喪いて仍お独り宿るをや  
虛堂淨掃焚清香 虚しき堂を淨く掃きて 清き香を焚き  
安寢都忘世間欲 安らかに寝むれば 都て世間の欲を忘る

(中略)

且夢莊周化蝴蝶 且く莊周の蝴蝶に化すを夢みん  
焉顧仲尼譏朽木 焉ぞ仲尼の朽木を譏るを顧みん  
人事幾不如夢中 人の事は幾ど夢の中に如かず  
休用區區走榮祿 区区として榮祿に走るを用いるを休めよ

詩人は、「少時好睡常不足、上事親尊日拘束」、若いころは父母に仕えねばならず、いつも寝足りなかった。「夜吟朝誦無暫休、目齒生瘡臂消肉」、というのも、寝る間を惜しんで勉強に励み、やつれるほどだったから。ところが、「今踰四十無所聞、又況喪妻仍獨宿」、もう四十歳を越えたのに人に知られることもなく、そのうえ妻を失って、やもめぐらし、「虛堂淨掃焚清香、安寢都忘世間欲」、人気のない座敷で香を焚き、ぐっすり眠れば世俗の欲を忘れ去る、とうたう。ここでも、妻の不在とおのれの不遇が

隣り合っている。そして、四季の移り変わりの中での、のんびりした暮らしを描いた後に、最後の4句で、「且夢莊周化蝴蝶、焉顧仲尼譏朽木」、まあ莊子のように蝶々になる夢を見て、孔子さまの役立たずというお叱りは気にしないようにしよう<sup>10</sup>、「人事幾不如夢中、休用區區走榮祿」、世の中のこともよりも夢の方がまだ、あくせく名誉と俸禄を追いかけるのは止めることだ、とうたっている。この詩は、いかにも気楽にうたっているように見えるが、「又況喪妻仍獨宿」の句の存在は重く、詩人の切実な悲しみがこめられているように思える。隠遁志向を表出するのは、古来から詩人たちの常套であるとはいえ、梅堯臣の悼亡詩におけるそれには、単なるポーズではない切実感が窺えるのである。

### 第三節 梅堯臣の悼亡詩の歴史上の位置

#### 3.1 梅堯臣の悼亡詩の歴史上の位置（1）

古代の士大夫が妻を悼むことは往々にして非難を浴び、あるいは妻に恋々とするのは進取の気象がないと認められたのであった。したがって、あの大詩人蘇軾でさえ10年後にやっと「十年生死兩茫茫」（「江城子」）とうたったのである。悼亡詩は、人の死を悼む文学の発展過程において、その歩みは明らかに困難であったと言えよう。中国社会が数千年来信奉してきたのは儒家の經典であり、「仁者愛人（仁者は人を愛す）」（『孟子』離婁・下）と宣揚する。しかし、それは一種の政治的手段であり、宣揚しているのは実質的に一種の男性優位の意識に過ぎなく、男性には「修身、齊家、治國、平天下」（『礼記』大学）、「立德、立功、立言」（『左伝』襄公二十四年）を要求し、女性には「三従四徳」<sup>11</sup>を要求したのである。まさにこの種の男尊女卑の意識が、夫婦間の感情の正常な疎通と表白に影響を与えたのである。儒家の思想は夫婦の感情の正常な表出を制限したが、しかし感情の大きな流れは結局抑えきれなかった。晋の潘岳の「悼亡詩三首」は、それまでの作品の基本的な表現方法を受け継いだうえで、悼亡詩という新しい芸術的境界を創造した。彼は夫の妻に対する深い哀悼の情を初めて余



すことなく吐露して、礼教の防御を打ち破ったのである。唐代に至ると、悼亡詩は大きく発展した。中唐の韋応物や元稹および晩唐の李商隱などの詩人にはみな悼亡詩が伝わっている。宋代では悼亡詩ばかりでなく、悼亡詞まで出現したが、その代表が梅堯臣であり、蘇軾であった。

悼亡詩の発展過程から見ると、梅堯臣の悼亡詩は、悼亡詩の伝統に学び、それを継承したばかりでなく、新しく創造し、発展させた部分があり、その後の悼亡詩のみならず、悼亡詞の出現と発展にも一定の影響を与えたと思われる。彼の悼亡詩は潘岳、韋応物、元稹、李商隱等のそれを継承しているのだが、以下では、その異同について分析したい。

なお、第2章から第4章において、梅堯臣の悼亡詩の特徴として5つを挙げた。その第1「白描」と第2「日常の瑣事への注視」については、いうまでもなく、中唐の詩の流れを汲むものであり、悼亡詩でいえば、韋応物や元稹の作品の中に見ることができる。したがって、そのことについては、ここで詳しく述べることはしない。以下では、第3から第5の特徴に留意しながら、梅堯臣が歴代の悼亡詩の何を継承し、何を発展させ、何を創造したかを考えたい。

まず、継承した点について見て行くと、第一に梅堯臣の悼亡詩の特徴の第3に挙げた「物を媒介にした今昔の対比」が挙げられる。悼亡詩において、こうした表現を模式化したのは潘岳の「悼亡詩三首」である。その第1首に次のように言う。

望廬思其人 廬を望みて 其の人を思い  
入室想所歷 室に入りて 歴し所を想う  
幃屏無彷彿 幃屏 彷彿とする無くも  
翰墨有餘跡 翰墨に余跡有り  
流芳未及歇 流芳 未だ歇むに及ばず  
遺挂猶在壁 遺挂 猶お壁に在り

潘岳は亡き妻ゆかりの物を並べるのを借りて、痛切な哀悼の気持ちを真摯に表現し

ている。その後、江淹の「悼室人十首」<sup>12</sup>其五の「秋至擣羅紈、淚滿未能開（秋至りて羅紈を擣けば、淚滿ちて未だ開く能わず）」や沈約の「悼亡詩」<sup>13</sup>（同上1647頁）の「游塵掩虛座、孤帳覆空牀（游塵 虚座を掩い、孤帳 空牀を覆う）」など、故人ゆかりの物に触発されて悲哀をうたうという悼亡詩の主題の一つを表現する作品は多い。

悼亡詩が発展して唐代に至ると、この模式化された表現は一層具体的で細かくなった。元稹の「遣悲懷三首 其二」がその代表である<sup>14</sup>。

昔日戲言身後意 昔日 戯れに身後の意を言い  
今朝都到眼前來 今朝 都て眼前に到り来る  
衣裳已施行看盡 衣裳は已に施して 行ゆく尽くるを看んも  
針線猶存未忍開 針線は猶お存して 未だ開くに忍びず  
尚想舊情憐婢僕 尚お想う 旧情の婢僕を憐れみ  
也曾因夢送錢財 也た曾て夢に因って錢財を送りしを  
誠知此恨人人有 誠に知る 此の恨みは人人に有るを  
貧賤夫妻百事哀 貧賤の夫妻は百事哀し

詩は、妻の姿は見えず、残された物を目にして生じた悲しみを描く。昔の「戯言」が「眼前」の現実になったのである。妻の生前に仕えた「婢僕」を見ても、わけもなく一層悲しさがつのるのであり、これはその妻を思う感情を転嫁したものであり、また悼亡の情の自然な流露でもある。

韋応物も同様であり、その「出還」には、

昔出喜還家 昔 出づれば 家に還るを喜び  
今還獨傷意 今 還るも 独り意を傷ましむ  
入室掩無光 室に入れば 掩いて光無く  
銜哀寫虛位 哀しみを銜みて 虚位を写す  
凄凄動幽幔 凄凄として 幽幔 動き  
寂寂驚寒吹 寂寂として 寒き吹に驚く  
幼女復何知 幼女 復た何をか知らん  
時來庭下戲 時に来りて 庭下に戯ぶ  
咨嗟日復老 咨嗟 日びに復た老い

錯莫身如寄 錯莫として 身は寄するが如し  
家人勸我食 家人 我に食を勧むも  
對案空垂淚 案に対して 空しく涙を垂る

という。これも今昔の対比の手法を用いたものであり、詩中では、外出からの帰宅時の様子を昔と今で対比させて、亡き妻への深い思いを表現している。妻の部屋に入れば、すでに「光無く」、「幽幔」に「寒吹」が吹きつける、とは、「物は変わらず、人は去り、涙がむなしく流れる」という寂寥感を表しているのである。暮らしの中での外出と帰宅という平凡なことがらは、詩人によって濃厚な情感の表現に変わり、読者を感動させるのである。さらに、晩唐の李商隱の「玉簫失柔膚、但見蒙羅碧、……歸來已不見、錦瑟長於人（玉簫 柔らかき膚を失い、但だ羅碧を蒙るを見る、……帰り来れば已に見えず、錦瑟 人より長し）」（「房中曲」）も、同様の手法を用いたものである。

悼亡詩において、こうして景物は対象化され、感情を付与された表現メカニズムとなり、歴代の作者に用いられてきたわけだが、宋代に至ると、梅堯臣もこのモードを継承し、たとえば、すでに触れた「悲書」の「有在皆舊物、唯爾與此共、衣裳昔所製、篋笥忍更弄」などのような表現を生み出したのである。

次に、梅堯臣の悼亡詩が前代を継承した点として挙げられるのが、妻を懐かしむ思いを夢に寄せて表現することである。

夢という形象をもって感情や追悼の思いを伝えることは、その表現を一層生き生きとして切実なものとする。潘岳の「悼亡詩三首」には、「寢息何時忘、沈憂日盈積（寢息 何時か忘れん、沈憂 日びに盈積す）」（其一）というように、すでに夢の痕跡が見え、これが唐代に至ると、悼亡詩において夢をうたうという一種の表現の型となるまでに発展して、普遍的に用いられるようになったと言えよう。例を挙げれば、韋応物の「感夢」は、

歲月轉蕪漫 歲月 轉た蕪漫たり  
形影長寂寥 形影 長えに寂寥たり  
髣髴觀微夢 髣髴として微かなる夢に觀い  
感嘆起中宵 感嘆して 中宵に起く  
綿思靄流月 綿かに思う 流月の靄たるに  
驚魂颯迴颯 魂を驚かす 迴颯の颯たるに  
誰念茲夕永 誰か念わん 茲の夕べは永く  
坐令顏鬢凋 坐ろに顏鬢をして凋れしむと

とうたい、また、元稹の「感夢」は

行吟坐歎知何極 行吟し坐嘆して 何ぞ極まるを知らん  
影絶魂銷動隔年 影は絶え魂は銷え 動もすれば年を隔つ  
今夜商山館中夢 今夜 商山の館中の夢  
分明同在後堂前 分明に同に後堂の前に在り

とうたう。2首は詩題も主題も同じだが、表現方式はそれぞれ特色があり、前者は妻を悼む思いと妻を失った自らを悼む思いを結合して、往時を二度と取り戻せない悲しみを伝え、後者は妻への愛情が詩人の心に深く刻みつけられている状態を反映したものとなっている。梅堯臣に至ると、たとえば「來夢」はさらに別種の情趣を持つ。この詩はすでに取り上げたので、ここでは原文のみを引いておこう。四言の形式を用いた創作手法はきわめて強い思慕の情と哀悼の意を表出している。

忽來夢我、于水之左、不語而坐。  
忽來夢余、于山之隅、不語而居。  
水果水乎、不見其逝。  
山果山乎、不見其途。  
爾果爾乎、不見其徂。  
覺而無物、泣涕漣如、是歟非歟。

詩人たちの強烈な思いは夢という方式を通じて意を満たすことを得たのであり、悼

亡詩中の夢の形象はその感情を余すことなく読者に伝えるのである。夢は、悼亡の主体と対象の間で、また悼亡の主体と読者の間で、二重の媒介作用をしているのだと言える。そこで、前掲の詩以外にも、元稹の「夢井」、李商隱の「七月二十九日崇讓宅讌作」、そして梅堯臣の「夢覩」など<sup>15</sup>、悼亡詩の中にはしばしば夢の形象が出現するのである。亡き妻を思うゆえに夢を見、夢を用いてその思いを表出するという模式は、悼亡詩を制作する主体にとっては重要な表現手段であった。潘岳の「悼亡詩三首」は、この点においても必然的な影響を及ぼしたのであり、梅堯臣もその影響を受けた一人と言える。ただ、ここでひとつ注意しておきたいのは、次に挙げる詩である。第2章ですでに挙げたが、煩を厭わずに再度引用したい。

戊子正月二十六日夜夢  
自我再婚來 我 再婚して自り來  
二年不入夢 二年 夢に入らず  
昨宵見顔色 昨宵 顔色を見て  
中夕生悲痛 中夕 悲痛を生ず  
暗燈露微明 暗灯 微かな明りを露わし  
寂寂照梁棟 寂寂として 梁棟を照らす  
無端打窗雪 端無くも 窓を打つ雪は  
更被狂風送 更に狂風に送らる

詩は、「自我再婚來、二年不入夢」と、刁氏と再婚して以来、2年の間前妻の謝氏を夢に見なかったと言う。しかし、夢に見なかった（実際にそうであったか否かはここでは問わない）ばかりではなく、悼亡詩も作られなかったようなのである。そのことは、注（4）を参照すれば容易に見て取れるだろう。つまり、再婚後、再び前妻謝氏への思いをうたい始めるのに際して、梅堯臣はそれを夢に託したのである。これはかの有名な蘇軾の詞「江城子」を想起させる。この詞には小題が伝わっており、それには「乙卯正月二十日夜記夢」とあり、梅堯臣の詩題に酷似する。

十年生死兩茫茫	十年 生死 両つながら茫茫
不思量	思量せざらんとすれど
自難忘	自ら忘れ難し
千里孤墳	千里の孤墳
無處話淒涼	処として淒涼を語る無し
縱使相逢應不識	縦使い相い逢うも 応に識めざるべし
塵滿面	塵は面に満ち
鬢如霜	鬢は霜の如ければ
夜來幽夢忽還鄉	夜來の幽夢 忽ち郷に還る
小軒窗	小さき軒窓にて
正梳妝	正に梳妝す
相顧無言	相い顧みて言無く
惟有淚千行	惟だ涙の千行有るのみ
料得年年腸斷處	料り得たり 年年 腸断たるる処
明月夜	明月の夜
短松岡	短き松の岡

蘇軾も治平2年（1065）に妻王氏を亡くし、熙寧2年（1069）に王氏のい  
 ところを継室としている。この詞は熙寧8年（1075）の作である。すでに継室がい  
 る。しかし、前妻への思いは時々湧き起こる。それを夢に託してうたうのは、梅堯臣  
 からであろう。

### 3.2 梅堯臣の悼亡詩の歴史上の位置（2）

次に、梅堯臣の悼亡詩が、前代の悼亡詩から発展させた面と新たに創造した面につ  
 いて述べてみたい。

悼亡詩は追悼の形式で創作主体の感情を表現するものであり、哀悼の対象が生前に  
 哀悼の主体に示した愛情とやさしさは、美しい思い出にならざるを得ない。追憶のため  
 に「賤内」の価値は直線的に上昇して、妻の生前の欠陥と思われた部分までもが美

点へと変化することさえあるだろう。潘岳の「悼亡詩三首」に「奈何悼淑儷、儀容永潛翳」（其三）といい、元稹の「遣悲懷三首」其一は、

謝公最小偏憐女 謝公の最も小さき 偏えに憐しめる女  
嫁與黔婁百事乖 黔婁に嫁して 百事 乖る  
顧我無衣搜畫篋 我の衣無きを顧みて 画篋を捜し  
泥他沽酒拔金釵 他に泥んで酒を沽わんとすれば 金釵を抜く  
野蔬充膳甘長藿 野蔬 膳に充ちて 長藿に甘んじ  
落葉添薪仰古槐 落葉 薪を添えんとして 古槐を仰ぐ  
今日俸錢過十萬 今日 俸錢 十万を過ぎ  
與君營奠復營齋 君の与に奠を営み復た齋を営む

とうたう。こうした詩はあるいは直接的に亡き妻を賛美し、あるいは夫婦の生活中の細部を通して、亡き妻の賢妻ぶりや温和な性格を表現している。

では、梅堯臣の悼亡詩はどうかと言えば、まず、亡き妻の「善」を描くことに重点が置かれている。たとえば、「懷悲」（1045年作）は次のようにうたう。

自爾歸我家 爾の我が家に帰きて自り  
未嘗厭貧窶 未だ嘗て貧窶を厭わず  
夜縫每至子 夜の縫いものは毎に子に至り  
朝飯輒過午 朝飯は輒ち午を過ぐ  
十日九食齋 十日に九たびは齋を食らい  
一日儻有脯 一日は儻いは脯有り  
東西十八年 東西すること十八年  
相與同甘苦 相い与に甘苦を同じうす  
本期百歲恩 本より百歳の恩を期せど  
豈料一夕去 豈に料らん 一夕に去らんとは  
尚念臨終時 尚お念う 臨終の時  
拊我不能語 我を拊して語る能わざるを  
此身今雖存 此の身 今は存すると雖も  
竟當共為土 竟に当に共に土と為らん

詩人はこまやかなタッチで、妻が生前に夫と喜びも悲しみも共にし、夫に対する敬

意を持ち、二人が互いに賓客のごとくに尊重しあったという生活の細部を追憶して、妻の女性としての善良さや美徳、至高の美点を突出させて表現している。まさに亡き妻生前のつつましきやさしさゆえに、その死後、詩人によって「竟當共為土」あるいは「終當與同穴、未死淚漣漣（終に当に与に穴を同じうすべくも、未だ死せざれば涙漣漣たり）」（「悼亡三首其一」）という真情が吐露されたのである。梅堯臣はきわめて真摯で素朴な言葉に荘重な感情を載せ、その孤独とわびしさに満ちた悲哀の情を表出している。妻を失った悲しみを展開するメカニズムにおいて、梅堯臣は決して伝統的な模式に束縛されておらず、先人の基礎に立ち、これを十分に理解したうえで新しい面を創造したのであり、「亡妻」の形象は彼の筆によってそれまでにない展開を見せたのであった。

まず、「亡妻」は夫と対等の地位と鮮明な形象をもって悼亡詩の中に表れた。中国の伝統的な礼教の社会では、女性は独立の人格を持たず、妻は夫からいえば付属物でしかなかった。潘岳の「徘徊墟墓間、欲去復不忍。徘徊不忍去、徙倚步踟躕（徘徊す 墟墓の間、去らんと欲して復た忍びず。徘徊して去るに忍びず、徙倚して歩みは踟躕たり）」（「悼亡詩三首」其三）や李商隱の「嬌郎癡若雲、抱日西簾曉（嬌郎 痴かなること雲の若く、日を抱きて西簾暁く）」（「房中曲」）などは、中国の伝統的美学観が宣揚してきた「含蓄美」にかなったものである。しかし、梅堯臣は世俗の非難を顧みず、大胆に、

結髮為夫婦 結髮して夫婦と為って  
於今十七年 今に於て 十七年  
相看猶不足 相い看るも 猶お足らず  
何況是長捐 何ぞ況んや 是れ長えに捐つるをや  
（「悼亡三首」其一）

とうたい、

雖死情難遷 死すと雖も 情は遷り難く  
合姓義已重 合姓は 義已だ重し（「悲書」）



最後に取り上げるのは、第4章で梅堯臣の悼亡詩の特徴の5番目として挙げた「悼亡の自悼への転化」についてである。

悼亡詩は、哀悼する主体がみずからを悼む部分を常に含んでいる。哀悼の主体が妻の死の全過程を経た後には、みずからの死についても、いささか認識の深化や心の準備があろう。また、亡くなった妻への感情の埋葬過程を終えた後には、哀悼の主体は心身に深い傷を負っているため、悼亡詩は人の世の移ろいへの慨嘆を帯びることを免れまい。悼亡作品中のみずからを悼む成分は、読者に一層の哀切感を感じさせる成分ともなる。元稹の「遣悲懷三首」其三は、

閑坐悲君亦自悲 閑かに坐して君を悲しみ 亦た自らを悲しむ  
百年都是幾多時 百年 都て是れ幾多の時ぞ  
鄧攸無子尋知命 鄧攸は子無く<sup>16</sup> 尋いで命を知り  
潘岳悼亡猶費詞 潘岳は亡きひとを悼み 猶お詞を費やす  
同穴窅冥何所望 同穴の窅冥 何の望む所ぞ  
他生縁會更難期 他生の縁会 更に期し難し  
唯將終夜長開眼 唯だ終夜長に開く眼を將て  
報答平生未展眉 平生未だ展べざりし眉に報答いんのみ

といい、いわば「悲妻」から「悲己」へと転じている。悲しみはやまず、魂は飛び、絶望の思いに浸されている。また、韋応物の「月夜」は次のように言う。

皓月流春城 皓月 春城に流れ  
華露積芳草 華露 芳草に積もる  
坐念綺窗空 坐ろに念う 綺窓の空しきを  
翻傷清景好 翻て傷む 清景の好ろしきを  
清景終若斯 清景 終に斯くの若きも  
傷多人自老 傷むこと多く 人は自ら老ゆ

この詩においても、詩人は春の美しい景色を前にして往時をいたみ、人生を嘆じ、景色は美しいが憂いは消えず、人は老いやすくて心を悲しませるとうたっている。

梅堯臣もこの表現手法を継承した。しかし、彼の「自悼」は元稹や韋応物のそれとは異なる。元稹や韋応物の「自悼」が夫婦二人の個人的な世界に限られているとしたら、梅堯臣の「自悼」の視野は官僚社会までに伸びていると言える。先に取り上げた「秋日舟中有感」に、「斗厭驅驅役、終期老薜蘿（斗に厭う 駆駆たる役を、終に期せん 薜蘿に老ゆるを）」と言い、「睡意」では「且夢莊周化蝴蝶、焉顧仲尼譏朽木、人事幾不如夢中、休用區區走榮祿（且く莊周の蝴蝶に化すを夢みん、焉ぞ仲尼の朽木を譏るを顧みん、人の事は幾ど夢の中に如かず、区区として榮祿に走るを用いるを休めよ）」と言っていたことから分かるように、人生の不幸な出来事は、彼の心を積極的に世に関わることから運命への憤りへと転じ、さらに哀切極まりない感傷へと進ませて、またさらに隠遁への願望へと向かわせたのである。「睡意」に見える「今踰四十無所聞、又況喪妻仍獨宿（今 四十を踰えて聞こゆる所無く、又た況んや 妻を喪いて仍お独り宿るをや）」の二句は、まさに梅堯臣の不遇の紛うことなき描写であった。彼は進取の気象を持ち、人生の理想の実現に努めたが、至るところで壁に当たったのであった。官途における失意は彼を苦悶させた。しかし、妻はよく夫の心の声に耳を傾けてくれて、彼の官途における苦痛を分かち合ってくれた。ところが、その賢妻は早々に人の世に別れを告げてしまった。詩人は夫婦の愛情の座礁にみずからの人生の座礁を感じ取ったのであり、ままならぬ人生行路はこうして一層曲がりくねったものとなったのである。相変わらず下級官僚としてくすぶっていた梅堯臣は、こうして官僚としての茫漠とした前途に対峙する気力を喪失して、「まあ莊子のように蝶々になる夢を見て、孔子さまの役立たずというお叱りは気にしないようにしましょう。世の中のことよりも夢の方がまだ、あくせく名誉と俸祿を追いかけるのは止めることだ」（前掲「睡意」）と考えるに至った。彼の心情は苦しく複雑であり、それゆえに彼の悼亡詩もより豊富な内容を持つようになったのである。ここでの梅堯臣は、一種の孤独とわびしさの中で残年を過ごすがゆえのみずからを悲しみ、みずからを悼む感情を表現しただけではない。さらに評価すべきは、彼が妻を人生の旅における対等な同行者として描いてい

ることであり、それまでにはなかったことだと言わなければならない。

#### 第四節 小結

悼亡文学は、中国古典文学の二大重要テーマである「死」と「愛情」の結合したものであり、そこに表出されたきわめて深くて誠実な感情は荘重な芸術的魅力を具えている。梅堯臣の悼亡詩は繊細な情感が人の心に染み入るばかりでなく、その無限の悲しみを人の心に刻みつける。しかも、そのすぐれた芸術技巧は以後の悼亡詩や悼亡詞にきわめて強い影響を及ぼしたと考えられる。彼は初めて亡き妻を大胆に賛美し、また夫であるみづからと対等の位置を与えた。この点で、梅堯臣は以後の悼亡詩の先駆であると言えるだろう。たとえば、本稿でも触れたように、蘇軾の「江城子」の夢を用いた表現方法は、梅堯臣の悼亡詩の影響を直接的に受けているように思えるからである。また、梅堯臣には現に生きている妻に寄せたり、妻を登場させた詩（謝氏、刁氏ともに対象になっている）もある。こうした作品も含めて梅堯臣の妻に対する観念を第三章に考察している。

### 第三章

#### 梅堯臣の詠妻詩とその妻に対する観念

##### 第一節 梅堯臣の詠妻詩

##### 第二節 宋代士大夫の女性観

##### 第三節 梅堯臣の妻に対する観念

##### 第四節 梅堯臣の妻に対する観念はいかに形成されたか

##### 第五節 小結

## 第一節 梅堯臣の詠妻詩

梅堯臣の詩名と才華は若年の頃から高く、同時代の人々は彼を称賛したが、科挙試験においては、連続して落第し、進士の称号を得ることはできなかった。彼は仕方なく恩蔭の制を使って任官し、不本意ながら主簿や県令などの地方官を歴任した。一生の間困窮失意の生活を送り、鬱鬱として青雲の志を実現できなかった<sup>17</sup>。逆境にあった梅堯臣は無限の悲憤、苦悶そして期待などの複雑な心情を抱き、「平淡」な風格で知られる、人々の真情に訴える多量の詩歌を作った。詩歌・散文・賦など合計二千九百あまりの作品を残している。特に彼の詩は、詩壇において最高の評価を受け、劉克莊は『後村詩話』の中で、彼を宋詩の「開山祖師」<sup>18</sup>と称した。五歳年下で、終生その親友であった欧陽修も彼を「詩老」と称し、「自<sup>みづか</sup>ら以て及ばずと為す」<sup>19</sup>と言ったとされる。南宋の陸游は「梅聖俞別集序」で、欧陽修の文、蔡襄の書、梅堯臣の詩を「三者鼎立して、各おの<sup>おのづか</sup>自<sup>みづか</sup>ら名家たり」<sup>20</sup>と評価している。

古来、梅堯臣に対する評価は、殆んど詩歌の審美観に集中している。しかし、梅堯臣の詩全体を通して見る時、これまであまり重視を受けてはいないが、非常に感動的な分野に目を向けざるをえない。それは、彼の詠妻詩である。

梅堯臣の詠妻詩は二つの部分から成る。前妻に対する悼亡詩と後妻に対する感慨を記した詩である。彼の詠妻詩は多くは日常生活に取材し、平凡な表現の中にその真情を見ることができる。梅堯臣の詠妻詩は、夫婦生活の価値を再発見し、夫婦生活を追憶する過程で書かれたと言えるであろう。さらに貴重なのは、愛情を描く場合であれ、結婚観を表明する場合であれ、妻という女性に対する態度を描く場合であれ、梅堯臣の詠妻詩が詩人の独特なものの見方を体現している点である。彼はユニークな視角から、直接的あるいは間接的に妻のイメージを描出しており、その作品からは妻に対する情感や態度、妻の実存、状況及び価値を見て取ることができる。

つまり梅堯臣の詠妻詩にはその女性思想が素直に表現されているのである。同時に、

梅堯臣の詠妻詩を通して、北宋の士大夫層に普遍的に存在した心理を観察することができる。梅堯臣の詠妻詩を正確に評価検討することにより、その人と為りやその詩を理解するのに資するだけでなく、当時生活化、家庭化の過程にあった宋代文化を白日のもとにさらすことができると考える。

## 第二節 宋代士大夫の女性観

梅堯臣の妻に対する観念を検討する前に、まず宋代士大夫の女性観を見て行こう。女性観とは、一般に女性の社会的地位や存在価値に対する基本的な評価を指す。「人類社会が発展する過程で、人間は、政治社会の異なった角度から女性に着目研究し、様々な観念、主張、思想を形成してきた。つまり、人間は、男性であれ女性であれ、女性に対して個別的な、あるいは系統だった認識を持つことができるのであり、我々はそれを女性観と呼ぶのである」<sup>21</sup>とあるように、誰もが自らの女性観を持つことができるのである。

中国の伝統社会の中で、女性は軽視され排斥された社会グループであり、男性の付属物となってきた。故に主導的な地位にあったのは、男性を中心とし、儒家思想を基礎とし、男尊女卑を核心とした女性観であった。このような女性観の下、女性の社会的地位はかなり低かった。しかし宋代士大夫の女性観は多元的であり、さらに言えば北宋と南宋後期ではかなりの差があった。

中唐以降の長期にわたる分裂混乱状態の後、ようやく成立したのが趙匡胤の宋王朝であった。社会が動揺する中、「三綱五常の道は絶え」<sup>22</sup>、「君君臣臣父父子子の道は乖る」<sup>23</sup>といった倫理綱紀が異常をきたした局面が、程度の差こそあれ、北宋建国後かなり長い時期にわたって存在し続けた。このような状況下、女性に対する要求も、宋代後期に比してかなりゆるかった。中唐以来形成されてきた社会の風俗習慣は、宋代に入ってから、天下太平の時代環境の中、継続していった。しかし、宋儒の唐代の風俗に対する評価は高くない。「唐の天下を有つや、治平なりと號すと雖も、然れど

も三綱は正しからず、君臣父子夫婦無く、その原は太宗に始まる。故に其の後世の子弟は使う可からず」<sup>24</sup>北宋建国の際には、「人は便ち礼義を崇び、経術を尊び、二帝三代に復せんと欲し、已自ら唐に勝る。」<sup>25</sup>宋儒は伝統的な倫理道徳を回復させることを自らの責務と考えていた。理学家たちは、女性は貞節を守り、男性は欲望を減少させねばならない、という貞節観を提議し、夫婦の関係においては、「男女には尊卑の序有り、夫婦には唱随の礼有り」<sup>26</sup>と、妻が夫に絶対服従すべきであることを説いた。理学家の理論の影響下、女性は夫の付属品となっていっていった。倫理道徳が再建されていく中、社会の女性に対する評価は、かなり保守的な地点にまで後退した。「儒学復興の指導者は、経典の中の理想的な社会秩序と、迅速に変化する同時代の政治社会の秩序をなんとかかすり合わせようとする道を探っていた。…彼らは古代の礼儀を復活させようと努力し、…士大夫たちのために、家庭の構成員が履行する義務を負う礼儀の規定を制定した。個人の修養こそ思想家のたちの最大の関心事となったのだ。」<sup>27</sup>そこで新儒学の学者たちは、封建的礼教に新しい内容を付け加え、中国の礼教は新たな黄金時代に入ったのである。「女性は貞節を重んじなければならぬとする観念は、程氏兄弟や朱熹の提唱を経て強化され、宋代以降の女性の生活は、宋代以前とは大いに変化した。宋代はまさに女性生活の転換期だったのである。」<sup>28</sup>言いかえると、宋代においては女性に要求されるのは寛大から厳格へと変化し、それに応じて、宋代の前後期の女性観も自ずと異なっている。

梅堯臣は北宋前期に生涯を送ったが、この時期には理学はまだ確立されておらず、彼の独特な履歴と生活体験から、梅堯臣は妻に対し、かなりゆるやかな態度で接するようになった。また妻を社会的地位の低い存在として扱うことはなかった。とは言うものの、梅堯臣は封建的な男権社会に生きた人であり、封建的な教育を受けた。さらに宋代理学家の二程とは同時代人であったため、その影響をある程度は免れることはできなかった。彼の思想においては、女性の独立は相対的なものであり、限界があったことは否めない。梅堯臣の妻に対する温かな態度はまさにこの時代特有の産物であ

ったと言えるだろう。

### 第三節 梅堯臣の妻に対する観念

北宋の女性の社会的地位は男性と対等というわけにはいかなかったが、南宋以後の元明清各代よりも高かったと言えるだろう。「夫は天なり、妻は地なり」、女性は「一に従いて終わる」<sup>29</sup>といった儒学の倫理概念は存在したが、女性に対する同情、理解、称賛の方がはるかに多かった。中唐までの文学作品には、夫や妻が自らの婚姻生活を記述したものは少なく、「妻のイメージがあらわれるのは稀で、たとえ出てきたとしても味気なく、単調であった。」<sup>30</sup>しかし宋代に入ると、「妻を語り妻に語りかける作品がこのように多く作られていることを考えれば、宋人は男女間の愛情の表現を一層発展させたのだといえる」<sup>31</sup>のであり、梅堯臣は自分の妻に対する情感を大胆にも筆端に載せることができた詩人であった。梅堯臣の詠妻詩は、ほとんどが日常生活に取材したもので、過去の日常生活や夢の中の一シーンを叙述するものもあれば、妻の声や容貌や日常生活で使っていた器物を描写するものもあり、最後は悲しみを表現して終わる。妻謝氏が亡くなってから数年の間に、純粹な悼亡詩とは言えないが亡き妻に言及する詩を含めると、40首を越える詩を作っている<sup>32</sup>。ここにいくつか例を挙げておこう。

慶曆4年（1044年）に妻が突然なくなり、志を得ずに鬱々としていた彼を悲哀におとしいれ、詩「悼亡三首」<sup>33</sup>が作られた。

結髮為夫婦 結髮して夫婦と為って  
於今十七年 今に於て 十七年  
相看猶不足 相い看るも 猶お足らず  
何況是長捐 何ぞ況んや 是れ長えに捐つるをや  
(其一)

慶曆6年（1048年）に書いた詩「悲書」に、



悲愁快於刀 悲愁は刀よりも快<sup>するど</sup>し  
 内割肝腸痛 内に肝腸を割きて痛ましむ  
 有在皆舊物 在る有るは皆旧物にして  
 唯爾與此共 唯だ爾のみ此れと共にす  
 衣裳昔所製 衣裳は昔製る所にして  
 篋筥忍更弄 篋筥 更に弄ぶに忍びんや  
 朝夕拜空位 朝夕 空位を拜し  
 繪寫恨少動 繪<sup>しょうぞうが</sup>寫<sup>か</sup>は動きを少くを恨む  
 雖死情難遷 死すと雖も 情は遷り難く  
 合姓義已重 合姓は 義<sup>はなは</sup>已だ重し

とうたい。又、至和二年（1055年）の「五月十七日四鼓夢與孺人在宮庭謝恩至尊令小黃門宣湧論曰今日社與卿喜此佳辰便可作詩進來枕上口占」詩に、

……

陰會皆如實 陰に会するは皆実なるが如く  
 陽開不復存 陽開かば復た存せず  
 空餘破窗月 空しく余す窗を破る月  
 流影到床垠 流影 床垠に到る

とうたうのであり、詩人は真摯な態度で様々な角度から愛妻が自らの心に重要な位置を占めていることを述べているのである。前野直彬は言う、「梅堯臣は日常生活の詩人といえよう。科挙によらずに任官したため、詩人としての令名ははなはだ高かったが、晩年まで低い地方官の位置に甘んじなければならなかった。うだつの上らなかった生涯のなかで、彼は日常生活のさまざまなディテールを細かな観察の眼を働かせてうたいつづけた。とくに家族に対する関心はつよく、中年で最初の妻を失ってからは、亡妻への追憶と残された子供達への思いを執拗なまでに訴える」<sup>34</sup>、「六朝から唐までのこの種の作品は妻の死からほぼ一年ほどの間に書かれ、それきりで終わるのが普通である。これに対して宋人はときに二年三年、長い場合は十年以上を経てまた書くの

である。…すでに死後何年も経ているのに亡き妻への思いを作品化するということは、かれらの亡妻への思いが真実性を持つことの保障になると思う」<sup>35</sup>。まさにその通り、梅堯臣の詠妻詩は、叙事であれ抒情であれ、肺腑から出た「真」の一字を見て取ることができるし、この「真」一字こそかれの妻に対する観念を屈折して言い表しているといえるだろう。

### 3.1 妻の婦徳に対する賛美

中国古代の女性は現実の生活の中で、行動の制限や束縛を受け、経済政治においては受動的な地位に置かれた。女性を家庭内の関係や家庭生活に固定化し、女性を家庭の関係を処理し、職分を履行する存在としてしかみない、というのが伝統的な女性観の特徴である。彼らの存在価値は家庭の責務を担い、己を空しくして夫に奉仕し、妻としての、母としての責任を果たすことに会った。このような伝統的な女性観は、一代また一代と彼らの（女性自身を含む）潜在意識のなかに蓄積されていき、疑いえない原則となった。梅堯臣は封建時代の文学者であるから、かれの視野に於ける理想の妻のイメージは、このような伝統的な女性観を継承している。この伝統を受け継いで、梅堯臣の詠妻詩における妻謝氏のイメージは母性の輝きを放っている。謝氏は名門謝涛の令嬢であるが、「貧賤の夫婦は百事哀し」と元稹の「悲懷を遣る」詩<sup>36</sup>に云うように、梅堯臣は生涯官吏として任地を転々とし、運命に翻弄された。この間の艱難辛苦は詩人が味わったばかりでなく、謝氏にとっても、「黔<sup>びんぼうにん</sup>妻<sup>もと</sup>に嫁して自り百事乖る」（元稹「悲懷を遣る」）のであった。彼女は詩人とともに、困った時には支えあうよき妻であったばかりでなく、その苦労を人に知らせず、子供に尽くす母親でもあった。詩人は彼女の死後によりやくその一切を思い知らされ、梅堯臣は悲しみにくれた。「懷悲」詩に云う、

自爾歸我家 爾の我が家に<sup>とつ</sup>帰<sup>つ</sup>ぎて自り  
 未嘗厭貧婁 未だ嘗て貧婁を厭わず  
 夜縫每至子 夜の縫いものは 毎に子のときに至り  
 朝飯輒過午 朝飯は 輒ち午を過ぐ  
 十日九食壘 十日に九たび壘を食し  
 一日儻有脯 <sup>ある</sup>一日儻いは <sup>ほしにく</sup>脯 有り  
 東西十八年 東西すること十八年  
 相與同甘苦 相与に甘苦を同じうす  
 本期百歲恩 本と百歲の恩を期せしに  
 豈料一夕去 豈に料わんや一夕に去らんとは  
 尚念臨終時 尚お念う臨終の時  
 拊我不能語 我を拊でて語ること能わず  
 此身今雖存 此の身今存すると雖も  
 竟當共為土 竟には当に共に土と為らん

詩人は繊細な筆遣いで、苦楽をともにし、互いに尊重しあつた夫婦生活の細部を追憶し、亡妻の気立て優しく、善美を尽くした高い情操を表現しえている。生前の妻が、このような理想的な性格を備えていたればこそ、梅堯臣は妻の死後に「竟には当に共に土と為らん」という真情を吐露しえたわけである。もう一つ例を挙げる。歐陽脩の「南陽縣君謝氏墓誌銘」<sup>37</sup>にはつぎのように云っている。

慶曆四年秋、予の友宛陵梅聖俞吳興自り来り、其の内<sup>つま</sup>を哭する詩を出して、悲しみて曰く、我が妻謝氏<sup>う</sup>亡せたりと。我に<sup>こ</sup>丐うに銘を以てし、而して葬らんとす。予未だ作るに<sup>いとま</sup>暇あらず。居ること一歳の中に、書七八たび至り、未だ嘗て謝氏の銘を以て言と為さずんばあらず。且つ曰く、…卒するの夕べ、斂むるに嫁せし時の衣を以てす。甚だしいかな、吾の貧しきこと知るべきなり。然れども謝氏は怡然としてこれに処し、其の家を治めては、常法有り。其の飲食器皿は豊侈に及ばざるも、必ず精にして以て旨く、其の衣は故新無く、浣濯縫紉して、必ず潔くして以て完し。至る所の官舎は庫陋なりと雖も、庭宇は灑掃せられて、必ず肅として以て嚴なり。其の平居の語言容止、必ず怡びて以て和らぐ。

以上に書かれている状況から判断して、この墓誌銘の原稿は梅堯臣自身の手になると断言してよいと思う。彼の筆下に、寛容で慈しみ深く、勤儉に家事を切り盛りし、貧賤に甘んずる伝統的な女性のイメージが紙上にありありと蘇っている。

同様に、彼が後妻に対する感慨を述べた詩には、到る処に妻の人格を賛美した表現が見られる。「幸いに皆柔淑の姿、稟賦 誠に獲る所あり」（「新婚」）、「単舟 匹婦 更に婢無く、朝餐 毎に愧ず 婦親から炊ぐを」（「途中寄上尚書晏相公二十韻」）「我は樵を以て給するを免ぜらるるも、貧居と年はともに均し。道上 謳歌せず、妻も亦た恚嗔せず」（「記歳」）「已に伯倫の婦の、一酔 猶お傍らに在るに勝れり」（「梅雨」）とあり、どの句も貧賤に甘んじ、勤勉で聡明な妻のイメージに満ち溢れている。これこそ、中国の伝統的な女性が共有する美点であり、平凡ながらも偉大なる徳性なのである。

これにとどまらず、更に独自のものは、彼は亡妻の容貌を心から賛美する勇気を持ち合わせていた点である。中国人は長期に渡って儒家文化の影響を受け、女性に対する評価も、道徳や人格といった角度から決められ、人物の外貌やスタイルなどの外見にかかわることはほとんどなかった。伝統的な男尊女卑の思想により、夫は妻の前で「君は美しい」とは言えなかったし、他人の前では「拙荊」とか「賤内」としか言えず、自分の妻の容貌を賛美するなど、タブーであった。ところが梅堯臣は大胆にも、「悼亡三首」で、単刀直入に「世間の婦を見尽くしたれども、美しく且つ賢きに如くは無し」と述べた。謝氏への呼びかけも、「連城宝」「白玉佳人」「明珠」などと、すべて賛美に溢れており、伝統的な悼亡詩の価値観からの逸脱であった。このような大胆な告白は内向きの宋代文人においてもまれな例と言えるであろう。

### 3.2 妻の学才への関心と高い評価

宋代の女性の教養は一般的に言ってその前の朝代の女性より高いと言える。宋代の

女性は家庭の条件が許せば、教育を受ける権利を享受できた。司馬光の『書儀』<sup>38</sup>居家雜儀には、「女子は六歳にして始めて女工の小なる者を習い、七歳にして始めて孝経論語を誦し、九歳にしてこれが為に論語孝経及び列女伝及び女誡の類を講解し、略ぼ大義をさと曉らしむ。古今の賢女は、歴史を觀て自らかがみ鑒とせざる無し」とあるが、「女子に才無きは便ち徳なり」という觀念がまだ出現していなかったため、女性はある程度教育を受ける権利を享有していた。であればこそ、「近世の婦女 詩を能くするもの多し、往往にして古人にいさ臻る有り」と北宋魏泰が『臨漢隱居詩話』<sup>39</sup>で評しているのである。

北宋前期のゆるやかな社会環境によって、輝かしい女性文化が出現した。このような環境下、女性はそれほど束縛を受けない個性を形成し、才智に富んだ一群の女性たちが育まれた。梅堯臣の前妻謝氏は彼が言うように、「我が妻は太子賓客謝涛の女、希深の妹なり。希深父子は当時の聞人にして、世よ顕榮す」（欧陽修「南陽県君謝氏墓誌銘」）であり、後妻の刁氏は「昇州（現在の江蘇省南京市）の人で、官は刑部郎中、西昆派詩人の刁衍の孫で、太常博士刁渭の娘」（朱東潤『梅堯臣伝』）であった。二人の夫人はどちらも名門の出であったから、読書と教育を受ける権利を享受することができた。梅堯臣は、「盛族に生まれた」妻の才智に非常に高い評価を与えている。

吾妻常有言 吾が妻 常に言う有り  
艱勤壯時業 艱難は壮時の業  
安慕終日閒 安んぞ慕わん終日間にして  
笑媚看婦靨 笑媚して婦の靨を看るを  
自是甘努力 是自り甘んじて努力し  
  
於今無所懼 今に於いてはおそ懼るる所無し  
（「初冬夜坐 憶桐城山行」・一〇四五年）

是歳南方ひでり旱あり、飛蝗を仰ぎ見て歎じて曰く、今西兵未だ解けず、天下重く苦しみ、

盜賊暴かに江淮に起る。而も天旱あり且つ蝗あること此くの如し。我は婦人為り、死して君の我を葬るを得ば、幸いなりと。其の能く安んじて貧しきに居りて困しまざる所以の者は、其の性識の明らかにして道理を知ること此の類多ければなり。(歐陽修全集「南陽縣君謝氏墓志銘」<sup>40)</sup>)

梅堯臣にとって、妻は美しい異性であるだけでなく、独立した思想や精神をもった人間であった。現実の生活の中では彼女の社会的地位は高くはなかったが、平凡な日常生活の中で、彼女は見識を示している。梅堯臣はこのように妻の才知を認め、妻を理解し、妻の美点を高く評価していたのである。さらに次のくだけりを見てみよう。

吾嘗て士大夫と語りしとき、謝氏は多く戸屏よ従り竊かにこれを聴き、間ひまあらば則ちことごと尽く其の人の才能賢否及び時事の得失を商榷し、皆条理有り。吾呉興に官し、或いは外自り酔いて帰るに、必ずや問いて曰く、今日孰と与に飲みて楽しむやと。其の賢なる者を聞くや、則ち悦び、しから否ざれば則ち歎じて曰く、君の交わる所、皆一時の賢雋なり、豈に己を屈してこれに下るや。惟だ道德を以てするのみ、故に合う者尤も寡し。今是の人と飲みて歡ぶや？(歐陽修「南陽縣君謝氏墓誌銘」<sup>41)</sup>)

中国伝統的儀礼において、女性は政治に参与せず、家庭外の事に関与しない、これは男女の共通認識であった。伝統的な「男女授受不親」<sup>42)</sup>といった礼教の規定は、女性の活動範囲を狭め、女性を豊饒なる外部世界から隔絶させた。女性の言語や議論は家庭内に限られ、女性と会話を交わす男性は、家族の構成員に限られた。このような生活空間の制限は、女性の精神空間を狭めた。宋代もその例外ではない。理学者の朱熹はこれを「内正しければ則ち外正しからざる無し」<sup>43)</sup>と表現した。北宋の司馬光の『書儀』居家雜儀<sup>44)</sup>にも次のような一段がある。

男は外事を治め、女は内事を治む。男子は昼は故無くして私室に処らず、婦人は故無くして中門を窺わず。故有りて中門を出でなば、必ず其の面を擁蔽すべし(蓋頭、面帽の類の如し)。

ここでは「中門」が内外を分ける境界線になっている。女性は「中門」という境界線を越えることはできなかった。伊佩霞は司馬光の『書儀』居家雜儀について「朱熹は『小学』の中で『礼記』の「男は内を言わず、女は外を言わず」を引用している。一般的に言って、男性がこれまで家庭内の事に口出ししたことがないわけではないのなら、妻のやる事に介入するなど言われたことがほとんどないのだと言えようし、逆に彼らの注意力がまともな方向に向けられているとするなら、警戒して女性に男性の領域に入らないように縛りをかけているのだろう」<sup>45</sup>とコメントしている。しかし、梅堯臣は、逆に自分の妻を警戒することなく、堂々と謝氏を称賛し、彼女のこの習慣を後の人々に残した墓誌銘に書き入れた。

屏風の後ろに立つ謝氏は名家の閨秀であり、きちんとした文化教育を受け、伝統的な儀礼について熟知していた。ところが、彼女はかなり風変りで、おとなしくはしておらず、「男は外に主たり、女は内に主たり」という礼節を守らぬばかりでなく、屏風の外でかわされる夫と客の会話を盗み聞きし、会話の内容に批評を加えてさえいるのである。彼女はなぜこのような自由を享受できたのだろうか。開明的な夫が彼女の行動を黙認し、理解し、褒め称えたからである。家庭の中で、彼女には発言権があり、夫婦の間で意思の疎通が活発におこなわれていたと言えるだろう。外部の事情と自分の夫の間には密接な関係があったので、妻は外部の事情にも重大な関心を払った。というわけで、妻は屏風の外の会話を堂々と「盗み聞き」し、夫も「盗み聞き」を不快には思わなかったのである。梅堯臣が妻のこのようなエピソードを書き入れたのは、まさに彼の他人とは異なる妻に対する観念を反映している。

もちろん屏風のうしろに隠れて夫とその友人の会話を盗み聞きした最初の妻が謝氏であったと言うつもりはない。南朝宋代の劉義慶の志人小説『世説新語』<sup>46</sup>において、早くも同じような場面が出ている。

山公（濤）は嵇（康）阮（籍）と一面し、契は金蘭の若し。山妻韓氏は公と二人と常の交わりに異なるを覚り、公に問う。公曰く、「我当年以て友と為すべき者は、唯此の二生のみ」と。妻曰く、「負羈の妻も亦た親しく狐（偃）趙（衰）を觀る、意これを窺わんと欲す、可なるか？」他日二人来たり、妻公に勸めてこれを止めて宿せしむ。酒肉を具え、夜墉を穿ちて以てこれを視、旦に達して反るを忘る。公入りて曰く、「二人は何如？」と。妻曰く、「君の才は致殊ことに如らず、正に当に識度を以て相い友たるべきのみ」と。公曰く、「伊輩も亦た常に我が度を以て勝れりと為す」と。

梅堯臣の妻の習慣は山濤の妻韓氏とよく似ている。ただ、『世説新語』は南朝貴族の逸話を集めたものであり、梅堯臣の妻のことは、彼自身が書いたもので、現実的な意義が全く違うと言えるだろう。管見によれば、彼は山濤の妻の逸話を知っていて、それを意識して書いたと考えてよいだろう。先例があるため、いささか礼の規定から逸脱した妻のエピソードを書きこんでも非難を受けることはあるまい、と確信してのことであろう。とはいえ、我々は梅堯臣の胆識に敬服せざるをえない。

当時の士大夫が書いた女性の墓誌銘の例として、曾鞏の作品「江都縣主簿王君婦人曾氏墓誌銘」を見てみよう<sup>47</sup>。

孝行聡明にして、能く書を読み、古今を言う。婦人法度の事を知り、針縷刀尺に巧みにして、手を経るものは皆絶倫たり。…曾氏冢婦と為りて、其の姑蚤世し、独り家政を任さる。能く精力し、躬ら勞苦し、細微を理め、先後緩急に随いて樽節せつやくを為し、各の條序有り。事時節に有らば、朝夕共に賓祭奉養し、其の門内を撫し、皆時つかさどる所を失わず、將に恭嚴誠順を以て、能く其の屬人を得んとす。…其の夫歎じて曰く、「我能く意を一にして自ら官学に肆にし、私を以て其の志を累わさざるは、曾氏我を助くるなり」と。

曾鞏はまず妹が聡明で読書好きであり、古今の歴史によく言及したことを述べた上で、女性の守るべき規範を心得、針仕事がとても巧みで、上手に家計を切り盛りしたこと等を称賛している。曾鞏が理想とした妻とは、才華に富み、見識を持って夫を助けながら、夫によく従い、婦道を尽くす女性であった。梅堯臣の妻に対する観念も、



まさにこのような大前提を共有しつつ、同時に夫婦の間の平等で互いに支えあう関係に重点を置いていた。梅堯臣の妻に対する観念は、伝統を継承している面と、革新的な面の両面があったと言えよう。以下の詩に見える夫婦関係からもその一斑を見ることができよう。

### 3.3 互いに尊重しあった夫婦関係

梅堯臣は妻のこのような行為を認め、ほめたたえ、顕彰したが、このことから、彼が単一の思考の枠の中で生きていたのではないことがわかる。苦境に陥っていた時には、彼ら夫婦は心を合わせ、生活上の圧力に立ち向かった。「吾をして富貴貧賤を以て其の心を累わせざらしむるは、抑も妻の助けなり」と「南陽縣君謝氏墓誌銘」にはあるが、ここでは妻は自分の苦しみを理解してくれ、自分と肩を並べて生きている。彼は妻を回想する時に、「見ずや 沙上の双飛の鳥、取る莫れ 波中の比目魚」（「八月二十二日回過三溝」）、「同に未央殿に謁し、共に明主の恩に霑う」（「五月十七日四鼓夢与孺人在宮廷謝恩至尊令小黄門宣諭曰今日社與卿喜此佳辰便可作詩進來枕占」）、「頭を仰ぎ月を看て新鴻を見る、形影 双飛す玉鑑の中」（次韻答王景彝聞余月下與内飲）」と詠っているが、ここにはある種の平等な夫婦関係が暗示されている。

この他、梅堯臣の個性的な生活様式である友人的夫婦の描写もあった。古代社会では女性の飲酒は禁止はされていなかったが、梅堯臣以外の詠妻詩の中では夫が妻と一緒に酒を飲む場面は少なかった。梅堯臣と妻の日常生活の中では、夫婦は普段から杯を手にし、向かい合って酒を飲んでいる場面がよく出てくる。ここにいくつか例を挙げておこう。慶暦二年（1042年）、彼らは旅の途上にあり、船中で新年を迎えた。梅堯臣は、互いに向かい合って坐り、新年を祝った。「歳日旅泊家人相與為壽」詩に書いている、

……

孺人相慶拜 孺人 相慶拜し  
共坐列杯盤 共に坐して杯盤を列ぬ  
盤中多橘柚 盤中 橘柚多く  
  
未咀齒已酸 未だ咀まずして齒已に酸む<sup>し</sup>  
飲酒復先醉 酒を飲んで復た先ず酔い  
頗覺量不寬 頗る覺ゆ 量は寬からざるを  
……

慶曆六年（1046年）に作った「元日」詩には次のように言う。

……  
是時值新歲 是の時新歲に値い  
慶拜乃唯内 慶拜は乃ち唯だ内のみ  
草率具盤餐 草率に盤餐を具え  
約略施粉黛 約略に粉黛を施す  
  
舉杯更獻酬 杯を挙げて 更も獻酬し<sup>こもご</sup>  
  
各爾祝鮐背 各爾の 鮐背を祝る<sup>おのお ちょうじゅ</sup>  
……

この詩は慶曆六年（1044年）の元日に慶曆二年の元旦の情景を思い出して詠んだ詩である。当時彼ら夫婦は風雪に遭い、吳埭に舟を停泊させていた。元旦をともに祝ったのは、妻一人だけであった。妻は有り合わせの材料で食事を作り、そそくさと化粧をする。その後で夫婦は杯を挙げて互いの長寿を祈ったのであった。この二首では梅堯臣は前妻の謝氏と杯をともにしているのであるが、同様に後妻の刁氏と杯をともにしている例もある。「舟中夜與家人飲」を見よう。

月出斷岸口 月は出ず 斷岸の口<sup>い</sup>  
影照別舸背 影は照らす 別舸の背  
且獨與婦飲 且く独り婦と飲むは  
頗勝俗客對 頗る俗客に対するに勝る  
月漸上我席 月は漸く我が席に上がり

暝色亦稍退 暝色 亦た稍や退く  
豈必在秉燭 豈に必ずしも燭を秉つに在らんや  
此景已可愛 此の景 已に愛すべし

これは慶暦六年(1046年)、再婚後しばらくしたころ、梅堯臣が後妻の刁氏とともに、徐州の任地に行く途中、安徽の潁州に晏殊を訪ね、出発直前に作った詩である。詩の中で梅堯臣は、「且く独り婦と飲むは、頗る俗客に對するに勝る」と述べている。つまり彼にとって、妻は友人同様に楽しく語り合い、楽しく酒を飲む仲間であった。「和道損欲雪與家人小兒輩飲」詩には次のように書いている。

陰雲濃壓野 陰雲 濃くして野を壓す  
風獵樹高鳴 風獵<sup>ふる</sup>いて樹は高く鳴る  
寒禽並枝立 寒禽 枝に並びて立ち  
頗以見物情 頗る以て物情を見る  
目前兩稚子 目前の兩稚子  
為慰豈異卿 慰めと為ること豈に卿と異ならんや  
欲置一壺酒 一壺の酒を置き  
且獨對婦傾 且く独り婦に對いて傾けん

この詩は慶暦六年(1046年)に、王道損の「欲雪與家人小兒輩飲」に和した詩である。蕭条たる天気の日詩人は物思いにける。暗く沈みがちな詩人は、妻と杯を傾けて心を和ませる。次に「次韻答王景彝聞余月下與内飲」詩を挙げる。

仰頭看月見新鴻 頭を仰ぎ月を看て新鴻を見る  
形影雙飛玉鑑中 形影 双飛す玉鑑の中  
呼我作卿方舉酒 我を呼び卿と作して方めて酒を挙げ  
更煩佳句賞高風 更に佳句を煩わして高風を賞さん

この詩は嘉祐四年(1059年)に作られた。当時梅堯臣は五十八歳で、王景彝の「聞梅聖俞月下與内飲」詩に次韻したものである。詩人が空を見上げて月を眺めていると、

北からつがいの雁が月に向かって飛んで来る。目の前に坐る妻は私に<sup>あなた</sup>卿と呼び掛けてから杯を挙げ、佳句を作って高雅な心境を歌ってくれる、ここに詩人の弾んだ真情が表現されている。この他、梅堯臣は古代の夫婦や友人の間で用いられて親愛の情を表した「卿」という呼称を用いており、互いに敬愛し合っていた夫婦関係の一端が垣間見られる。これらの詠妻詩に現れた日常生活の描写を通じて、梅堯臣が追い求めた穏かで打ち解けた夫婦関係を見て取れる。また彼にとって、妻は良妻賢母であるだけでなく、ともに杯を挙げ、胸襟を開いて語り合える親密な知己であった。ここに彼の女性に対する理想と期待が体现されている。

家庭生活の月並みなディテールが、謝氏の死とともに潮が引くように失われていく時、逆に表に出てきたのは、謝氏の母性的な美德だけでなく、審美的な女性のイメージであった。彼の筆下では、妻は夫あるいは他の男性よりも聡明であり、より高い実務能力を持っていた。梅堯臣の女性に対する平等な態度がここにはっきりと表れていると思う。

以上の分析により、梅堯臣の妻に対する観念がいささか明らかになったと考える。梅堯臣は士大夫ではあったが、社会地位がそれほど高くもない亡妻と後妻を何度も詩の題材に取り上げ賛美し、熱情をこめて自分と艱難辛苦をともにした彼女たちの高尚な品格を称えた。これは女性が徐々に差別を受け始めた北宋時代にあっては、かなり開明的進歩的行為であり、詩人の胆識が現われているだけでなく、彼の進歩的な女性観を見て取ることができる。

#### 第四節 梅堯臣の妻に対する観念はいかに形成されたか

梅堯臣は妻の美しい容貌、高尚な人格を直截的に賛美し、妻の才智を評価し、女性の人格を尊重した。彼は官僚士大夫の一員としては、他の人々に比していささか進歩的な女性観を抱いており、このような精神はまことに尊ぶべきである。梅堯臣がこの

ような妻に対する観念を形成するにあたっては、客観的には社会や政治、そして文壇の影響を受けているが、主観的には彼自身の境遇や個性と切り離して論ずるわけにはいかない。そこでこの二つの点から妻に対する観念の形成過程を見ていきたいと思う。

#### 4.1 社会と政治の背景

北宋において、女性の多方面にわたる能力はよく知られていた。司馬光が書いた「武陽縣君程氏墓誌銘」<sup>48</sup>に出てくる蘇洵の妻程氏の例を見てみよう。彼女は家産の経営に長けていた。「服玩を罄出してこれを鬻ぎて以て生を治め、数年ならずして遂に富家と為り」、蘇洵は「是に由りて専ら学に志し、卒に大儒と為る」。司馬光は彼女を「能く開發輔導し、其の夫子を成就せしむ」、「国を有ち家を有つ者、其の興衰は閨門に於いてせざる無し」と賞賛している。さらに、北宋理学家の陳襄は「宋国太夫人符氏墓誌銘」の中で、「給事の治所異政有りて、号して良吏と為すは、抑も夫人の助けなり」<sup>49</sup>。彼女らが生産活動の領域で果たす役割は日々に拡大し、女性の社会的が変化する基礎的条件が備わった。

それから、北宋の女性は子弟の教育の面でも大きな貢献をし、さらに社会の評価と尊重を受けることになった。例えば、宋の蘇易簡の母薛氏は、子弟教育で定評があった。蘇易簡がただ一度の受験で状元及第を果たし、その後順調に参知政事に就任すると、太宗はその母を招き教育に成功した理由を尋ねた。「何を以て子を教え、此の令器を成すやと、薛氏答えて曰く、幼きときは則ち束ねるに礼讓を以てし、長じては教うるに詩書を以てす。太宗誇獎して曰く、真に孟母なりと。」<sup>50</sup>もう一つ例を挙げると、博学多才で知られた賈黄中の母王氏もまた宋の太宗から、「子を教うる事此の如し、今の孟母なり」<sup>51</sup>と表彰されている。宋代には不幸に直面して離婚を申し出る女性も存在した。胡仔『苕溪漁隱叢話』<sup>52</sup>に記載されている例を見てみよう。

高齋詩話に云う、祖無<sup>おそ</sup>扨晩くに徐氏を娶る、姿色有り。議親の時、無扨は館職為りて、徐氏は必ず其の人を訾相せんと欲す。而れども無扨は貌<sup>みにく</sup>寝く、当たるを得ざるを恐る。同舎の馮当世は豊姿秀美なり、乃ち媒<sup>きと</sup>妁を諭して馮の局を出て、鞭を揚げ馬に躍り、徐の居を経るを<sup>ま</sup>埃ちて、此れ祖学士なりと曰わしむ。徐竊かに窺いて甚だ喜ぶ。成婚して、始めて其の非なるを<sup>きと</sup>寤り、竟に以て反目して離婚す。

この話では祖無扨の妻徐氏は、結婚後相手に騙されたと知って離婚している。『宋刑統』<sup>53</sup>卷十四「戸婚律・和娶人妻」は、「若し夫妻相い安諧せずして和離するものは、坐せず」、「彼此情相得ず、両りが離るるを願う者は、坐せず」と規定しており、女性が婚姻生活の中である程度の自主権を持ち、それが法律上保証されていたことがわかる。

家庭と社会においてある程度の地位を確立した北宋の女性は、社会生活の各方面で小さからぬ役割を果たすことができた。梅堯臣はこのような文化的背景のもとで育ち、彼の女性観もその影響を深く受けたのであった。

## 4.2 個人の生活体験

梅堯臣の個人的な経験と性格はその生活感覚に特別な色彩を与え、彼は妻に対して独特な観念を持つに至った。官途における蹉跌、異民族の侵入、科挙試験における挫折、空しく抱いていた報国の念のために、梅堯臣は常に不満や鬱憤を覚え、内心の苦悶を晴らす術もなかった。そのため、不平不満を言わず、彼の左右に付き添っていた妻が彼の人生において重要な地位を占めるに至った。彼の一生は平坦ではなかったが、幸いにも彼にとって特別な意味を持つ女性に出会うことができた。それが前妻の謝氏と後妻の刁氏である。

梅堯臣が二十六歳の時、謝氏を娶った。名門出身の謝氏は、聡明で有能な女性で、しかも性格は正直、夫のために様々な提案を行った。前出の「南陽縣君謝氏墓誌銘」に「其の能く安んじて貧しきに居りて困しまざる所以の者は、其の性識の明らかにして道理を知ること此の類多ければなり」とある通りである。しかしこの賢妻は三十七歳で病没し、梅堯臣は無限の感傷を催し、彼女の死後五年もたたぬうちに、亡妻について四十首を超える詩を作り、彼女への思慕の念を託した。これらの悼亡詩はもの柔らかで含蓄に富み、読む人を深く感動させ、梅堯臣の亡妻に対する切実な思いが行間にほとばしっている<sup>54</sup>。まさに「梅堯臣は結婚前には謝氏について何も知らなかったが、結婚後の生活では、彼女に完全に満足していた。それ故、謝氏が三十七歳でなくなると、梅堯臣は不断に彼女を追憶したのである」、「謝氏に対する思いを梅堯臣は生涯忘れなかった」と朱東潤が言う通りである<sup>55</sup>。謝氏が亡くなると、その後妻となったのは前述した通り、昇州兵部郎中刁衍の孫、太常博士刁渭の娘であった。刁氏は謝氏と同様に、「幸いに皆柔淑の姿にして、稟賦 誠に獲る所あり」（梅堯臣「新婚」詩）であり、彼女は二十五歳で貧しく尾羽うちからし、前途洋洋とは言いかねる梅堯臣と結婚したが、その時梅堯臣は四十五歳であった。それから梅堯臣が五十九歳でなくなるまで、彼女はずっと彼に付き添い、前妻が残した二人の子供と、自分の二人の子供を淡々と育てあげた。前妻に恋恋としていた夫は、「呼び慣れたれば猶お口に誤りあり、<sup>すぎしこと</sup>往に頗る心の積もるあるに似たり」（「新婚」）とあるように、自分の名前さえ忘れてしまうことすらあったが、賢明な彼女は恨み事も言わず、「道上 謳歌せざる」夫に対して「妻（刁氏）は亦た恚嗔無し」（「記夢」）であり、官海を漂う梅堯臣に一貫して寄り添った。伝統的な女性の美德が輝く刁氏はひたすらきちんと家事を切りまわし、夫の世話をし、子供を養育し、梅堯臣に家事の心配をさせなかった。「単舟 匹婦 更に婢無く、朝餐 毎に愧ず婦の親しく炊ぐを」と梅堯臣の「途中寄上尚書晏相公二十韻」詩にうたうように、名門出身の彼女は苦難を味わいつくしたが、ずっと素朴で誠

実な性格を保持し、梅堯臣と官海における浮沈をともにし、「貧しくして怨まず、富みて驕らざる」生涯を送った。これは本当に尊敬に値する。

妻たちが聡明で有能、素朴で善良な性格であったため、梅堯臣は何の心配もなく自分の事業を始めることができたし、詩賦の創作に精を出すことができた。生活上では妻の世話を得られたし、感情の面では妻の励ましを得られた。精神的には妻の支持を得られたため、逆境にあっても自分の信念と情操を維持できたのであった。というわけで、梅堯臣の女性観の形成は、二人の女性の存在と密接な関係がある。彼女たちは梅堯臣に始終寄り添い、かいがいしく世話をし、梅堯臣は終生彼女たちから恩を受けた。梅堯臣の胸中では、彼女たちは崇高な地位を占めており、梅堯臣の一生に巨大な影響を与え、その結果梅堯臣は温かな態度で彼女らに接することとなった。

## 第五節 小結

長きにわたった中国の封建社会において、女性は独立した人格をもたず、夫の付属物にすぎなかった。夫婦がどんなに親密でも、妻は依然として夫に頼って生きていた。梅堯臣は一般の封建時代の文人とは異なり、詩の中で妻を人格を持つ女性として描いた。彼らは夫婦であるだけでなく、友人知己であった。妻に対する愛情以上に、妻の才智、人格に対する尊敬と敬慕の念が彼の詩に見て取れる。梅堯臣は妻たちの聡明さと才知を認め、その存在価値を認め、妻を大いに称賛し、肯定的な態度を取った。儒家思想が男性の意識を占拠していた宋代に、梅堯臣は妻を独立した意義を有する人間として詩に描写し、高い評価と尊厳を彼女らに賦与したが、これは彼の進歩的な女性観の表われであった。彼の詠妻詩は、女性に対する配慮と女性の価値に対する高い評価を具体的に表現したものであった。彼はその筆を借りて、女性を尊重し、仲間型夫婦関係を追求するという内心を人々に吐露したのであり、かの時代に在っては本当に貴重な存在であった。もちろん、梅堯臣は官僚士大夫の一員として、妻は良妻賢母でなければならず、家庭内の事務をこなすのがその基本的な職責であると考えていた。



これは彼の保守的な一面であった。というのも彼は一人の封建社会の文学者に過ぎず、彼が受けた教育も封建時代のオーソドックスな教育であったため、保守的な思想をもっていたのはやむを得ない。彼の妻に対する観念は、実際上は封建士大夫の進歩的な面と保守した面が混淆したものであり、当時の士大夫の代表的な例であったと言えよう。

## 第四章

### 曾鞏の妻に対する観念—女性墓誌銘を中心として

#### 第一節 女性の墓誌銘について

#### 第二節 曾鞏の書いた女性墓誌銘

#### 第三節 曾鞏の女性墓誌銘における妻のイメージ

#### 第四節 「説内治」について

#### 第五節 曾鞏と梅堯臣の妻に対する観念の比較

#### 第六節 小結

## 第一節 女性の墓誌銘について

墓誌銘とは「墓の中に埋める、死者の事績を刻んだ石である。「志」と「銘」の二つの部分に分かれる。「志」は散文のスタイルを用い、死者の姓名・日常生活を記述する。「銘」は韻文で、死者を称賛し、哀悼する」<sup>56</sup>機能を持つとされる。墓誌銘はいつ始まったのか、女性の墓誌銘はいつ始まったのか、史籍を渉猟しても、明確な資料は見出せない。「女性の墓誌銘は南朝に出現した」などという曖昧な記述は目にするけれども、具体的な証拠に乏しく、決定することはできない。

男性の墓誌銘にしてからが、その起源に関しては諸説紛々である。明代の呉訥は『文章辨體序説』の中で、「事祖広記に曰う、古えは葬には豊碑有りて以て窆る。秦漢以来、死して功業らば、則ち上に刻し、稍や改めて石を用う。晋宋の間神道碑と称うるを開始す。蓋し地理家は東南を以て神道と為し、碑は其の地に立つをもって名づくと云う。」<sup>57</sup>と述べ、同時代の徐師曾は『文體明辨序説』で、「按ずるに、誌は記するなり、銘は名づくるなり。古の人徳善功烈の世に名だたる可き有り。歿すれば則ち後人これが為に器を鑄て以て銘し、無窮に伝わら俾む。…漢に至りて杜子夏始めて文を勒して墓側に埋め、遂に墓誌有り、後人これに因る。」<sup>58</sup>と指摘している。この他、明代王行の『墓銘舉例』、清姚鼐の『古文辭類纂』などが墓誌銘に関して様々な考証を行っている。中でも清の趙翼はその著『陔餘叢考』<sup>59</sup>卷三十二において、極めて詳細に論じ、女性の墓誌銘についても触れている。

墓誌銘の始めは、王阮亭の池北偶談に謂う、事祖広記は炙輅子を引きて以て王戎馮鑒に始まると為す。事始は西漢の杜子春に始まると以し、高承の事物紀原は以て比干に始まると為す。槎上の老舌は孔子の喪は、公西赤これを志し、子張の喪は公明儀これを志すを引き、以て墓志の始めと為す。…惟だ封氏見聞録に、青州古冢に石刻銘有り、青州世子東海女郎とあり。賈昊は以て東海王越の女にして、荀晞の子に嫁す者と為す。司馬溫公も亦た南朝始めて銘志の墓に埋めるの事有りと謂う。然るに賈昊の東海王越の女を弁識する一事は亦た南史に見え、則ち晋に已に墓志の例有り。…莊子に云う、衛の靈公葬を沙丘に卜す、これを掘りて石椁を得たり。銘有りて曰く、其の子に憑らずと。靈公

乃ち奪いてこれを埋むと。則ち春秋以前に已に墓中に銘する有り。此の數事に由りて觀れば、則ち墓銘の來るや已に久し。而るに王儉、宋元嘉中顏延之自り始まると謂うは、此れ又た何の説ぞ？竊かに意うに、古來墓に銘するに、但だ姓名官位を書す、間まに或いは數語を其の上に銘す。而らば撰文叙事し平生を臚述するは、則ち顏延之より起ると。

引用した三つの文章によると、明代の徐師曾は漢代に始まると見ているし、吳訥は晋宋のあたりに始まると考えているし、趙翼は真の意味の墓誌銘は顏延之から始まると推定している。また范文瀾は『中国通史』の「西晋文化」篇で、「後漢時代に碑を立てることが非常に流行した。そこで、曹操は命令を出して豪華な葬禮を禁じ、碑の建立を禁じた。晋の武帝は詔を下して禁止令を廢止し、それ以後墓誌銘が碑文にかわって盛んになった。」<sup>60</sup>というわけで、男性の墓誌銘は晋と南朝の宋の間に出現したことが分かる。男性の墓誌銘の習俗は秦漢時代まで遡ることができるが、当時はきまった体例がなく、墓誌銘にも誌と銘の両方を含んだものはなかった。墓主の家系や生涯などを記してはいるものの、墓誌銘の前身もしくはひな形に過ぎず、本当の意味の墓誌銘ではなかった。

それならば、女性の墓誌銘はどうであろうか。『陔餘叢考』<sup>61</sup>でとりあげられた、唐代の封演著の『封氏聞見録』に「青州古冢に石刻銘有り、青州世子東海女郎とあり」とあるからには、晋代にすでに女性の銘文があったことは確かである。これは最も早い女性の銘文の例であろう。『全上古三代先秦兩漢魏晋南北朝文』を通覧した結果、探し出すことのできた最も早く、最も完備した女性の墓誌銘の例は、任昉撰、劉瓛の妻王氏の墓誌銘「劉先生夫人墓誌」<sup>62</sup>であり、『文選』卷五十九に収められている。全文は以下の通り。

既に萊婦と稱せられ、亦た鴻妻と曰わる。復た令徳有り、一にこれと齊しくす。實に君子を佐け、蒿を簪とし藜を杖とす。欣欣として負載し、冀の畦に在り。居室にも有行にも、亟しば義讓を聞く。訓えを丹陽に稟け、風を丞相に弘む。籍甚なる二門、風流は遠く尚し。肇めは允に才淑、閩德斯に諒なり。鄭郷に蕪没し、楊冢に寂寥たり。參差たる孔樹、毫末も拱を成す。暫く荒埏を啓き、長えに幽隴を扃ざす。夫は貴く妻も尊きは、

爵に匪ずして重んぜらる。

全体から見て、墓誌銘とは言うものの、実は「銘」だけあって「志」のないただの銘文である。全篇これ四字句から成り立っていて、内容もひたすら死者に対する賞賛のみで、その家系や生涯については何一つ記載がない。ただし、女性の墓誌銘も男性の墓誌銘とほぼ同時期に出現したということは言える。唐代宋代に入ると、韓愈、柳宗元、歐陽修、曾鞏といった多くの古文作家が、女性の墓誌銘の製作に手を染めた。この時期の墓誌銘にはすでに明確な体例が備わっていた。「墓誌は則ち世系歲月名字爵里を直述し、用て陵谷の遷改そなに防うるなり。…凡そ碑碣の外に表るる者は、文は則ち稍や詳しく、誌銘の壙に埋めらるる者は、文は則ち嚴謹たり。…大抵碑銘は徳独善功烈を論列する所以にして、銘の義は美を称して悪を称えずと雖も、以て孝子慈孫の心を尽くす。」<sup>63</sup>と明代の呉訥が述べる通りである。それでは以下の章で曾鞏筆下の女性墓誌銘を見てみよう。

## 第二節 曾鞏の書いた女性墓誌銘

曾鞏（1019～1083）、字は子固、北宋中期の文学者である。これまで中国文学界では、曾鞏の宗法思想、文学作品、文学理論については、犀利な研究が行われてきたが、彼の女性観に対する研究は殆んど行われてこなかった。このことに鑑み、本章においては曾鞏が書いた女性の墓誌銘を読み、彼の視野にとらえられた女性の日常生活、及び曾鞏の描く理想の妻像を探究していきたいと考える。曾鞏の妻像を検討すると同時に、同時代の文人梅堯臣の妻像と大まかに比較し、彼らの相異点に対する分析を通じて、北宋文人の基本的な思考様式、価値基準、審美観を探究しようとする。

曾鞏は生涯にわたり、多くの詩歌・散文を残した。欧陽修らとともに散文の革新運動にかかわり、大きな功績をあげ、文学史上「唐宋八大家」の一人として名声を享受している。欧陽修は「送楊辟秀才」詩の中で、「吾は曾生を奇とす、始めはこれを太学

に得たり。初めて謂う 独り軒然として、百鳥の一鶚なりと。」<sup>64</sup>曾鞏とともに欧陽修の門生であり、同年の進士（嘉祐二年 1057）でもあった蘇軾も、口を極めて曾鞏を推奨している。蘇軾は伯父の蘇渙の墓誌銘を書いてくれるように曾鞏に手紙で頼んだ。それが曾鞏の「贈職方員外郎蘇君墓誌銘」である。蘇軾は「曾子固の越に倅するを送る、燕字を得たり」詩で、曾鞏を次のように称賛する、「醉翁門下の士、雜選して賢為り難し。曾子 独り超軼し、孤芳 群研を陋む。」<sup>65</sup>このように曾鞏は欧陽修門下でも重きを為していた。

曾鞏の文集には、全部で六十篇の墓誌銘が収められており、その中の二十五篇が女性の墓誌銘で、二分の一弱を占めている。しかしこれまで専ら曾鞏の女性墓誌銘を対象にした研究はなく、曾鞏研究の盲点となっていた。たまたま曾鞏の女性墓誌銘に触れてはいても、曾鞏の墓誌銘の特徴や価値の分析の一環としてであったり、他の文学者の墓誌銘と比較する材料として取り上げられた場合に限られる。そこで本論文では曾鞏の妻に対する観念という切り口から考察を加えてみたい。曾鞏が書いた二十五篇の女性墓誌銘から、妻はかくあるべしという理想像をはっきりと見て取ることができるのである。

墓誌銘はその名の通り、埋葬されている人を紹介する文章である。墓誌銘を書く側と、書かれる側には一般的に言って何らかの情誼が存在するはずである。これらの墓誌銘の中では、曾鞏が他人のために書いたものもあれば、自分の家族や親しい友人のために書いたものもある。墓誌銘の内容から、二十五篇のうち、十二篇は親しい人物のために書かれており、行間には濃厚で真摯な感情が満ちている。この十二篇は、岳父の姉の謝氏、外叔の祖母の戴氏、妻の祖母の張氏、妹婿の母傅氏、もう一人の妹婿の母周氏、舅母（母の兄弟の妻にあたるおば）の沈氏、その他彼の四人の妹と妻の晁氏、そして二人の娘の墓誌銘が含まれ、悲痛な感情があふれている。妻の晁氏のために書いた「亡妻宜興縣君文柔晁氏墓誌銘」<sup>66</sup>を例としてあげよう。

蓋し天はこれに徳を昇あるも其の年を夭とす、遺りて以て余を相たけこれを奪はうこと蚤し。余は其の所以を知らず、又其のこれを哭して慟するを知らざるなり。…人孰か貴からずや、子は其の窮に逢う。世誰か寿ならずや、子は其の凶に罹る。…遺りて以て余を輔け、曾て逡巡せず。歳云に其れ逝き、予の悲しみ孔だ新し。…

妻を喪った悲しみを描写するのに、泣き叫んだり地団太を踏んだりするような大げさな表現は用いず、人格は高かったが薄命であったと繰り返すことによって内心の苦痛の深さを浮き彫りにしている。曾鞏が亡妻の墓誌銘を書く際には、一見感情を表に出さないように思えるが、亡妻の賢さとしとやかさを綿々と追憶しており、妻に対し深い愛情を懐いていたことは言うまでもないだろう。妹のために書いた「江都縣主簿王君夫人曾氏墓誌」の中で、曾鞏は「天なるかな、吾れ伯姉を哭して始めて期を逾え、又吾が妹を哭しこれを誌す、其れ哀しむべきなり、其れ哀しむべきなり」<sup>67</sup> と言っている。兄が妹を思う情は深く、「天なるかな」という叫びに兄としての真情が披瀝されている。次に「二女墓誌」<sup>68</sup>を見よう。

二女は慶老と曰い、吾が妻晁あ氏の出なり。生まれて三歳にして夭す。…是の時に方り、吾が妻晁あ氏の病已に革あらむ。慶老の疾未だ作らざるの夕、其の母を省し、勉慰すること成人の如し。中夕にして疾作り、遂に救えず。…実に治平三年九月甲寅なり。是の時、余方に景德寺に鎮宿せられ、国子監の進士を試み、其の疾を視、其の死に臨むを得ざるなり。二女は生れて予の窮多故に値い、其の不幸にして又た夭して以て死す。所謂命の非なるものならんや。

全文は回想のスタイルであり、具体的なディテールを通して二女が夭折する経過を詳細に描き、父としての責任を果たせなかった口惜しさがこめられている。

墓誌銘はある種の応用のきく文体であり、固定した内容と形式を持っているため、定型化・パターン化に陥りやすく、社交辞令化しやすいとされている。しかし、上にあげたいいくつかの例から見ると、曾鞏は事実に基づいて記録する、言わば史学の方法

で墓誌銘を書くことができたと了解される。この点については以下に材料を付け加え実証していきたいと思う。彼の女性墓誌銘に織り込まれているのは、彼が強調したいと考え、十分称揚に値すると判断していた女性の美德であり、こういった美德を具える妻こそ曾鞏の想定した女性の模範であったに違いない。小論では、「婦道を尽くす妻」「夫に従う妻」「夫を助ける妻」「才智を具える妻」という四つの角度から曾鞏の視野にとらえられた妻のイメージを考察してみたいと思う。

### 第三節 曾鞏の女性墓誌銘における妻のイメージ

曾鞏は比較的平穏な生涯<sup>69</sup>を送った。郷里で晴耕雨読の生活を送った後、嘉祐二年（1057）三十九歳で進士に登第し、太平州（現在の安徽省当塗県）の司法参軍、館閣校勘、集賢校理、各地の知州、中書舎人などの官職を歴任した。彼の一生は順調で、大きな政治の波風は受けたことがなく、長期にわたり古典籍の整理、校訂に従事したこともあり、地に足のついた純正なスタイルの文章が生み出された。このような文体は彼の女性墓誌銘にも反映されている。

#### 3.1 婦道を尽くす妻

曾鞏の思想は伝統的な儒家の観念が残存しており、彼の散文は「文は以て道を載せる」という古代の散文を継承発展させたものであったことは言うまでもない。曾鞏の女性墓誌銘で先ず目につくのは、婦道を遵守する女性への賞賛である。彼は女性が婦道を尽くすべきであると心から信じていた。「婦道」とは貞節、孝行、従順、謹直を指す。彼の作「金華縣君曾氏墓誌銘」<sup>70</sup>は次のように述べる。

夫人は王氏に嫁し、侍御史諱は平の妻と為る。姓は曾氏。…既に嫁しては、夫家は貧しく、姑を養いて婦道を尽くす。其の夫を輔けては妻道を尽くす。夫の死するや、穎に寓食し、勤儉を以て日を積みて其の家を大にし、誘教して倦まざるを以て其の子を成らしむ。又た母道を尽くすと謂う可きなり。



貧しかった夫の実家で苦勞を厭わずに努力を続け、「婦道」「妻道」「母道」を尽くし、夫の死後も儉約を旨として家産を大きくし、子女を立派に育て上げた曾氏を曾鞏は褒め称える。「試秘書省校書郎李君妻太原王氏墓誌銘」でも、「夫人の姓は王氏、太原の人。…其の行は仁孝慈恕。始めは女と為り、中には婦となり、終わりには母と為り、其の道を尽くさざる無し」<sup>71</sup>と云い、「金華縣君曾氏墓誌銘」と同じ筆法で王氏を称揚している。もう一つ例をあげよう。彼が母方のおじの妻沈氏のために書いた「沈氏夫人墓志銘」<sup>72</sup>である。

夫人姓は沈氏、其の先は越の会稽に家す。曾祖仁諒、海州の胸山に令たり、家を和州の歴陽に徙し、故に今は歴陽の人と為る。…夫人は人と為り柔閑静専、父母に事えては子道を尽くし、姑の長興県太君賈氏に事えては婦道を尽くし、夫に事えては妻道を尽くす。母と為りて内外の属人と接するに及びては、一<sup>ひと</sup>えに皆其の道を尽くす。故に其の処たるや、其の家に愛され、其の嫁するや、夫の属人上下遠近皆これを愛す。其の歿するや、これを哭する者皆哀しむ。

沈氏夫人は「姑の長興県太君賈氏に事えては婦道を尽くし、夫に事えては妻道を尽くし、母親として家庭内外の親族と接する時も「一<sup>ひと</sup>えに皆其の道を尽くした」とあって、貞節、孝行、従順、謹直などの女性の美德をすべて具えていた。女性は日常生活において執事頭の役割を果たしており、日常の事務処理は彼女たちの基本的な職責であった。これは彼の女性墓誌銘においてあちこちに見られるが、いくつか例をあげれば、「其の力を尽くし、飲食衣服を<sup>ととの</sup>治えて以て進め、喪に及びては、能く其の哀しみを尽くす、皆其の夫の志の如し」<sup>73</sup>、「父母の衣食服御は、これを待ちて後に安んず。既に嫁しては、惇行孝謹にして、其の家に宜し」<sup>74</sup>などである。これらの例から分かる通り、曾鞏は家庭における妻の役割を十分に認識していたようである。曾鞏は先ず何にもまして、妻は衣服を仕上げ、食事を整えといった多くの家庭の事務を負担せねばならないと考え、「飲食衣服を治えて以て進む」、「婦人法度の事を知り、針縷刀尺に

巧みなり」のように、家事に長じた女性を賞賛している。

次に曾鞏があげるのは、質素な生活である。彼は質素な生活を堅持する女性を讃える一方で、近頃の女性は「婦人室家に居りて自り、已に相い与に車服を矜り、首飾を耀かし、輩聚歎言するに侈靡を以て」<sup>75</sup>すると非難している。経済状態が悪い家庭にあって、質素な暮らしで家計を支える女性を曾鞏は常にたたえる。先にあげた例を引けば、曾氏は「勤儉を以て日を積みて其の家を大」<sup>76</sup>にしたし、王氏に嫁した妹は「王氏は故もと貧しく、垢衣菲食なるも未だ嘗て<sup>あきたら</sup>歉らずと為さず」<sup>77</sup>（「仙源縣君曾氏墓誌銘」）であったという。彼女らを曾鞏は強く推奨している。

さらに一歩進んで、女性は家族の構成員間の仲を取り持つ役割も担っていた。例えば薛氏は夫の家に嫁いでからというもの、「能く其の属人を和」<sup>78</sup>（「旌徳縣太君薛氏墓誌銘」）したし、曾鞏の妻の祖母は「夫人の人と為りは仁厚壯静にして、女為りて自り既に嫁するに及び、内外・尊卑・長幼・親疎の際に処りては、礼に当たりてこれを恩称せざる無し。」<sup>79</sup>（「壽安縣君張氏墓誌銘」）であったと激賞している。

最後にあげねばならないのは孝道である。儒家の伝統的な観念において、数ある徳行のうち、孝行が筆頭の地位に在ることは言うまでもなかろう。曾鞏の墓誌銘の中でも、婦道の一つの要素である孝行があちこちで取り上げられている。女性の孝行は、生みの親に孝養を尽くす行為より、夫に代わって嫁ぎ先の両親に孝養を尽くす行為の方がより大きな称賛を勝ち得る場合が多い。孝道は男女両性にとって一様に重要ではあるが、夫の年老いた両親の世話をする任務の多くを担ったのは女性であった。女性が夫に嫁いでからは、夫の妻になるだけでなく、相手の家族の一員となることの方がさらに重要であった。妻は夫の家庭において、すべての家族構成員及び友人との関係を引受ねばならなかった。先に述べたとおり、夫の両親、夫の兄弟姉妹、兄の嫁、弟の嫁などとの関係を調整するのが彼女たちの役割だったのだ。曾鞏は女性墓誌銘の中で、「父母に事えて其の教えに違わず、舅姑に事えて其の志に違わず、夫に事えては順

にして以て其の善を相くる有り、子より内外の属人に至るを遇するに、一えに恩を以てして礼に違わず<sup>80</sup>（「永安縣君李氏墓誌銘」）と李氏を讃え、「門を闔じて姑に事え、能く其の孝を尽くす」<sup>81</sup>（「池州貴池縣主簿沈君夫人元氏墓誌銘」）と沈君夫人元氏を誉めそやし、「能く吾が志に順う」（「知處州青田縣朱君夫人戴氏墓誌銘」）<sup>82</sup>と、夫の両親が嫁の戴氏を自慢した言葉を引用し、「父母姑舅を養いて皆至孝なり」、「其の内外の属に於けるや皆恩意を尽くす」<sup>83</sup>（「鄆州平陰縣主簿關君妻曾氏墓表」）と自ら孝養を尽くし、家族間の関係をよく調整した妹を賞賛している。

墓誌銘のみならず、彼が女性のために書いた詩文の中にも、曾鞏がこれらの婦徳を提唱した作品を見出すことができる。例えば「亡妻晁氏を祭る文」<sup>84</sup>は冒頭から「子には仁孝の行、勤儉の徳有り」で始まる。彼は「言に疵悔無く、動は衡規に応ず」と妻が婦道を守ったことを述べるだけでなく、「衣に穿弊有り、珥に光輝無し」と慎ましい生活を維持し、「親疏は悦慕し、稚艾は嗟咨す」と家庭を睦まじい雰囲気包み、「姑に事うるの礼、左右違ふこと無し」と孝道を守ったことを賞賛しており、「婦道を尽くす妻」という観念があますところなく現れている。

先にあげた「説内治」の中の当世の女性を非難したくんだり、「舅姑の養を顧みず、相い悦ばざれば則ち犯して相い直す。…其の舅姑に於いてすら然る爾、況や夫の昆弟、相い与に等夷為る者をや」<sup>85</sup>を併せ読む時、彼が孝道をいかに重視していたかその一斑を見ることができる。

### 3.2 夫に従う妻

第三章「梅堯臣の詠妻詩とその妻に対する観念」に於いて私は梅堯臣が妻の婦徳をたびたび賛美していたのを確認した。その一方で、彼らは互いに尊重しあい、親友と良友を兼ねた夫婦関係が成立していた。曾鞏の場合はどうであろうか。彼はそのような夫婦関係を認めていたであろうか。妹婿の母のために書いた「夫人周氏墓誌銘」で彼は書く。

夫人諱は琬、字は東玉。…既に嫁しては舅姑無く、夫に順い子を慈しみ、饋祀を厳にし、属人を <sup>やわら</sup> 諧ぐ。其の素学を行いて、皆儀矩に応ず。<sup>86</sup>

彼がここで触れているのは「夫に順い子を慈しむ」婦徳である。さらに岳父の姉のために書いた「永安縣君李氏墓誌銘」でも次のように述べる。

夫人の姓は李氏、其の先は燕の人なり。…夫人は駱氏に嫁し、駱氏もまた許州の長葛に家す。其の夫の諱は与京なり。…夫人は仁孝慈恕にして、言動は必ず義理を択ぶ。父母に事えては其の教えに違わず、舅姑に事えては其の志に違わず、夫に事えては順にして其の善を相くる有り。子より内外の属人に至るを遇するに、一えに恩を以てして礼に違わず。<sup>87</sup>

ここでも父母や舅姑に孝養をつくすほかに、「夫に事えては順にして其の善を相くる有り」と言っている。九十歳の天寿を全うした謝氏のために書いた「永安縣君謝氏墓誌銘」でも同様に「婦順」が強調されている。

宋の故衛尉寺丞王公諱は用之の夫人、尚書都官員外郎、贈尚書工部郎中諱は益の母、姓は謝氏、永安県君に累封せらる。…余既に夫人の諸孫と遊び、嘗て堂上に拜するを得たり。其の色は <sup>なご</sup> 和み、其の容は謹しめるを見、其の言は儉にして勤なるを聞く。退きて <sup>つま</sup> 婦為るや順、母為るや慈なるを聞き、其の福祿を享ける所以を知る、其れ宜なるかな<sup>88</sup>。

曾鞏が墓誌銘で推奨する理想の夫婦関係の中心概念は「妻順にして夫に従う」というものである。「既に嫁しては行に悖り色に勝り、男をして女に事えしめ、夫は婦に屈す」<sup>89</sup>（「説内治」）のような近來の女性の風潮に極力反対し、「吾れ未だ其の可なるを見ざるなり」（「説内治」）と言明している。また彼は「古語に曰く、福の興るや、室家に始まらざる莫し。道の衰うるや閭内に始まらざる莫しと。豈に風俗の厚薄、人道の邪正、寿夭の原は此に繋るに非ざらんか」<sup>90</sup>（「説内治」）と指摘している。儒教思想を基礎とする曾鞏は、女性の墓誌銘においても道德の普及、人倫の擁護を図っている

と言えよう。同時に「修身」「齊家」といった目標の達成も墓誌銘に託されているのである。

しかしその一方で曾鞏は「亡妻晁氏を祭る文」<sup>91</sup>でこうも述べている。

子には仁孝の行、勤儉の徳有り。宏裕にして端壯、聡明にして静黙なり。窮達にも能く安んじ、死生にも惑わず、以て古の淑人に齊しく、世の常則為るべし。…嗚呼哀しいかな。父は賢女を失い、姑は孝婦を亡い、子は嚴師を喪い、吾は益友を虧く。

曾鞏は「妻は順にして夫に従う」べしと提唱すると同時に、妻は自分の益友であったとも述べる。さらにこの祭文を味読すると、彼の筆下、その妻は道徳的な模範となっていた。曾鞏は夫婦間の愛情から生ずる悲しみに加え、「父は賢女を失い、姑は孝婦を亡い、子は嚴師を喪い、吾は益友を虧く」という家族全体の悲しみも書きこんでいる。晁氏が彼に残した最も忘れ難い思い出は、彼女が貧困に甘んじ、勤勉でよく家計を維持した点であり、さらに「言は疵悔無く、動は衡規に応ず」<sup>92</sup>（「亡妻晁氏を祭る文」）という人と為りであった。彼の悼亡詩「秋夜」<sup>93</sup>で彼は「平生肺腑の友、一訣空床を余す」と書いており、妻が心の奥底では気の置けない親友であったことが見て取れる。

曾鞏の夫婦関係には、「妻は順にして夫に従う」という準則のほかにも、益友という価値基準も存在したようである。この価値基準の主な特徴は、夫婦はモラルの面で互いに助け合うだけでなく、知的な面でも互いに啓発し合い、補完し合うというものであった。

### 3.3 夫を助ける妻

以上にあげた曾鞏の女性墓誌銘の例からも曾鞏が「婦道を尽くす妻」、「従順で夫に従う妻」という視点だけでなく、「夫を助ける妻」という彼独自の視点を持っていたことに我々は着目せざるを得ない。例えば自分の妹のために書いた「江都縣主簿王君夫

人曾氏墓志」<sup>94</sup>に言う、

試校書郎揚州江都県主簿王無咎の妻曾氏、…以て王氏に帰す。王氏の家は故より貧しく、曾氏は冢婦と為る。而して其の姑は蚤世し、独り家政に任ず。能く力を精くし、躬ずから労苦し、細微を理め、先後緩急に随いて樽節と為し、各の條序有り。事の時節に有るに、朝夕共に賓祭奉養し、其の門内を撫し、皆時とする所を失わず、恭嚴誠順を以て、能く其の属人を得たり。…其の夫歎じて曰く、我れ能く意を一にして、自ら官学に肆ままにし、私を以て其の志を累わさざるは、曾氏我を助くるなりと。…

家庭の内外にわたって整然と物事を処理できる有能な妻を持てば、夫は後顧の憂いなく治国平天下に精を出せるというものであり、夫は妻を「我れ能く意を一にして、自ら官学に肆ままにす、私を以て其の志を累わさざるは、曾氏我を助けるなりと」と絶賛する。同様に、北宋の著名な科学者であった沈括の母のために書いた「壽昌縣太君許氏墓誌銘」<sup>95</sup>の中で、はっきりと述べている。

夫人許氏は蘇州呉県の人なり。…父母の衣食服御は、これを待ちて後に安んず。既に嫁しては、惇行孝謹にして、其の家に宜し。其の夫は吏と為りて名有り、夫人は実にこれを相くと称す。

この二篇の墓誌銘では、どちらもその夫が正面から妻の役割を認め、賢妻が自分を助けてくれたと率直に告白している。さらに家庭の外で職務に専念し、名声を得たのは妻の功績もあると考えており、このような例は稀であると言えよう。

さらに、「故太常博士呉君墓誌銘」<sup>96</sup>では、自分の母のおばである朱氏に触れ、以下のように述べる。

君の諱は祥、字某、姓は呉氏、宋に事えて太常博士となる。…妻は朱氏、某県君、余の姨なり、君に助有り。

やはり彼の妹同様「君（夫）に助有った」妻を描いている。もう一つ、彼が戴氏のために書いた、「知處州青田縣朱君夫人戴氏墓誌銘」<sup>97</sup>でも、彼はそれに触れている。

夫人の考、諱は奎、徐氏の女を娶り、夫婦皆善行有りて、其の郷に聞こゆ。夫人は教  
えを始筭に受け、事に既嫁に従い、少くして行を身に修め、老いては教を家に行う。  
故に父母は、吾が憂いを遺さずと曰い、舅姑は、能く吾が志に順うと曰う。夫は其の助  
けを受け、子は頼りて以て成る。

妹婿の母のために書いた「福昌縣君傅氏墓誌銘」<sup>98</sup>にも次のような記述がある。

福昌君の家<sup>に</sup>在るや、父母の器異する所と為る。既に嫁しては夫属退言無し、布衣悪  
食、身ずから細微を<sup>ととの</sup>治う。…其の子を教うるや慈にして以て肅たり。關公進士より起  
こり、郎と為り、池台兩州と為り、年八十にして以て歸りて曰く、吾少くして力を官に  
尽くすを得、老いて自ら家に休むを得、家事を以て吾が志を累らわさざるものは、夫人  
有るを以てなり。

曾鞏の筆下のこれらの女性たちは、「内助」の行為により、「夫を助け子を教える」  
役割を演じていたことが見て取れるのである。曾鞏は儒家思想に基づき、「今の敵を放  
ち、古の制を考え」<sup>99</sup>てこそ「易に曰く、家を正して天下定まる」（「説内治」）という  
理想が達成できると考えている。

### 3.4 才能あふれる妻

以上の三点において、我々は曾鞏が抱いていた典型的な儒家思想の一面を観察する  
ことができた。しかし、彼の女性墓誌銘にもう一つ大きな、異彩を放つ特徴を見るこ  
とができる。それは女性の才筆に対する称賛である。例えば、「壽昌縣太君許氏墓誌銘」  
<sup>100</sup>で、

夫人許氏、蘇州呉県の人なり。考は仲容、太子洗馬なり。兄の洞は能文で名あり、国  
史に見ゆ。夫人は書を読みて大意を知り、其の兄の<sup>つく</sup>為る所の文は、輒ち能く誦を成す。

のように、許氏のすぐれた記憶力、読書力を讃える。また亡妻晁氏のために書いた  
「亡妻宜興縣君文柔晁氏墓誌銘」<sup>101</sup>でも、

文柔姓は晁氏、諱は德儀、字は文柔、年十有八にして余に嫁す。…人と為りは聡明、事に於いて迎見すれば立ちどころに解し、其の理を尽くさざる無し。其の概の見る可き者此の如し。

と述べ、「人と為りは聡明、事に於いて迎見すれば立ちどころに解し、其の理を尽くさざる無し」と率直に誉めている。「賢妻」に「才智」が加わっているのだから、より効果的に夫を助け、より合理的に家庭を切り盛りできるわけである。曾鞏の「夫人周氏墓誌銘」<sup>102</sup>にも同様な女性像を見出すことができる。

夫人の諱は琬、字は東玉、姓は周氏、父兄は皆明経に挙げらる。夫人は独り図史を喜び、好みて文章を為り、日夜倦まざること学士大夫の如く、其の舅邢起に従いて詩を為るを学ぶ。…詩七百篇有り、其の文は静にして正しく、柔にして屈せず、言に約にして礼に謹しめる者なり。…茲の道廢れ、夫人の学の若きは天性より出で、言行は法度を失わず、是れ賢とすべきなり。

周氏はインテリ女性と言えよう。周氏は書物を愛しただけでなく、創作もこなした。彼女が用いたのは平静純正で、柔和だが卑屈にならない、簡潔で礼法を守った表現であり、そのような作品が七百篇もあったのである。宋代の女性墓誌銘にあつて、このような描写は曾鞏以前そう多くない。妹の墓誌銘「江都縣主簿王君夫人墓誌」<sup>103</sup>にも次のような記述がある。

試校書郎揚州江都県主簿王無咎の妻曾氏、建昌の南豊の人にして、先君博士の第二女なり。孝愛聡明にして、能く書を読み古今を言う。婦人法度の事を知り、針縷刀尺に巧みにして、経手は皆絶倫たり。

ここでも「孝愛聡明にして、能く書を読み古今を言う」と妹が讃えられている。これらの聡明で才知に富み、「古今を言う」妻たちは、「賢妻」の役柄を演じるだけでなく、「良母」としての役割を担っていたであろうことは容易に想像がつく。曾鞏は女性墓誌銘において、到る処で女性が備えるべき子女の教育能力に言及し、母親は子女を最初に教育する、啓蒙の師の立場にある人間であるとして、その成長にとって重要な



役割を果たすと強調している。司馬光が『家範』で、「人の母為る者は、慈ならざるを患えず、愛を知りて教えを知らざるを患うるなり」<sup>104</sup>と言う通りである。宋代の人々はこの母親としての責任を非常に重視していた。「壽安縣君錢氏墓誌銘」<sup>105</sup>は次のように述べる。

夫人姓は錢氏。…夫人は色壯にして気仁、言動は繩墨を失わず、族人の長幼親疎の間に居りて其の宜しきを尽くす。夫に事えては其の忠を成さしめ、子を教えては其の孝を成さしむるは、是れ皆伝うべき者なり。

その他先に取り上げた「壽昌縣太君許氏墓誌銘」<sup>106</sup>では沈括の母で許氏が「夫に益有り、子に<sup>みちびき</sup>迪有り」であり、「子は披と曰う、国子博士たり、吏材有り。括と曰う、揚州司理參軍、館閣校勘たり、文学有り。其の幼きとき、皆夫人の自ら教うる所なり」であった。また王氏は、「人と為りは明識強記にして、凶籍を博覧す、子孫は学を受かり、皆自ら先生と為」(試秘書省校書郎李君妻太原王氏墓誌銘)<sup>107</sup>だったのであった。曾鞏が女性のために書いた二十五篇の墓誌銘の中で、母親となった女性の殆んどすべてが子女をきちんと教育し得たという理由で称賛されている。女性は子女の教育に対し大きな責任を負っていたため、曾鞏はきちんとした教養を身に着け、才智を具え、子供の教育に熱心な女性を激賞したのであった。

#### 第四節 「説内治」について

曾鞏の女性墓誌銘に現れている女性観を、これまでにたびたび引用した「説内治」<sup>108</sup>を材料として概括してみよう。以下にその全文をあげる。

(1) 古えの公侯卿大夫士は、惟だ外に淑<sup>よ</sup>きを行うのみに非ず、蓋し亦た閨門の助有るなり。詩の二南を考うるに、后夫人の事を言い、婦人の夫に於けるや、酒食を主どり、巾櫛を奉るのみならず、固より実<sup>まこと</sup>に以てこれを輔佐する有るを明らかにするなり。先王の制、閨門の内、姆媪師傅、車服珮玉、升降進退、起居奉養、皆條法有り。婦人は少く

して習い長じてこれに安んず。故に身を禋ただし家を正して過有ること莫し。

(2) 近世は然らず、婦人室家に居りて自り、已に相い与に車服を矜り、首飾を耀かし、輩聚歛言するに侈靡を以てし、悍妒大故だし。力を閥貴に負う者は、未だ人と成らざるに嫁娶す。既に嫁しては則ち行に悖り色に勝り、男をして女に事えしめ、夫は婦に屈し、舅姑の養を顧みず、相い悦ばざれば則ち犯して相い直す。その良人未だ嘗て能く以て婦を責め、又た反って其の親を望めざる能わずんばあらざる者幾だ少なきなり。其の舅姑に於いてすら然る爾、況や夫の昆弟、相い与に等夷為る者をや。祀祭賓客の礼有るや、自らは具えを為さず、人をしてこれを為さしむ。浣濯の服、蠶桑の務、古天子の後礼安にして常に行いし者なり。而して今の庶人撃妾これを言うを羞ず。姆媪師傅、佩玉儀節、蘋蘩を采り、棗脩を贅あつまるの事、則ち族りて笑いて曰く、我れ豈に是を能くせん。是れ我れの宜しきに非ざるなりと。一切礼に悖り、相い驕驚浮僻に趨るのみにして、其の夫を輔佐する所以を求むるも、可ならんか。

(3) 噫、古の士庶人の妻は礼義を乗るを知り、訓導に服す。而るに今の王公大臣の匹は反って能わず、怪しむべきなり。剪縷の工ならざる、刻画の善しからざれば、則ち恥じてこれを学ぶ。大倫大法の修めざるに至りては、矐然としてこれに安んじ、吾れ未だ其の可なるを見ざるなり。古語に曰く、福の興るや、室家に本づかざる莫し、道の衰うるや、閭内に始まらざる莫しと。豈に風俗の厚薄、人道の邪正、寿夭の原はこれに繋るに非ざらんか。其れ以て忽然として恣に流れて返らざる可きや。曰く、これを如何すれば返す可きやと。曰く、今の敵を放ち、古の制を考え、これを公卿大夫の家に先んずれば、茲れ可なりと。易に曰く、家を正して天下定まると。吾が説は疏ならんや。

この文章では、曾鞏は『詩経』の「周南」と「召南」を援用して、古代の妻たちが夫の飲食や日常生活を支えるのみならず、夫の輔佐を行った事を指摘している。これらの女性たちは、「閨門の内、姆媪師傅、車服珮玉、升降進退、起居奉養、皆條法有り」「少くして習い長じてこれに安んず。故に身を禋ただし家を正して過有ること莫し」とあるように、幼い頃から正統的な儒教の礼儀作法の教育を受け、自覚して儒教の生活規範を守り、家庭内の秩序を維持していた。曾鞏は儒家の礼儀作法を守り、家事を整然と処理し、同時に夫を輔佐できる妻を公然と賞賛している。

この文章の第二段落で、曾鞏は「近世」の女性たちの婦道に違う行動をあれこれあ

げつらっている。その一、曾鞏は「婦道を尽くす」という道理を理解しない女性がいると批判する。「室家に居りて自り、已に相い与に車服を矜り、首飾を耀かし、輩聚歛言するに侈靡を以て」すと言うように、彼女らは互いに贅沢を競い、質素儉約に努めない。その二、「妻は夫に従う」という道理を理解していないという批判。「未だ人と成らざるに嫁娶す。既に嫁しては則ち行に悖り色に勝り、男をして女に事えしめ、夫は婦に屈」すと文中に言うように、彼女たちは夫に従い妻の道を尽くすどころか、反対に夫を妻に迎合させ、妻に服従させるのである。その三、目上の人々に仕えず、孝養を尽くそうとしないという非難。「百善は孝を以て先と為す」〔百善孝為先〕という諺があるが、それに反し、大家庭に生きる女性として、目上の人々に対して「舅姑の養を顧みず、相い悦ばざれば則ち犯して相い直」すという態度をとっているのでは、同輩である夫の兄弟姉妹に対してどのような態度をとるかは想像に難くない。「其の舅姑に於いてすら然る爾、況や夫の昆弟、相い与に等夷為る者をや」と曾鞏が書いているとおりである。その四、曾鞏は妻たちが自分の手で家事をこなさないという悪習を非難する。「古天子の後礼安にして常に行いし者なり。而して今の庶人孳妾これを言うを羞ず」と彼が言う通り、古代の皇后たちが自ら従事した養蚕や祭祀などの項目を、今の女性たちは「<sup>あつま</sup>族りて笑いて曰く、我れ豈に是を能くせん。是れ我れの宜しきに非」ずと嘲笑する。曾鞏の下した結論は、「一切礼に悖り、相い驕驚浮僻に趨るのみ、其の夫を輔佐する所以を求むるも、可ならんか」であり、「近世」の女性たちの行動に相当強い違和感を持っていたことがわかる。理想と現実の乖離に曾鞏は気づき、きちんと向き合っていたのである。この「内治」こそ曾鞏を北宋の士大夫の中で特異な存在にしている文章であった。

『曾鞏集』の前言に「曾鞏の作品は「古今の治乱得失、是非成敗、人の賢不肖、以て当世の務めを弥綸するを致す。損益を勘酌し、必ず経に本づく」（曾鞏の文「曾鞏行状」）であり、儒家の道を用いて「衰うるを<sup>たす</sup>扶け<sup>たす</sup>欽けたるを救」（曾鞏の文「上歐陽学

士第一書) おうとし、古代の聖王の意に沿うという前提の下、法制度の改革を試みた」<sup>109</sup>と言うように、曾鞏は純粋な儒家であり、その經学思想は教化を中核としており、この基礎の上に改革を試みたのである。梅堯臣とは一見同じように見えて差異が存在している。

## 第五節 曾鞏と梅堯臣の妻に対する観念の比較

「唐宋八大家」の一人である曾鞏と、宋詩の「開山祖師」である梅堯臣(1002-1060)は年齢の差が17歳あったが、伝統の思想を継承していた点ではよく似ている。梅堯臣の妻に対する観念については第三章「梅堯臣の詠妻詩とその妻に対する観念」を参照されたい。

先ず、彼らの共通点であるが、それは妻の婦徳を高く評価している点である。それは、賢明な妻、厳しくかつ慈しみ深くもある母、夫の両親に孝養を尽くす嫁についての賞賛であるが、これは同時代の文人に共通する特徴なので、ここでは詳しくは述べない。ここで私が取り上げたいのは、自分の手を動かして家事を行う賢妻のイメージである。梅堯臣の詠妻詩に、「單舟匹婦更無婢、朝食每愧婦親炊／單舟 匹婦 更に婢無く、朝食 毎に愧ず 婦親から炊ぐを」(「途中寄上尚書晏相公二十韻」)、「是時値新歳、慶拜乃唯内。草率具盤餐、約略施粉黛／是の時新歳に値い、慶拜は乃ち唯だ内のみ。草率に盤餐を具え、約略に粉黛を施す」(「元日」)、「愚妻方罷沐、供飯愧倉卒。凍婢昧煎和、親調首忘髯／愚妻方に浴を罷め、飯を供して倉卒に愧ず。凍婢 煎和に昧く、親調して髯を忘る」(「奉和子華持國玉汝來飲西軒」)、などの描写が見られる。曾鞏も当時の女性が「浣濯の服、蠶桑の務、古天子の後礼安に常に行いし者なり。而して今の庶人擊妾これを言うを羞ず」<sup>110</sup>であるのを批判しているので、妻が家事に自ら手を下さず、他人にまかせようとする行為に反発していたことは明らかである。同時代人の曾鞏と梅堯臣は、文人の伝統的な一面を残しており、妻が女性の機能(服装、

食事などのすべての家事) を完全に果たすよう期待していた。更に一步進んで、妻たちが日常の家事を本分と心得、自覚を持って主体的に取り組むように望んでいた。

次にあげられるのは、女性の才学に対する高い評価である。宋代の女性は前代よりも高い文化的な素養を持っており、次第次第に世人の注目を集めて行った。梅堯臣であれ、曾鞏であれ、彼らは女性の才智を十分に認識していた。彼らの筆下に描かれる妻たちは高い読書力を持ち、自らの作品まで残している。彼女らは儒家の著作や、仏典を熟読し、子女を教育して有為の人材を育て上げた。梅堯臣の筆下では、「吾嘗て士大夫と語りしとき、謝氏は多く戸屏よ従り竊かにこれを聴き、間ひまあらば則ちことごと尽く其の人の才能賢否及び時事の得失を商榷し、皆条理有り」、「吾れ呉興に官し、或いは外自り酔いて帰るに、必ずや問いて曰く、今日孰と与に飲みて楽しむやと。其の賢なる者を聞くや、則ち悦び、否しからざれば則ち歎じて曰く、君の交わる所、皆一時の賢雋なり、豈に己を屈してこれに下るや。惟だ道德を以てするのみ、故に合う者尤も寡し。今是の人と飲みて飲ぶや？」<sup>111</sup> (欧陽修「南陽県君謝氏墓誌銘」)であった妻の謝氏がそのよい例である。曾鞏の筆下では以前に引いた、「人と為りは明識強記にして、図籍を博覧す、子孫は学を受かり、皆自ら先生と為」った王氏や、「詩七百篇有り、其の文は静にして正しく、柔にして屈せず、言に約にして礼に謹しめる者なり」<sup>112</sup>であった周氏などがその例である。

一方で彼らの相違点もはっきりしている。かいつまんで言えば、梅堯臣が追求したのは、平等な相互理解に基づく伴侶の関係であり、また彼は自分の妻の美貌を心から賛美しさえしたのである。「損益を勘酌し、必ず経に本づき、必ず仁義に止まる」<sup>113</sup> 人であった曾鞏は、「家は世よ儒為り、故に他を業とせず」<sup>114</sup> (「上歐陽学士第一書」) とあるように、儒家の伝統を継承する家庭に生まれ、知らず知らずのうちに、儒家の薫陶を受けたのであった。彼は一生を通じて儒家思想を遵守し、儒家の学問の研鑽に励んだ。長い間儒家文化の影響を受けた彼にしてみれば、妻の容貌を露骨に賛美する

わけにはいかなかったのであろう。曾鞏の女性に対する評価も、多くは道徳や人格の角度から行われており、これは彼の女性墓誌銘から実証することができる。二十五篇の女性墓誌銘において、妻の容貌など、外に現れた美の描写を見出す事はできない。次に彼が追い求めた理想の妻像であるが、夫に従う妻、夫を助ける妻、という伝統的な儒家思想の枠内のものであるとともに、「益友」としての妻という側面もあった。

その他曾鞏は、女性は嫁ぐ以前にきちんとした教育を受けなければならない、という考えを持っていた。このような思想が女性墓誌銘の中で提唱されることはそれほど多くないであろう。そのことを彼は「夫人周氏墓誌銘」<sup>115</sup>ではっきりと述べている。

昔先王の教えは独り士大夫に行わるるのみに非ざるなり、蓋し亦た婦教有らん。故に女子には必ず師傅あり、言動は必ず礼を以てし、其の徳を養うには必ず樂を以てし、其の行いを歌い、其の志を勸むると、夫のこれをして以て微を託して意を見しむるとは、必ず詩を以てす。此れ学ぶに非ざれば能わず、故に教えは内外に成り、其の俗は美なり易く、其の治は<sup>やわら</sup>治ぎ易きなり。茲の道は廢れ、夫人の学の如きは、天性より出で、言行は法度を失わず、是れ賢とすべきなり。

これらはすべて学習を通して達成されるのであり、女性に教化を行うことによって、一国の風俗は正され、一国は整然と統治されるのである。残念なことに、古代の聖王は女性に対する教化の道を心得ていたのに、現在は「茲の道は廢れ」てしまったのである。

曾鞏の女性墓誌銘の中に、我々は「婦道を尽くし」、「夫に順従し」、「其の夫を助ける」といった、称揚されるべき伝統的女性のイメージを見ることができる。同時にその女性墓誌銘には、女性の学才に対する賞賛と、女性に対する教育を推進せねばならないというメッセージを読み取ることができる。梅堯臣が悼亡詩をはじめとする詩作の中で、自らの大胆な見解を披瀝したと言うとすれば、曾鞏は、墓誌銘の中で自分の見解を表明したと言えるだろう。これが曾鞏の特異な点である。

中国の伝統文化の中で、女性墓誌銘の描写の基本原則は、实事求是であり、女性が伝統的普遍的観念に順応していることを称賛するのがその使命であった。具体的には、「女に外事無し」〔女無外事〕、「三従四徳」〔三従四徳〕、「貞女は二夫に事えず」〔貞婦不事二夫〕等などの正統的な観念である。もちろん、墓誌銘の作者は身分や人間関係を考慮して、様々な原則や観点に基づいて書き始める。例えば、友人の妻の墓誌銘を書く際には、家庭全体に対する貢献に大部分の紙幅を費やし、自分の妻の墓誌銘を書く時には、妻の自分に対する細心の気配りを強調するなどである。どのような人の墓誌銘を書くにせよ、内容は「其の世系名字爵里行治寿年卒葬年月と子孫の大略を述べ、石に勒して蓋を加え、壙前三尺の地に埋め、以て異時陵谷変遷の防ぎと為し、これを誌銘と謂う。其の用意は深遠にして、古意において害無きなり」<sup>116</sup>や、「誌銘の壙に埋めらるる者は、文は則ち嚴謹たり。…大抵碑銘は徳善功烈を論列する所以にして、銘の義は美を称えて悪を称えずと雖も、以て孝子慈孫の心を尽くす」<sup>117</sup>に他ならない。しかし、曾鞏の墓誌銘には、彼の实事求是の精神が見て取れると同時に、特にその女性墓誌銘において、読書を好み、才識を備え、詩作を遺した女性の躍動するイメージを豊富に読み取ることが出来るのである。交際の道具化し、内容と形式が固定化し、謹厳な文体を用いて書かざるを得なかったの墓誌銘というジャンルにおいて、曾鞏は規格外の、斬新な内容を溶け込ませていったのである。これこそ曾鞏の女性墓誌銘の際立った特徴ではないだろうか。

曾鞏が「国を治むるには必ず其の家を斉う」<sup>118</sup>というテーゼを意識していたことは明らかである。彼は女性に婦功などの教育を実施することにより国家の風紀を矯正しようと考えていた。先に述べたように、「曾鞏は儒家の道を用いて「衰えたるを扶け缺けたるを救」おうと主張し、「古代の聖王の意に沿うという前提の下、法制度の改革を試みた」（『曾鞏集』前言）のであった。そこで彼は伝統的な思想を継承したうえで、改革の道を探っていた。曾鞏が「説内治」の結論部分で、「古語に曰く、福の興るや、室家に本づかざる莫し、道の衰うるや、閭内に始まらざる莫しと。豈に風俗の厚薄、

人道の邪正、寿夭の原とこれに繋がるに非ざらんか。其れ以て忽然として恣に流れて返らざる可きや。曰く、これを如何すれば返す可きやと。曰く、今の敵を放ち、古の制を考え、これを公卿大夫の家に先んずれば、茲れ可なりと。易に曰く、家を正して天下定まると。吾が説は疏ならんや」<sup>119</sup>と述べる通りである。

## 第六節 小結

以上の論述から、曾鞏は儒家の思想を遵守すると同時に、その基礎に立って、儒家の思想を更新していたことが分かる。彼の女性墓誌銘には、いくつかの感動的なエピソードが含まれており、死者の姓名を記し、その人と為りや生涯を伝えるという実用性そして文学性を兼ね備えていると結論付けられるだろう。また、これらの墓誌銘から、曾鞏の抱いていた理想の妻像を見て取ることができる。現実の生活において、妻はまず家庭全体に対し大きな責任を担っており、勤勉で賢明、婦道を守り舅姑に孝養を尽くし、家族の構成員間の関係を調整し、夫に従順で、夫を補助する存在であった。次には、妻は機敏な執事頭でなければならない。自ら女性の仕事をこなすのと同時に、子女を教育し、家庭内の事務をきちんと処理せねばならない。このような妻のイメージから、曾鞏は規範的な女性を称賛するとともに、「古代の聖王の意に沿うという前提の下」、儒家の伝統に対し様々な改革を試みた事実を観察することができる。彼は女性に教育を施すことを提唱し、女性が学問をし、読み書きを身に着け、才華に富んだ女性に成長することを強く望み、日常生活で自分の役柄をきちんと演じ切るよう期待したのであった。曾鞏は女性墓誌銘を創作する過程で、現実生活の基礎に立ち、理想の妻のイメージを構築したのであった。



## 第五章

### 蘇軾の妻妾に対する観念

#### 第一節 蘇軾について

#### 第二節 亡き妻妾を追悼、回想した詩・詞・散文

#### 第三節 蘇軾が妻妾を描いた詩文の特徴

#### 第四節 蘇軾が妻妾を詠じた作品における継承と創造

#### 第五節 小結

## 第一節 蘇軾について

宋代の才子蘇軾（一〇三七年一～一〇一年）、字は子瞻、号は東坡居士、彼は詩・詞・散文に巧みなだけでなく、書画にも秀で、歐陽修・曾鞏の後を継ぎ、北宋文学界のリーダーとなった。彼は中国文学史上、著名な文学者、書家、画家であり、知らぬ人としてない人物と言えるだろう。蘇軾やその作品を研究する国内外の研究者は数知れず、絶え間なく研究成果が発表されている。蘇軾の詩・詞・散文の源流や、文学の表現の方法論に着目した研究論文はすでに数多く存在しているが、蘇軾の妻妾観については論及する人はあまり多くない。

蘇軾の文学は森羅万象を含んでいる。そのかなりの分量が女性のために費やされていること、女性の中にはもちろんかれの妻妾達が含まれていることを我々は無視できない。そうであるならば、蘇軾はいかなる角度から妻妾たちのイメージを再現しているのだろうか。蘇軾に描かれた妻妾たちはどのような日々を送っていたのか。蘇軾の妻妾たちと、同時代の文人の妻妾たちとの間にはどのような差異があったのか。蘇軾が描いた妻妾たちのイメージは、同時代の文人が描いた妻妾たちのイメージと比較してより個性的で、より精彩に富んでいたのであろうか。本論文において、蘇軾が妻妾を題材とした詩・詞・墓誌銘を分析することにより、蘇軾の妻妾に対する愛情の性質、結婚観を探究し、彼の妻妾観を明らかにしていきたいと考えている。

## 第二節 亡き妻妾を追悼、回想した詩・詞・散文

蘇軾はその生涯において、生活の伴侶として二人の妻と数人の妾を持った。妻はともかくとして、彼が何人の妾を持ったかについては確定する材料に欠けている。はっきりしているのは、「二人の妻」である正妻王弗、後添いの王閏之、妾の中では彼が寵愛した王朝雲、この三人だけである。偶然にしては出来すぎているが、三人とも王姓であり、残念なことに三人とも彼に先立ってなくなっている。王姓の女性は初めから非運の生れつきであったのか、あるいは波乱に満ちた生涯を送った蘇軾が、王姓の女

性たちに幸せな生活をもたらすことができなかつたのか、彼女たちはその死後、蘇軾に無限の追憶と悔恨を残したのであった。蘇軾はこの尽きせぬ思いを筆端に載せたのである。蘇軾の数多くの作品の中で、特に彼のロマンチックな詞の中で、どの作品が亡き妻妾の誰を対象に作られたのかを正確に考証する術はない。しかし以下に引用する作品のうち、「南郷子・集句」「南郷子・有感」（これらの二首は関連する論考の考証を借りて、亡き妻妾のために作られたと判断した）を除けば、蘇軾が亡き妻妾を悼み、回想した作品であると断言できる。

蘇軾の正妻王弗は、至和元年（一〇五四年）、十六歳の時に蘇軾に嫁ぎ、一〇五九年、長子蘇邁を生んだ。文字が読め、礼儀作法に通じ、内助の功を称えられる王弗は蘇軾と十一年の歳月を過ごした後、治平二年（一〇六五年）五月、不幸にして病没した。蘇軾が正妻王弗のために詠んだ詞には、千古第一の悼亡詞と称せられる「江城子・乙卯正月二十日夜記夢」、「南郷子・集句」そして墓誌銘としては「亡妻王氏墓誌銘」がある。

二人目の妻王閏之は、正妻の従妹であり、王弗が病没して三年後、一〇六八年に蘇軾に嫁した。当時王閏之が二十一歳、蘇軾が三十三歳であった。「女性の婚礼は遅らせることはできない、というのが長きに渡って続いた伝統であった。『礼記』によると、女性は十五歳から二十歳の間結婚せねばならない。男性は三十歳までに結婚せねばならない。法律の条文は、結婚できる最低の年齢を規定しているのに過ぎない。宋代では女性は十三歳、男性は十五歳であった。」<sup>120</sup>宋代では女性は十三歳で男性に嫁ぐことができた。当時二十一歳で蘇軾に嫁いだ王閏之は晩婚であったと言えよう。進士科に及第し、名声が揚がっていた蘇軾が彼女以外の美しい女性と結ばれるのは容易いことであつたに違いない。蘇軾はなぜそうしなかつたのか？「現代人にとってはまことに奇妙に思える親戚間の婚姻の習慣、すなわちなくなった妻の妹を娶るという習慣が存在した。確かに最初の妻がこのような建議をすることは極めて普遍的であつた。例えば、宋代の高級官僚韓琦は次のような事例を報告している。彼の息子の嫁呂氏（一

○三九～一〇六五) が二十七歳で臨終を迎えた時、夫に向って、「私の病は日々に重くなり、もはや治る見込みはありません。私には未婚の妹がおります。あなたが我々夫婦の誼を重んじて後添いにして下さるなら、きっと私の子供をかわいがってくださるでしょう。また、韓氏呂氏の関係も元の通りですから、私は安心して死んで行けます」…中国では、どの時代にも亡妻の妹を娶る例に事欠かないことを我々は知っているが、宋代にはこのような事例が特に多いように思う。」<sup>121</sup>この記述から類推するに、蘇軾の正妻王弗は従妹の品行を熟知しており、臨終の折に従妹に自分が残した息子の面倒を見させるように蘇軾に頼んだのではないだろうか。もちろん、様々な状況下、亡妻の妹を娶ることになったこともあります。例えば、姚勉「梅莊夫人墓誌銘」<sup>122</sup>に書いてあるように、姚勉本人が望んで妻の妹を娶っている場合もある。蘇軾より十一歳年下の王閏之は幼いころから抜群の才能に恵まれた従姉の夫を崇拜し敬服していたに違いない。この類推が正しければ、その後、王閏之は王弗の願い通り、王弗の子どもと、自分の二人の子どもを「三子一の如く、愛は天より出ず」（「祭亡妻同安郡君文」）<sup>123</sup>とあるように平等に育て上げた。蘇軾とともに過ごした二十五年の時間の中で、従姉が残した蘇邁の世話をするとともに、自分の二人の子ども蘇迨（一〇七〇年生）、蘇過（一〇七二年生）を教育した。この二十五年間は蘇軾が官界で浮沈を繰り返した困難な時期であった。北宋の元祐八年（一〇九三年）八月一日、四十六歳の王閏之は京師で病死した。蘇軾が彼女のために書いた作品には、散文としては「阿彌陀佛贊」「釋迦文佛頌並引」「書金光明經後」、詩としては「聞正輔表兄將至以詩迎之」等がある。このほかにも、元祐八年（一〇九三年）に書いた祭文「祭亡妻同安郡君」や、詞の「南郷子・有感」「蝶戀花・泛泛東風初破五」がある。

蘇軾が妻妾のために残した作品の中では、妾の王朝雲を描写した作品が最も多い。朝雲の身の上については蘇軾が書いた「朝雲墓誌銘」<sup>124</sup>からいささか推察することができる。

東坡先生の妾は朝雲と曰う、字は子霞、姓は王氏、錢塘の人なり。敏にして義を好み、先生に事うること二十有三年、忠敬なること一の如し。紹聖三年七月壬辰、惠州に卒す、年は三十四。

朝雲が紹聖三年（一〇九六年）に亡くなった時、三十四歳であったとすると、生まれたのは一〇六二年、すなわち嘉佑七年ということになり、蘇軾より二十五歳若い。

「先生に事うること二十有三年」によって熙寧七年から蘇軾に従ったとわかる。蘇軾年譜によると、熙寧七年には蘇軾は杭州通判の職に在り、朝雲は十二歳で蘇軾の侍女となった。元豊六年（一〇八三年）九月二十七日、二十一歳の朝雲は遯を産んでいるから、元豊六年以前、二番目の妻王閏之がまだ健在な時に、朝雲は妾として蘇軾に仕え始めていた。

蘇軾が「朝雲詩」で「余の家には数妾有り、四五年にして相継いで辞去す。」と言うように、蘇軾には数人の妾がいたらしいのだが、彼女たちを詠った作品はなく、朝雲のために書いた作品だけが数多く残されている。散文としては「朝雲墓誌銘」「惠州薦朝雲疏」、詩としては「哭幹兒二首」「朝雲詩」「和陶和胡西曹示顧賊曹」「悼朝雲」「丙子重九二首」、詞としては「南歌子・雲鬢裁新緑」「浣溪沙」「浣溪沙・輕汗微微透碧紈」、「殢人驕・白髮蒼顏」、「三部楽・美人如月」、及び悼亡詞の「西江月・玉骨那愁瘴煙霧」、「雨中花慢・嫩臉羞蛾因甚」などの作品がある。

蘇軾を研究した論著のなかでも、蘇軾と愛妾王朝雲を扱ったものは数多い。例えば、曾棗壯の「東坡詞中的朝雲」あるいは林語堂の『蘇東坡伝』第二十六章の「仙居」（合山究氏の翻訳では「朝雲とのロマンス」となっている）等があるが、蘇軾と王弗、蘇軾と王閏之の関係を専門に論じた論著はほとんど存在しないといってよい。アメリカのカリフォルニア大学デービス校Beverly Bossler（ベヴァリー・ボスラー）は、その「北宋知識人階層の社会生活における家妓の役割に関する考察」の中で次のように述べている。「朝雲への文章と蘇軾が二人の妻へ向けて書いた文章とを比較すると前者における間接的かつ率直な愛情の表現が非常に際立っている。1065年蘇は最初の妻の死

に対する墓誌を書いているが、それらは彼が母親に命じられて書いたものだという事が碑文の中から伺える。……蘇軾は彼が惠州に左遷される少し前に亡くなった二番目の妻に対する追悼碑を書いていない。彼は彼女の為に四つの詩を作詩しているが、その内三つは単に彼女の記憶の中で描かれた仏の想像図に対して呈したものであり、その内の二つは蘇軾の息子が原因で書き始めたものである。蘇が二番目の妻の為に書いた最も個人的な文章は祭文である。それは彼女がよき妻であり母であった事と、何も言わずに彼について南方（左遷された初期の段階）へ来た事を褒め称えているが、明確な深い愛情を表してはいない……」<sup>125</sup>。これは真実であろうか。上記の引用文集に「1065年蘇は最初の妻の死に対する墓誌を書いているが、それらは彼が母親に命じられて書いたものだという事が碑文の中から伺える」とあるが、蘇軾の母親は嘉佑二年（一〇五七年）になくなっており、彼の最初の妻は治平二年（一〇六五年）に死んでいるので、蘇軾は確かにこの年に亡妻のために墓誌名を書いている。蘇軾の母が亡くなってからすでに八年経過していて、どうして母が彼に嫁の墓誌銘を書くように命じることができようか？この他、確かに蘇軾が王朝雲に残した作品が最も多いこと、朝雲に対して率直に愛情を表明しているということは認めよう。しかし正妻王弗と第二の妻王閏之に対する明確な愛情を表明していない、というのはどうであろうか。蘇軾が三人の妻妾を対象として書いた作品の中に、信頼すべき解答を見出していこう。蘇軾はこの三人の女性に対して本物の愛情を抱いていたのであろうか。彼の理想の女性像、妻妾に対する価値基準とはどのようなものであったのか。これらの問題を追及していきたいと考えている。

### 第三節 蘇軾が妻妾を描いた詩文の特徴

蘇軾は妻妾のために多量の作品を書いたわけではない。しかし、さほど多くない作品の中に、非常に新鮮なイメージを見ることができる。この三人の女性は朝夕蘇軾と生活を共にしていたので、蘇軾は自らの真実の経験、考え方を筆端に載せており、我々

はそこから彼の妻妾に対する態度や評価を汲み取ることができる。蘇軾の妻妾描写には次のようないくつかの特徴が見られる。一、詩と並び宋代に流行した文学ジャンルであった詞において、妻妾の美貌を堂々と讃えた。二、妻妾の高潔な人格を称賛し、彼女たちに対する敬意を表明した。三、妻妾の情感を尊重し、才智を称え、彼女たちの人間としての存在価値を肯定した。四、彼の深い仏教信仰の反映として、たびたび亡き妻妾たちの法事を行い、冥福を祈る文章を何篇も書いた。以下逐条的に見ていこう。

### 3.1 詩と並び宋代に流行した文学ジャンルであった詞において、妻妾の美貌を堂々と讃えた

蘇軾の作品、とりわけ詞作の中において、蘇軾が女性の容貌をいかに重視していたかを観察することができる。貴婦人であれ、庶民の女性であれ、舞姫であれ、彼の手にかかるとどの女性も比べようもない、人を驚かす美貌に描かれる。「南郷子・集句」（一〇五四年作）という作品を挙げる。

寒玉細凝膚	寒玉 細凝の膚
清歌一曲「倒金壺」	清歌 一曲 倒金壺
冶葉倡條徧相識	冶葉 倡條 徧く相識る
爭如	争でか如かん
豆蔻花梢二月初	豆蔻 花梢く 二月の初めに
年少即須臾	年少は即ち須臾にして
芳時偷得醉工夫	芳時に酔工夫を偷み得たり
邏帳細垂銀燭背	邏帳 細かく垂る 銀燭の背に
歡娛	歡娛す
豁得平生俊氣無	平生の俊氣を豁 <sup>す</sup> て得 <sup>いな</sup> るや無や

葉嘉瑩主編の『蘇軾詞新釋輯評』<sup>126</sup>の「講解」は言う、「南郷子」は仁宗至和元年

(一〇五四年) 二月あるいは二月以後に作られた。東坡は当時十九歳で、「年少」と自称している。その年王弗を妻に迎え、王氏は時に十六歳であり、まさに豆蔻の年頃であった。この詞は新婚を記念した作品である。」この説に従えば、この詞の内容から蘇軾の妻王弗の容貌に対する称賛の念をはっきりと看取することができる。「寒玉細凝膚」は妻の肌の美しさを描写する。寒玉のように白く輝き、透明感にあふれ、細やかに凝脂みなぎる肌、蘇軾はこのように王弗の容貌をほめちぎる。「清歌一曲」は妻の声の美しさを表現し、「冶葉倡條」は柳のようななよなよとした肢体を描出している。蘇軾によれば、妻王弗は美貌と才芸を一身に兼ね備えた女性であった。次の詞「南郷子・有感」においても、蘇軾はある美しく優雅な妻のイメージを形成している。

冰雪透香肌	冰雪のごとき香肌透 <small>あら</small> われ
姑射仙人不似伊	姑射仙人も伊 <small>かれ</small> に似かず
濯錦江頭新様錦	濯錦江頭の新様の錦
非宜	宜しきに非ず
故著尋常淡薄衣	故に尋常の淡薄の衣を著る
暖日下重幃	暖日に重幃を下ろし
春睡香凝索起遲	春睡に香凝りて起きるを索むるも遅し
曼倩風流縁底事	曼倩の風流 底事 <small>なにごと</small> に縁る
當時	当時
愛被西真換作兒	愛されて西真 <small>よぼ</small> に児と換作る。

薛瑞生の『東坡詞編年箋證』<sup>127</sup>卷三の「考證」は次のように言っている、「「年譜」「紀年録」「總案」は失載し、朱、龍は編年せず。「蝶戀花・泛泛東風出破五」と合せ観るに、此の詞は蓋し公の継室王氏夫人閨之の為の作と臆おもえり。」これが正しいとするならば、この詞も同様に二人目の妻王閨之の外貌やスタイルを描写した作品にほか



ならない。東坡の眼中にあつては、妻王閏之の肌は氷のごとく白晳であつて柔らかく、淡く香気を発しており、神話の姑射山中に住む美しい神女のようにあつた。しかし、神女と愛妻を較べると、妻の美貌のほうが一枚上手であるとさえ言明している。「不似伊」の三文字は、東坡がいかに妻を愛していたかを物語っているし、妻の美貌がいかに自慢であつたかが見て取れる。同様の描写は朝雲を対象として作った「西江月・玉骨那愁瘴煙霧」（一〇九六年作）にも見られる。

玉骨那愁瘴霧	玉骨  那んぞ愁えん瘴霧を
冰姿自有仙風	冰姿自ずから仙風有り
海仙時遣探芳叢	海仙  時に 遣 <sup>つか</sup> して芳叢を探らしむ
倒挂緑毛么鳳	倒しまに挂かる緑毛の么鳳あり
素面常嫌粉澆	素面常に粉澆を嫌う
洗妝不褪唇紅	洗妝するも唇紅を褪せしめず
高情已逐曉雲空	高情已に曉雲を逐いて空しく
不與梨花同夢	梨花と夢を同じくせず

瘴厲の地である惠州に身を置く朝雲は、この地に咲く梅の花の如く、氷や雪のように白い肌と、神仙のような雰囲気を漂わせている。「素面常に粉澆を嫌う、洗妝するも唇紅を褪せしめず」化粧を施したとして、彼女が生まれながらに備えている化粧が必要ないほどの美貌のである。また、「三部楽・美人如月」（一〇九五年作）は次のように詠う。

美人如	美人は月の如し
乍見掩暮雲	乍ち暮雲に掩わるるを見
更増妍絶	更に妍絶を増す
…	…
今朝置酒強起	今朝  酒を置くに強いて起き
問為誰減動	問う誰が為に一分の香雪を
一分香雪	減動するやと

何事散花卻病	何事ぞ散花 卻って病み
維摩無疾	維摩 疾無きや
卻低眉	却 <sup>ま</sup> た眉を低くし
慘然不答	慘然として答えず
唱金縷	金縷を唱い
一聲怨切	一声 怨切たり
堪折便折	折るに堪えれば便ち折るべし
且惜取	且つ惜取せよ
年少花發	年少にて花發するを

もう一首、「殢人嬌・贈朝雲」（白髮蒼顔）（一〇九五年作）がある。

白髮蒼顔 正是維摩境界	白髮にして蒼顔 正に是れ維摩の境界なり
空方丈散花何礙	空たる方丈 散花 何ぞ礙 <sup>さまたげ</sup> あらん
朱唇筋點 更髻鬢生彩	朱唇 筋點、更に髻鬢 彩りを生ず
這些箇千生萬生只在	這些箇は千生万生 只ら在り
好事心腸	好事の心腸
著人情態	人に著 <sup>なじ</sup> むの情態
閒窗下斂雲凝黛	閒窗の下 雲を斂め黛を凝らす
明朝端午	明朝は端午
待學紉蘭為佩	蘭を紉ぎて佩と為すを学ぶを待ち
尋一首好詩	一首の好詩を尋ねて
要書裙帶	要 <sup>かならず</sup> 裙帶に書すべし

東坡が晩年に惠州で朝雲に書き与えた詩や詞においては、「維摩」と自称し、朝雲を「散華の天女」に喩えている。例えば、「殢人嬌・贈朝雲」白髮蒼顔には「白髮にして蒼顔、正に是れ維摩の境界なり。空なる方丈 散花 何をか礙あらん」とあり、「朝雲詩」にも、「天女 維摩 総べて禪を解す」という句がある。『維摩詰經』觀眾生品第七<sup>128</sup>には「時に維摩詰の室に、一天女有り。…諸大人説く所の法を聞くを見て便ち

に身を現し、即ちに天華を以て諸菩薩大弟子の上に散ず。化して諸菩薩に至るに即ちに皆墮落し、大弟子に至るに便ち著きて墮ちず…」とある。天女散華は、色戒が已に尽きたか否かを試すリトマス試験紙であり、菩薩のような悟りを得た人物は、花が身に付着しないし、結習がまだ除かれていない人物は、花が体に付着して落ちないのである。「三部楽・美人如月」には「何事ぞ散花 卻りて病み、維摩 疾無きや」とあり、東坡が自らを維摩に喩えており、「空なる方丈 散花 何をか礙あらん」という句は、自分が已に「無塵無垢」なる境地に達しており、朝雲が散華しても問題ない、と主張しているのである。「三部楽・美人如月」が朝雲を詠った作品であることにまちがいはない。

「三部楽・美人如月」では蘇軾は力をこめて朝雲という美しいが、病気でやつれてしまった「美人」のイメージを浮き彫りにしている。この「美人」は明月のように輝いていて、やつれた面影は更に艶麗さを増し、薄雲に覆われた月のように、ありとあらゆる姿態を呈している。「暮雲に掩われ」という三文字で病中の西施のように美しさを増した朝雲を表現しているのである。蘇軾は具体的に朝雲の容貌のどこが美しいと描写しているわけではなく、さえざえとした光を放つ月に彼女の容貌を喩えており、女性の脱俗の美を描きこそすれ、蠱惑的な美しさは感じられない。「落ち尽くす一庭の紅葉」といった物寂しい秋の風物の中、「眉を低くし、慘然として答えざる」憂愁にとらわれた悲しげな女性のイメージが紙上に躍動している。「殢人嬌・贈朝雲」では、この散華の仙女は「朱唇 筋點たりて、更に髻鬢 彩りを生ず」と形容され、サクランボのように小さな唇、雲なす髪の持ち主である。さらに注目せねばならないのは、蘇軾が「蘭を纫ぎて佩と為す」を用いて朝雲を賛美している点である。「蘭を纫ぎて佩と為す」は屈原作『楚辞』<sup>129</sup>離騷が出典である。〔紛吾既有此内美兮、又重之以修能。扈江蘺與辟芷兮、纫秋蘭以為佩。〕この句の「江蘺」、「辟芷」、「秋蘭」はすべて香草であって、屈原はこれらの語彙を使い、自らの内面の美しさに喩えている。すなわち文中の「好事心腸」がそれに当たる。蘇軾は屈原が自らの内側の品德を讃えた語彙を使

って朝雲を讃えているのである。そうすることによって蘇軾は朝雲に対する敬慕の念を表明し、更に「淤泥より出でて染まらざる」、内心の美に満ち溢れた愛妾のイメージを形成しているのである。以上の例から、蘇軾が読者に向かって呈示した妻妾たちの非凡な容貌とスタイルのイメージを感じ取っていただけたと思う。

### 3.2 妻妾の高潔な人格を称賛し、彼女たちに対する敬意を表明した

蘇軾が描いた妻妾たちは、容貌に秀でてだけでなく、内面の美しさも併せ持っていた。蘇軾は「亡妻王氏墓誌銘」<sup>130</sup>（一〇六六年作）の中で次のように書いている。

君諱は弗、眉の青神の人、郷貢進士方の女なり。生まれて十有六年にして軾に帰ぐ。子邁有り。君の未だ嫁がざるや、父母に事え、既に嫁いでは、吾が先君先夫人に事う。皆謹肅を以て聞こゆ。

これは蘇軾が初めの妻王弗を追悼して書いた墓誌銘である。十六歳で人妻となった王弗は、「君の未だ嫁がざるや、父母に事え、既に嫁いでは、吾が先君先夫人に事う。皆謹肅を以て聞こゆ。」とあるとおり、父母、嫁ぎ先の両親を問わず、誠実に孝養を尽くした人であった。

同様に、彼の二番目の妻王閏之も、賢明で慈しみ深い品性と、従順な性格を備えていた。「南郷子・有感」の後半部でも、王閏之の勤儉実直な品格に触れている。詞人は、「濯錦江頭の新様の錦、宜しきに非ず、故に尋常の淡薄の衣を著る」と詠い、きらびやかな錦織の衣服は王閏之には似つかわしくなく、普通の地味で素朴な衣服を身に着けたいと願っていた。

「祭亡妻同安郡君文」<sup>131</sup>（一〇九三年作）で、蘇軾は王閏之の品德を高く評価している。

嗣<sup>つ</sup>ぎて兄弟と為り、君の賢<sup>けいてい</sup>なるに如くは莫<sup>な</sup>し。婦職既に修め、母儀<sup>ほなほ</sup>甚だ敦し。三子一

の如く、愛は天より出<sup>い</sup>ず。我に<sup>したが</sup>従<sup>い</sup>て南行するに菽水なれども欣然たり、湯沐兩郡なれども、喜びは顔に見<sup>あらわ</sup>れず。

「嗣<sup>つ</sup>ぎて兄弟と<sup>けいてい</sup>為り、君の賢なるに如くは莫<sup>な</sup>し。婦職既に修め、母儀<sup>はなば</sup>甚<sup>だ</sup>敦し。」とあるように、蘇軾は妻に対し、賢明さは誰も及ぶ者とてなく、女性が身に付けるべき技芸にすべて熟達し、言動はすべて母親の規範を満たしていた、という最大級の賛辞を贈っている。更に得がたいことには、彼女は、「三子一の如く、愛は天より出<sup>い</sup>ず。」という一視同仁の態度を以て前妻が残した息子と、自分の二人の息子を育て上げたことである。蘇軾が王閏之のために作った詞「蝶戀花・泛泛東風初破五」（一〇九〇年作）でも、次のように詠っている。

泛泛東風初破五 泛泛たる東風 初破の五  
江柳微黄 江柳 微かに黄ばみ  
萬萬千千縷 万万 千千の縷  
佳氣鬱蔥來繡戸 佳氣 鬱蔥として繡戸に來り  
當年江上生奇女 当年 江上 奇女を生む

一盞壽觴誰與舉 一盞の壽觴 誰の与にか挙げん  
三個明珠 三箇の明珠は  
膝上王文度 膝上の王文度なり  
放盡窮鱗看圍圍 窮鱗を放ち尽くすも圍圍たるを看て  
天公為下曼陀雨 天公 為に下す曼陀の雨

「三箇の明珠は、膝上の王文度なり」の部分では、「祭亡妻同安郡君文」と同様に、三人の息子を一視同仁に扱っていたことを讚美している。「祭亡妻同安郡君文」の他の部分では「我に従<sup>い</sup>て南行するに、菽水なれども欣然たり。湯沐 兩郡なれども、喜びは顔に見<sup>あらわ</sup>れず」と述べており、王閏之は榮耀榮華に対してはとても淡白で、逆境にも泰然としていた。王閏之が伝統的な美德を備えた女性であったことは明らかであ

る。妻の聡明さにより、蘇軾の彼女に対する情愛が増したのに違いない。この他、次のテキストにもその一斑が表れている。

客曰く、今者の薄暮、網を挙げて魚を得たり、巨口細鱗、状は松江の鱸に似たり。顧だ安にか酒を得る所ぞと。帰りて諸を婦に謀る。婦曰く、我に斗酒有り、これを藏すること久し。以て子の不時の需めを待つ。（「後赤壁賦」<sup>132</sup>・一〇八二年作）

小兒不識愁	小兒は愁いを識らず
起坐牽我衣	起坐して我が衣を牽く
我欲嗔小兒	我は小兒を <small>しか</small> 嗔らんと欲するに
老妻勸兒癡	老妻は勸む小兒は痴なり
兒癡君更甚	兒は痴なれども君は更に甚だし
不樂愁何為	楽しまず愁えて何をか為さんや
還坐愧此言	坐に還りて此の言に愧ずるに
洗盞當我前	盞を洗いて我が前に當つ
大勝劉伶婦	大いに勝る劉伶の婦の
區區為酒錢	區區として酒錢の為にするを

（「小兒」詩・一〇七五年作）

友人が蘇軾を赤壁の夜遊にさそってくれたが、酒の肴はあっても、酒がない。蘇軾は賢妻が折々自分のためにこっそりと酒を貯えておいてくれていることをよく知っていたため、妻に話してみると、案の定願いがかなったのである。このような細やかな描写は夫の妻に対する感激の情を婉曲に表わしていないだろうか？自分が「小兒を嗔らんと欲」した時には、「小兒は痴なり、兒は痴なれども君は更に甚だし、楽しまずして愁えて何をか為さんや。」と慰めてくれ、「盞を洗いて我が前に當」いてくれたそうである。この短い表現の中に、妻が温かい言葉をかけて夫の胸をすっきりさせ、杯を洗い、爛酒を注いでくれる日常生活の一コマが読者の眼前に再現されている。人情の機微によく通じた妻のイメージがしなやかに蘇ってくる。自分は「區區として酒錢の為にする」「劉伶の婦」にはるかに勝る賢妻を持っていると手放しで喜んでいるのも不思議はない。

子還可責同元亮　　子の還<sup>な</sup>お責む可きは元亮に同じきも

妻卻差賢勝敬通　　妻は却<sup>やや</sup>って差だ賢にして敬通に勝れり

若問我貧天所賦　　若し我が貧しきは天の賦する所と問わば

不因遷謫始囊空　　遷謫に因りて始めて囊空しからざるなり

（「次韻和王鞏六首」之五・一〇八六年作）

「元亮」は陶淵明を指し、「敬通」は馮衍を指す。林語堂は言う、「蘇東坡の家庭はとても幸せであった。ある詩の中で彼は自分の妻が聡明さと徳性を兼備していると褒め称えている。自分の妻は、彼の友人たちの妻や、歴史上数多くの学者たちの妻のように夫を虐待することはないのだ、と彼は言いたいようである。彼の長男蘇邁は時に詩を書いたが、彼を含めて蘇軾の子供たちには左程の才華はなかった。晋朝の大詩人陶潛も一切を天命に任せようという心情で「責子詩」を作り、子どもたちは一人も物にはならなかったが、それは天の配剤であり自分には無関係だとして、「天運　苟くも此の如ければ、且つ進めん杯中の物」と書いた。蘇東坡は「子の還お責む可きは元亮に同じきも、妻は却って差だ賢にして敬通に勝れり」と述べている。「敬通」は後漢の学者である。蘇東坡はこの句に「僕の文章は馮衍に逮ばざると雖も、慷慨大節は乃ち此の翁に愧じず。衍は世祖の英容好士に逢うも独り遇わず、流離擯逐せらるること、僕と相い似たり、而して其の妻妒悍甚だし。僕此の一事を少く、故に「敬通に勝る」の句有り。という自註を加えている。」<sup>133</sup>

先に述べたように、蘇軾は元豊六年以前、二番目の妻王閏之が健在な時に朝雲を妾とした。当時にあつては、封建時代の正統な士大夫が妾を持つことは極めて自然なことであった。しかし妻たちは泰然とした態度を維持し、嫉妬をしなかったのであろうか？馮衍の妻のように凶猛で嫉妬深い妻は存在しなかったのであろうか？そこで林語堂は次のような結論に至った。「蘇東坡の妻が杭州で朝雲を買った時、彼女はたった十二歳であった。宋代の呼称では、彼女は蘇夫人付きの妾ということになる。妻の侍女

が昇進して夫の妾になることは、古代中国ではごく普通の事であった。このような妾はどの角度から見ても夫人の助手と言えらるだろう。妻が夫の面倒を見る際に、妾は普通の侍女よりもずっと使い勝手がよかった。必ずしも夫を避ける必要がなかったからである。」<sup>134</sup>。王閏之のこのような性質によって蘇軾はとても気分よく日常生活を送ったに違いない。この他にも、蘇軾の弟蘇轍が書いた「亡嫂王氏を祭る文」<sup>135</sup>にも、この妻の賢明さと気立ての優しさが表れている。

兄は剛にして塞<sup>まこと</sup>、物或いは容れず。既に以て世に名だたるも、亦た以て逢わず。轍は驟かに従い、初めは未だ憂うるを免れず。嫂は婦人を以てこれに処するに優なり。兄は語言<sup>よ</sup>に坐りて、叢棘に收畀せらる。邾城に竄逐せられて、以て自ら食する無し。還るを賜りて来り、歳は未だ期に及ばず。西垣に飛集し、遂に北扉に入る。貧富戚忻、観る者尽く驚く。嫂は其の間に居り、色声を動かさず。冠服肴疏、率いて其の先に従う。性固よりこれ有り、学びて然るに非ず。族人は咨嗟し、行いを観て報を責む。

王閏之の優しく思いやりある態度によって、妾朝雲の存在も東坡の心の奥深いところまで浸透して行ったのではないだろうか。もちろん、朝雲が単に若くて美しいだけの女性であったら蘇軾の気持ちをここまで引き付けたはずがない。蘇軾より二十五歳年下の朝雲も二人の妻同様にまことに得がたい高潔な人格を備えていた。蘇軾の「朝雲詩並びに引」<sup>136</sup>（一〇九四年作）の引子の部分を見てみよう。

楽天も亦た云う、病は楽天と相伴<sup>とど</sup>いて住まり、春は樊子に随いて一時に帰ると。則ち是れ樊素<sup>ついで</sup>竟に去るなり。予が家に数妾有り、四五年相継<sup>あいつ</sup>いで辞去す。独り朝雲のみ予に随いて南遷す。楽天の集を読むに困りて、戯れに此の詩を作る。朝雲姓は王氏、錢唐の人なり。嘗て子<sup>かんじ</sup>有り幹児と曰う、未だ期ならずして夭すと云う。

この詩の中で、蘇軾は「予が家に数妾有り、四五年相継<sup>あいつ</sup>いで辞去す。」と自分には何



人かの妾がいたと明かし、数人の妾の中で、災難を蒙り南方に追放された自分についてきてくれたのは、「忠敬 一の如」き朝雲だけだったと述べている。紹聖三年（一〇九六年）、朝雲のために自身が書いた「朝雲墓誌銘」<sup>137</sup>では次のように言っている。

東坡先生の妾は朝雲と曰う、字は子霞。姓は王氏、銭塘の人なり。敏にして義を好み、先生に事うること二十有三年、忠敬なること一の如し。

この二篇の詩文によって、朝雲が蘇軾に二十三年仕えた（一〇七四年から一〇九六年に亡くなるまで）事がわかる。この二十三年間、蘇軾は官界で浮沈を繰り返し、杭州、密州、徐州、黄州等の地方都市と都を行ったり来たりしている。蘇軾は新法党と旧法党の紛争の影響を受けた。この間、「烏台詩案」が起こり、二回にわたり流刑となり、大きな打撃を被った。権勢を失った人間に対しては、多くの人が交際を避けようとするものだが、蘇軾の周辺の人々も次々に彼から離れていく中で、朝雲は彼の側を離れようとしなかった。一〇九四年、蘇軾は伝染病や瘴気に満ちた嶺南の惠州に流されたが、一般人から見ればこれは死刑判決を受けたのに等しかったのである。ところが、朝雲は一切を顧みず、蘇軾とともに惠州にやって来た。これで蘇軾が感激しなかったはずはない。そこで、蘇軾は彼女の墓誌銘の中で、「敏にして義を好み」、「忠敬なること一の如し」と称賛している。残念なことに、二年後（一〇九六年）、三十四歳の若さの朝雲は惠州で病死した。その時蘇軾は六十一歳であった。老いて体が弱くなった蘇軾がこの愛妾を諦めきることがどうしてできたのだろうか？彼は自らの悲しみを文章に表現するしかなかった。「惠州にて朝雲を薦むる疏」<sup>138</sup>（一〇九六年作）の中で、彼は書いている。

軾は罪責を以て、炎荒に遷さる。侍妾王朝雲あり、一生辛勤し、万里随従す。時の疫あに遭い、病に遭いて亡す。其の死を忍びての言を念いて、棲禪の下に托さんと欲し、故に幽室を営み、以て微軀を掩わんとす。

「一生辛勤し、万里随従す」という言葉に蘇軾の万感の思いが込められており、また愛妾の死に対する無念さがにじみ出ている。蘇軾は「朝雲を悼む」<sup>139</sup>（一〇九六年作）詩の中で、次のように嘆くほかなかった。

景を駐めんとするも、恨むらくは千歳の葉無く、行くを贈るに惟だ小乗の禪有るのみ。  
……帰りて竹根に臥して遠近と無く、夜燈 勤めて礼さん 塔中の仙を。

このように、蘇軾が妻妾を描いた詩文には、しばしば妻妾の高潔な品格に対する称賛が見られ、妻妾たちに対する敬服、感激の念が行間に溢れている。

### 3.3 妻妾の情感を尊重し、才智を称え、彼女たちの人間としての存在価値を肯定した

蘇軾の妻妾観と同時代の文人のそれとはよく似た一面がある。彼もまた妻たちの才学に関心を持ち、称賛していたのである。この点については、第三章「梅堯臣の詠妻詩とその妻に対する観念」<sup>140</sup>で詳論した。蘇軾の最初の妻王弗もまた屏風の後ろに身をひそめて客と夫の会話を聞いていた。妻のこの挙動に対して、蘇軾は肯定的にとらえており、「亡妻王氏墓誌銘」<sup>141</sup>（一〇六六年作）の中で言及している。

其の始めは、未だ嘗て自ら其の書を知るを言わざるなり、軾の書を読むを見れば、則ち終日去らず。亦た其の能く通ずるを知らざるなり、その後、軾忘るる所有らば、君能くこれを記す。其の他書を問えば、則ち皆略ぼこれを知る。是に由りて始めて其の敏にして、静かなるを知るなり。軾の鳳翔に官するに従う。軾外に為す所有らば、君未だ嘗てその詳を問知せずんばあらず。曰く、子親を去ること遠し、以て慎まざるべからずと。

日び先君の軾を戒むる所以の者を以て相語るなり。軾客と外に言うに、君屏間に立ちてこれを聴き、退きては、必ず其の言を反覆して言いて曰く、某人は言えば輒ち両端を持し、惟だ子の意のみこれを嚮う。子何を用て是の人と言うやと。来たりて軾と親厚を求むること甚だしき者あり、君曰く、恐らくは久しうするころ能わざらん。其れ人にくみすること鋭ければ、其れ人を去ること必ずや速やかならんと。已にして果たして然り。将に死なんとする歳、其の言聴くべき多く、識有る者に類す。

王弗は郷貢進士王方の娘で、名門の出と言えよう。しかし、蘇軾は初めは彼女が学識を備えているとは知らなかった。「軾の書を読むを見れば、則ち終日去らず」であったのだが、蘇軾が読んだ書物の内容を思い出せない時に、彼女は逆によく記憶していたのである。「其の他書を問えば、則ち皆略ぼこれを知る。」蘇軾が訊ねた書物は、おそらく『女誡』の類ではない、男性が読む書物であったのに違いないが、彼女はその大略を心得ていた。「軾外に為す所有らば、君未だ嘗てその詳を問知せずんばあらず。曰く、子親を去ること遠し、以て慎まざるべからずと。日び先君の軾を戒むる所以の者を以て相語るなり」という記述から判断して、彼女は記憶力が強いだけでなく、明敏な頭脳も備えており、父母から遠く離れているのだから、何事にも慎重に行動するようにと蘇軾に警告を与えていた。彼女は夫の交友関係にも関心を持ち、友人一人一人の性格の本質を見抜き、廉潔な人物、邪悪な意図を隠している人物を弁別して、夫が騙されることがないように細心の注意を払っていた。妻王氏が蘇軾の閨中の参謀役となっていたことは言うまでもない。蘇軾以前には、このような日常生活の描写は、宋代の女性を描いた作品の中でもそう多くはないであろう。

蘇軾が「老妻」と常々称していた王閨之に関しては、文字が読めたかどうかを判断する材料はない。しかし、蘇軾の詩文の中から、彼女が相談相手にふさわしい賢妻であったことが見て取れる。「晁無咎学士の相迎えるに次韻す」詩（一〇九二年作）には、「家に還るに婦と計るを需む、我は本と帰路は西南に連なる」とある。また、「正輔表兄將に至ると聞きて詩を以てこれを迎う」詩（一〇九五年作）には「但だ恨む参語の賢、忽ち九原の幽に潜むを」とあり、自注で「軾は婦を喪いて已に三年なり、正輔近きに亦た亡嫂の戚しみ有り」と説明している。これらの詩句に登場する「婦」はともに王閨之を指す。「参語」は『漢書』<sup>142</sup>楊敞伝に基づく言葉で、楊敞が大將軍霍光から昌邑王の廃立を持ちかけられ、決めかねている時、楊敞の夫人がたちどころに霍光に同心するよう決断を促し、霍光の使者、楊敞、夫人の三人が相談して決定したとい

うわけで、「参（三）語」という成語が生まれたのである。蘇軾はここで王閏之を国家の大事を相談できる楊敞夫人に喩えているのである。この点から見ても、王閏之がまったく見識を持たぬ田舎者でなかったことが分かる。彼女が在世の時には、蘇軾はいつも彼女に重要な事柄について相談を持ちかけていたに違いない。

以下に『侯鯖録』<sup>143</sup>の「東坡州堂前召飲」という記事を引いてこの点を補強しておこう。

元祐七年正月、東坡先生汝陰に在り、州堂の前に、梅花大いに開き、月色鮮霽たり。先生の王夫人曰く、春月の色勝ること秋月の如し、秋月の色は人を令て凄惨たらしめ、春月の色は人を令て和悦たらしむ。趙德麟の輩を召きて此の花下にて飲むに何如いずれぞと。先生大いに喜びて曰く、吾知らず子も亦た詩を能くするや。此れ真に詩家の語なるのみと。遂に相召き、二歐とともに飲む。是の語を用いて減字木蘭花詞を作りて云う、春庭月午、影は春醪に落ちて光は舞わんと欲す…似ず 秋光の、只だ離人と共に断腸を照らすに。

「蘇軾詞編年校註」に「減字木蘭花・春庭月午」の校註<sup>144</sup>でもこの点に言及している。文豪の妻として、夫に事える日々の中で、知らず知らずのうちに、自分の教養を高めて行ったのであり、夫の創作に靈感を与え、折々その才知を現したのであった。

朝雲の才知に関しては、次のような材料もある。朝雲を哀悼した詩の序<sup>145</sup>で彼は次のように述べている。

朝雲初めは字を識らず、晩に忽ち書を学ぶ、粗ぼ楷法有り。蓋し嘗て泗上の比丘尼義沖に従って仏を学ぶ、亦た略ぼ大義を聞く、且に死なんとするや、金剛経の四句の偈を誦して絶ゆ。……

ここからわかることは、朝雲は蘇軾の家にやってくるまでは文盲だったという事実である。「蘇軾の家が彼女を買った時、ある人が詩を作り彼女に贈った。その中では宛も彼女が才芸に富む杭州の歌妓であるかのように扱われている。しかし、細かに検討してみると、そうではなかったようである。蘇東坡の書いたものから判断して、朝雲

は東坡の家に来てようやく読み書きを習い始めたらしい。」<sup>146</sup>朝雲は才子蘇東坡の身辺に仕えるようになって、知らず知らずのうちに影響を受けていった。「泗上の比丘尼義沖」ももちろん朝雲の教育に功があったであろうが、この天分に恵まれ、頭の回転の速かった侍女に字を教えたのは蘇東坡その人であったに違いない。後になって朝雲が書法に興味を持つようになると、蘇東坡は喜んで彼女に書法を指南したのである。文盲の段階から読み書きができるようになり、やがて楷書をマスターし、ついには仏教を学び、「亦た略ぼ大義を聞く」レベルにまで到達した。これは明らかに蘇軾の影響力の大きさを物語っている。

以上の分析から、蘇軾が妻妾たちの存在価値を非常に積極的に認めていたこと、蘇軾の妻妾に対する深い情感の双方を見て取ることができよう。彼の筆下における妻妾のイメージを大体以下のようにまとめることができる。三人の王氏は妻であれ侍妾であれ、みな非凡な容貌と高潔な性格を兼備しており、彼から終生離れず、かれに付き添っていた。同様に、妻であれ侍女であれ、蘇軾は誠心誠意彼女たちに接した。王弗は蘇軾の人生行路が順調な時の正妻であり、王閏之は内助の功を發揮した後添いの妻であり、朝雲は始終蘇軾に忠実な侍妾であった。

### **3.4 彼の深い仏教信仰の反映として、たびたび亡き妻妾たちの法事を行い、冥福を祈る文章を何篇も書いた**

周知のように、蘇軾の思想は非常に複雑である。その思想は儒・道・仏の三教が複雑にからんでいるとされる。若いころの著書には経世済民を目指し、積極的に世の中と関わろうという儒教思想が色濃く見られる。徐々に官界の現実に接すると、排斥や誣告に遭遇し、事志を得ず、何度も流謫を経験した。晩年に至ると、彼の仏教への肩入れがはっきりしてくる。逆境にあつて仏教思想は彼の处世哲学となった。波乱万丈の人生を送った蘇東坡にとって、仏教の人生観は心の安定をもたらした。蘇軾は杭州に二度赴任しており、そこが呉越以来仏教が盛んな土地であったため、数多くの名僧

と交わりを結んだ。「吳越は名僧多し、予と善き者、常に十に八九あり。」と彼は述べている。<sup>147</sup> 蘇軾の文集にはしばしば僧侶との交遊や詩の応酬の記録が残されている。早くも嘉佑六年、二十六歳の蘇軾は仏教を題材とした作品「鳳翔八觀 維摩像唐楊惠之塑在天柱寺」(一〇六一年作)を残しており、後に彼が詩でよく口にするある種の感慨を表白している。

今觀古塑維摩像	今觀る古塑の維摩像
病骨磊嵬如枯龜	病骨 磊嵬として枯龜の如し
乃知至人處生死	乃わち知る至人の生死に処するや
此身變化浮雲隨	此身は変化して浮雲に隨うを
……	……

ここの「此身は変化して浮雲に隨う」は明らかに『維摩詰經』の「是の身は浮雲の如し、須臾にして変滅す」<sup>148</sup>という観点に酷似している。さらに「海月辯公真贊」<sup>149</sup>(一〇九五年作)でも、

予は方年壯氣盛んにして、厥の官に安んぜず、往きて師に見ゆる毎に、清坐して相對し、時に一言を聞かば、則ち百憂氷解し、形神俱に泰し。

ここで言う「大師」とは、海月禪師慧弁を指し、蘇軾が抱えていた様々な心配事はたちまちにして消え失せ、心身ともにリラックスできたのである。この他「贈常州報恩長老」(一〇八五年作)、「淨因淨照臻老真贊」(一〇八八年作)、「葆光法師真贊」(一〇八八年作)、「資福白長老真贊」(一一〇〇年作)、「與徑山長老惟琳二首」(一一〇一年作)等枚挙に暇がない。仏教がいかに彼に安心感をもたらしたかがうかがえる。彼の他の作品の中にも至るところに仏教思想がうかがえる。例えば以下の通り。

我老人間萬事休	我老い人間万事休す
君亦洗心從佛祖	君も亦た心を洗いて佛祖に従う
手香新寫法界觀	香を手にして新たに寫す法界觀
眼淨不覩登伽女	眼は淨くして登伽女を覩ず

（「送劉寺承赴余姚」一〇七九年作）

憑君借取法界觀 君に憑りて借取す法界觀

一洗人間萬事非 <sup>いつせん</sup> 一洗す人間万事の非

（「和子由四首送春」・一〇七五年作）

不向南華結香火 南華に向い香火を結ばずば

此生何處是真依 此の生 何處か是れ真依ならん

（「昔在九江、與蘇伯固唱和。……」・一一〇〇年作）

見聞 隨喜 悉く成仏す、人天と蟲鳥とを扱はず。但だ当に常に平等觀を作すべし、本と憂樂と寿夭無し。丈六の金身 大と為さず、方寸の千仏 夫れ豈に小ならんや。此の心 平かなる處 是れ西方、眼を閉ずれば便ちに到る魔燒無きに。（「阿彌陀佛贊」<sup>150</sup>・一〇九四年作）

これ以後、波乱と起伏に満ちた人生に揉まれる中で、人生は夢の如し、世間の事は幻なりという心境になっていったのである。彼は「居士」を以て自称したが、煩雜な世事に対して鷹揚に構える、言わば枯淡の境地を表現しようとしたのである。

人間如夢 人間は夢の如し

一尊還酌江月 一尊 還た江月に酌す

（「念奴嬌 赤壁懷古」・一〇八二年作）

世事一場大夢 世事は一場の大夢なり

人生幾度新涼 人生幾度か新涼あらん

（「西江月 世事一場大夢」・一〇八〇年作）

人似秋鴻來有信 人は秋鴻の來りて信有るに似て

事如春夢了無痕 事は春夢の如く <sup>まった</sup> 了く痕無し

（「正月二十日與潘郭二生出郊尋春忽記去」・一〇八二年作）

「夢の如し」というのは、「大乘十喻」の一つであり、蘇軾の「この身は夢の如し」という思想は仏教が強調する万物・人生はすべて幻で実体がないこと正に「夢の如し」、

という思想と酷似している。であるならば、彼が妻妾のために書いた詩文では仏教思想はどのように体现されているだろうか。妻妾たちが人の世を離れようとする時、一人取り残された蘇軾はひたすら仏教に救いを求め、亡くなった妻妾たちの冥福を祈り、成仏するよう懸命に祈りをささげている。

治平二年（一〇六三年）、九月九日、蘇軾は「書大方廣圓覺修多羅了義經」<sup>151</sup>を書いた。彼は文中で亡妻王弗を追念するためにこの經典を書写したと述べている。この時王弗が世を去ってからちょうど百日目であった。一〇九〇年正月五日、後添いの王閏之の誕生日、蘇軾は仏典の『金光明經』の記事を真似て、妻の誕生祝いのために魚を放ち、彼女のために「蝶戀花 泛泛東風初破五」を作った。題目には自注が付いていて、「同安君の生日に魚を放つ、金光明經の魚を救う事を取る」とある。元祐八年（一〇九三年）八月一日、王閏之が世を去った。十一月十一日、蘇軾は亡妻王閏之のために水陸道場を設け、亡妻の法要を行い、李公麟を招請して釈迦と十大弟子の肖像を描いてもらい、京師に安置し、「釋迦文佛頌」<sup>152</sup>を著した。その引の中で、その間の事情を説明している。

端明殿學士兼翰林侍讀學士蘇軾、亡妻同安郡王氏閏之の爲に、奉議郎李公麟に請いて敬して釈迦文仏及び十大弟子を画かしむ。元祐八年十一月十一日、水陸道場を設けて供養す。軾は拜手稽首して頌を作りて曰く、我願う世尊よ、足指地を<sup>お</sup>按せ。三千大千、淨琉璃の色。其の中の眾生、解脱せざる靡し。

「我願う世尊よ、足指地を<sup>お</sup>按せ。三千大千、淨琉璃の色」は正に『維摩詰經・佛國品第一』<sup>153</sup>「於是佛以足指按地、即時三千大千世界、若幹百千珍寶嚴飾、譬如寶莊嚴佛無量功德寶莊嚴土」の再現である。さらに、蘇迨、蘇過、蘇邁らは母親の遺命に従い、手を携えて「阿彌陀仏像」を描いた。絵が完成した後、紹聖元年（一〇九四年）、画像を金陵の清涼寺に安置し、蘇軾が自ら筆を取って「阿彌陀仏贊」<sup>154</sup>を書いた。



蘇軾の妻王氏、名は閏之、字は季章、年は四十六。元祐八年八月一日、京師に卒す。臨終の夕、受用する所を捨てて、其の子邁迨過をして為に阿弥陀像を画かしめよと遺言す。紹聖元年六月九日、像成りて、金陵清涼寺に奉安す。贊に曰く、仏子在りし時百憂繞い、臨行の一念 何に由りて了まん。口に南無阿弥陀を誦すれば、日 地を出て万国暁となるが如し。

この他、王閏之が逝去してから、その子蘇過が母の冥福を祈り、亡き母のために「金光明經」を書写した。蘇過が書写する過程で一つの疑問が生じた。これは本当に起こったことなのか、それとも寓言なのか。蘇軾が息子のために書いた「書金光明經後」(一〇九四年)の中で張安道の言葉を引いてその疑問に答えている。「仏乗は大小と無く、言は亦た虚実非ず、顧だ我が見る所如何なるのみ。方法は一致す。我れ若し見有らば、寓言も亦た実語なり。若し見る所無ければ、実寓 皆な非なり」仏典の言葉が真実なのか、虚構なのか、仏は実在するのか否か、それはすべて心中の思い一つにかかっている。このように人情の機微に通じた考え方は、蘇軾の人生観そのものではないか。これは正に蘇軾が以前に言っていた、「人は皆世に趨る、世を出る者は誰なるや。人は皆世を遺る、世誰かこれを為す？爰に大士有り、此の両間に処る」(「海月辯公真贊」) そのものであり、自分も世俗生活の必要性と脱俗への憧れの間で揺れていたのである。「書金光明經後」は息子の疑問に対する回答であると同時に、そこで示された道を彼はすでに自ら実践していたとも言えるのである。

同じように、蘇軾が王朝雲のために書いた詩文の中にも、しばしば彼の仏教思想を見出すことができる。「朝雲詩並引」<sup>155</sup>にはこうある。

阿奴 絡秀 老いを同じくせず、天女 維摩 総禪を解す。経巻薬爐は新しき活計、舞衫歌扇は旧き因縁。丹成りて我に随いて三山に去る、巫陽雲雨の仙と作らず。

ここの「天女 維摩 総禪を解す」や「経巻薬爐は新しき活計」から判断すると、仏教は彼らの生活の一部となっていたようである。第二節で引いた「殢人嬌・贈朝

雲」白髮蒼顔（一〇九五年）には、「白髮にして蒼顔、正に是れ維摩の境界なり。空なる方丈 散花 何ぞ礙あらん」の句があったし、「三部楽・美人如月」には、「何事ぞ散花 卻って病み、維摩 疾無きや」の句があった。蘇軾は『維摩詰經』の典故を使って自分を超然無垢の維摩詰に比擬している。

紹聖三年（一〇九六年）、朝雲が亡くなった後、蘇軾は「朝雲を悼む並びに引」を作った。

苗而不秀豈其天	苗にして秀でざるは豈に其れ天ならずや
不使童烏與我玄	童烏をして我が玄 <small>くみ</small> に与せしめず
駐景恨無千歲藥	景を駐めんとするも恨むらくは千歳の藥無く
贈行唯有小乘禪	行くを贈るに惟だ小乗の禪有るのみ
傷心一念償前債	傷心一念、前債を償い
彈指三生斷後緣	彈指三生後緣を断つ
歸臥竹根無遠近	歸りて竹根に臥して遠近と無く
夜燈勤禮塔中仙	夜燈勤めて礼さん 塔中の仙を

この悼亡詩では、蘇軾は仏教の概念を借りてきて、存分に朝雲に対する思いを表現している。朝雲を失った苦しみに直面すると、彼は深い思いを禪の修行に托して和らげる他なかったのである。「一念」、「前債」、「彈指」、「三生」、「後緣」といった概念のすべてが禅宗の思想体系に属しているわけではない。先に引用した「朝雲詩並びに引」にも「天女 維摩 総みな禪を解す。經卷藥爐は新しき活計」という句があった。

蘇軾は人生の蹉跎を幾度となく経験したが、朝雲は終始一貫して彼に付き従い、蘇軾に非常に大きな慰めを与えた。蘇軾の最も身近にいた人間として、朝雲は蘇軾の仏教信仰の影響を受けなかったはずはなく、このことは蘇軾の詩文から一斑を伺うことができる。「朝雲墓誌銘」<sup>156</sup>の中で、詩人はこう書いている。

蓋し嘗て泗上の比丘尼義沖に従って仏を学ぶ、亦た略ぼ大義を聞く、且に死なんとす

るや、金剛經の四句の偈<sup>げ</sup>を誦して絶ゆ。

朝雲は臨終の際に『金剛經』の四句の偈で蘇軾を諭そうとしているが、この記事の中に朝雲の蘇軾への深い思慕の念が潜んでいることは言うまでもない。そしてこの四句の偈こそ蘇軾が世の中の人々に伝ようとした事ではなかつたらうか。王朝雲の死に至って、蘇軾はいよいよ仏教への傾倒を強めていくようであるが、これは蘇軾が王朝雲一人を伴って惠州へ行き、彼女の死によって晩年の孤独感を強めていったからであると想像される。

互いに助け合って生きて行く日々の中で、蘇軾は王氏の女性たちに安らかな日常生活を送らせる術がなかつた。彼女たちが亡くなった後で、彼が唯一できたのは、仏典を書写し、妻妾たちの冥福を祈り、内心の安定を追い求めるすることだけであつた。写經の作業に亡くなった肉親への無限の悲しみを託し、写經をすることによって、自分の境遇を改善したいという思いも含まれていたのである。

もちろん、蘇軾は宋一代の文豪であり、その思想は複雑を極めていたであろう。仏教思想の影響だけを受けていたなどというつもりはまったくくない。蘇軾は政治的な理想が破綻したため、「万事到頭都是夢／万事 到頭 都べて是れ夢」（「南郷子 霜降水痕收」・一〇八二年作）と慨嘆しつつも、「雖此心耿耿，歸於憂國／此の心耿耿たると雖も、憂国に帰す」（「與騰達道六十八首之八」・一〇八五年作）、「廢棄雖久，憂畏不衰／廢棄せらるること久しと雖も、憂畏衰えず」（「與騰達道六十八首之十二」・一〇八五年作）と愛国心が衰えていないと表明している。先に述べたように、彼の思想の中には、儒仏道が混在していた。「朝雲詩並引」の末尾をもう一度見てみよう。「丹成りて我に随いて三山に去る、巫陽雲雨の仙と作らず」の「三山」は道家の伝統的な三つの仙山を指している。彼は仏典の典故を用いて朝雲を「天女」に喩えると同時に、道家の言葉を引いているのである。もしも丹薬が完成したら、私といっしょに蓬萊、瀛洲、方丈の三山に遊ぼう、巫山の神女になる必要はないと述べているように蘇軾はこの詩

で道教と仏教を巧妙に融合させている。林語堂は「仏教は人生を否定し、儒教は人生と真正面から取り組み、道教は人生を単純化する。この詩人はその内面世界においてこれらの人生観を混合させたのである。」<sup>157</sup>と評している。

#### 第四節 蘇軾が妻妾を詠じた作品における継承と創造

以上の分析から、蘇軾の妻妾に対するスタンスと、蘇軾が描いた妻妾のイメージをとらえることができたと思ふ。彼の妻妾に対する観念には、継承の一面と、創造の一面がある。以下に、彼の同時代人で宋代のある種の詩風の創始者であった梅堯臣（一〇〇二～一〇六〇）及び「唐宋八大家」の一人曾鞏（一〇一九～一〇八三）の妻に対する観念との比較を試み、蘇軾の観念の特徴をはっきりと捉えようと思ふ。梅堯臣と曾鞏の妻に対する観念の具体的な内容については、第三章「梅堯臣の詠妻詩とその妻に対する観念」、第四章「曾鞏の妻に対する観念 —女性墓誌銘を中心に—」を参照されたい。しかし、梅堯臣と曾鞏の作品では侍妾に関する内容に欠けているので、以下の比較は妻だけを対象とする。

先ず、蘇軾は梅堯臣、曾鞏と同じく、妻の婦徳を口を極めて称賛している。妻は賢明で、慈悲深く、道義に厚く、言行はすべて女性としての規範に合致していなければならない、この点は同時代の文人共通の観点である。梅堯臣は「新婚」詩の中で、「幸皆柔淑、稟賦誠所獲／幸いに皆柔淑にして、稟賦 誠に獲る所あり」と詠じ、「途中寄上尚書晏相公二十韻」では、妻を「單舟匹婦更無婢、朝餐每愧婦親炊／單舟 匹婦 更に婢無く、朝餐 毎に愧ず婦の親しく炊ぐを」と誉め、さらに「道上不謳歌、妻亦無恚嗔／道上謳歌せず、妻も亦た恚嗔せず」（記歳）、「已勝伯倫婦、一醉猶在傍／已に伯倫の婦の、一醉 猶お傍らに在るに勝れり」（「梅雨」）と述べている。曾鞏は、「祭亡妻晁氏文」の中で、妻は「言無疵悔、動應衡規／言は疵悔無く、動は衡規に応ず」と賛美し、「衣有穿弊、珥無光輝／衣に穿弊有り、珥に光輝無し」と生活の慎ましさを

讚え、「親疏悦慕、稚艾嗟咨／親疏は悦慕し、稚艾は嗟咨す」家族間の関係を取り持ったことを褒め、「事姑之禮、左右無違／姑に事うるの礼、左右違ふこと無し」と孝行に努めたことを取り上げる。蘇軾は「亡妻王氏墓誌銘」で、王弗が「君の未だ嫁がざるや、父母に事え、既に嫁いでは、吾が先君先夫人に事う。皆謹肅を以て聞こゆ」のよりに婦道に合致していたことに言及し、「祭亡妻同安郡君文」では後添いの王閏之が「嗣いで兄弟と為り、君の賢きに如くは莫し。婦職 既に修め、母儀 甚だ敦し」であったとやはり婦徳を備えていたと記述する。

次は妻の才学に高い評価を与えている点である。梅堯臣であれ、曾鞏であれ、彼らは女性の才知を非常に評価している。すでに第三章「梅堯臣の詠妻詩とその妻に対する観念」で言及したように、梅堯臣と蘇軾の文章では、申し合わせたように屏風の後ろに身を潜めて夫と客の間の会話を聴いている場面が登場する。

吾嘗て士大夫と語りしとき、謝氏は多く戸屏<sup>よ</sup>従り竊かにこれを聴き、間<sup>ひま</sup>あらば則ち尽く其の人の才能賢否及び時事の得失を商榷し、皆条理有り。(歐陽修「南陽縣君謝氏墓志銘」<sup>158</sup>)

軾客と外に言うに、君屏間に立ちてこれを聴き、退きては、必ず其の言を反覆して言いて曰く、某人は言えばすなわち両端を持し、惟だ子の意のみこれを嚮う。子何を用つて是の人と言うやと。来たりて軾と親厚を求むること甚だしき者あり、君曰く、恐らくは久しうするころ能わざらん。其れ人<sup>くみ</sup>に与すること鋭ければ、其れ人を去ること必ずや速やかならんと。(蘇軾「亡妻王氏墓志銘」<sup>159</sup>)

「南陽縣君謝氏墓志銘」は歐陽修が書いたものではあるが、墓誌銘のもととなった行状は梅堯臣が提供したものであったにちがいない。中原健二は『宋詞と言葉』<sup>160</sup>の中の、「江城子」と梅堯臣の悼亡詩の中で、蘇軾の「江城子・乙卯正月二十日夜記夢」と梅堯臣の「戊子正月二十六日夜夢」を分析し、極めて類似している点があると述べた上で、「梅堯臣に触れた東坡の文章のなかに直接その悼亡詩に言及したものは

ないが、東坡は梅堯臣の一連の悼亡詩を知っていたと考えてよいだろう」と指摘する。同時に「欧陽修が梅堯臣の求めに応じて、その妻謝氏の墓誌銘を書いているのであるが、そのなかに梅堯臣が語るかたちで、謝氏の生前の賢明さを示すエピソードが記されている。それがまた、東坡が通義君のために書いた墓誌銘の一節とよく似ているのである。このことも、悼亡をめぐっての東坡と梅堯臣とのつながりを思わせる」とも言っている。この他、清水茂の『唐宋八家文』<sup>161</sup>でも、この点に触れている。蘇軾の座師であった梅堯臣は、悼亡詩であれ墓誌銘であれ、蘇軾に対して大きな影響力を持っていたと言えるだろう。

同様に、曾鞏は妻の学才に関して次のように書いている。

文柔、姓は晁氏、諱は德儀、字は文柔、年十有八にして余に嫁す。…人と為りは聡明、事に於いて迎見すれば立ちどころに解し、其の理を尽くさざる無し。其の概の見る可き者此の如し。(曾鞏「亡妻宜興縣君文柔晁氏墓志銘」)<sup>162</sup>

この三人の士大夫に描かれた妻たちは智慧の光に輝いており、彼女たちは高度の判断力、聡明さ、才知を具備していた。このような女性たちは、賢妻たりえただけでなく、良母の役割も果たしえたのである。

もちろん、梅堯臣や曾鞏と比較すると、蘇軾の妻に対する観念の新奇な点は一目瞭然である。まず曾鞏は長きにわたり儒教文化の伝統的な観念を受け入れてきたため、彼が妻の容貌を褒め称えるのは不可能であっただろう。また梅堯臣は「見盡人間婦、無如美且賢／世間の婦を見尽くしたれども、美しく且つ賢きに如くは無し」と大胆率直に妻の美貌を讃美してはいるが、具体的な描写となると、探し出すことは出来ないのである。それに対して蘇軾はどうかと言うと、彼は妻妾たちの美貌を描き出すだけでなく、高雅で世間離れした、上品で穢れのない、内側からにじみ出るような自然美をも描き出したのである。

次に、蘇軾は仏教を妻を詠じた詩文に導入し、折々妻の冥福を祈った。蘇軾が妻を

描いた作品、中でも妻を詠った詞が伝統的な女性を詠じた「閨闈の作」ジャンルに属することは疑いがない。伝統的な夫婦生活を主題にした詩詞は普通はかなり艶っぽい言葉遣いで描写をし、ある種の「脂粉の気」がただようものである。ところが、蘇軾が妻妾を詠じた詩にはそういった痕跡は皆無である。その原因の一つは、かなり荘厳な仏典の典故や禪宗の思想を妻妾を詠じた詩文に導入したためであろう。蘇軾は俗っぽくなりがちな「閨闈の作」を仏典の色に染め上げることにより、別の次元にまで引き上げ、新たな文化的意義を付け加えたのであった。

## 第五節 小結

一代の文豪蘇軾は、独特な方式で内心の世界を表現した。彼は宋代の士大夫が共有していた特徴を備えていただけでなく、生き生きした個性を有していた。詩人は思慮深くかつ愛情に富み、妻にせよ侍妾にせよ、一視同仁にわけへだてなく接した。現存する材料から観察すると、王弗を題材にした作品がもっとも少ないが、少ないからといって愛情が薄かったわけでも、愛情が欠如していたわけでもない。王弗の死後十年後に作られた「江城子・乙卯正月二十日夜記夢」がその証拠である。「小軒窗、正梳妝、相顧無言、惟有淚千行／小さな軒窗にて、正に梳妝す、相い顧みて言う無し、惟だ涙千行有り」ここに表現されているのは賢妻に対する無限の愛情である。この詞の中にある「処として淒涼を話す無し」という句は、この十年間に起こった事どもを、いったいどこから話したらよいのか、という蘇軾の亡妻に対する切実な問いかけである。ここに描かれているのはもちろん生活の小さな一コマに過ぎないのだが、亡妻の永遠の生命力がなんとくつきり顕れていることか。二十八年後、王閏之もまた、蘇軾に先立ってなくなってしまった。蘇軾は断腸の思いをこめて「亡妻同安郡君を祭る文」<sup>163</sup>を作った。「我曰く、帰らん哉、行に丘園に返らんとすと。曾に少しも須たず、我を棄てて先んず。孰か我を門に迎え、孰か我に田に饋らん。已んぬる矣、奈何せん、涙盡

きて目乾く。国門に旅殯し、我実に恩少し。惟だ同穴有り、<sup>こいねがわく</sup>尚<sup>ふ</sup>は此の言を踏まん、  
<sup>あ</sup>嗚呼<sup>あ</sup> <sup>かな</sup>哀しい哉。」また、元符三年（一一〇〇年）に「戊寅歳上元に追和す」を作り、  
その詩の跋で、<sup>ま</sup>「又復た同安君を悼懐し、……君が亡するを悲しみ、子が存するを喜ぶ  
なり」と述べ、王閏之に哀悼を表している。朝雲がまたもや彼に先立って亡くなった  
時には、「此會我雖健、狂風卷朝霞。使我如霜月、孤光掛天涯／この会 我健やかなり  
と雖も、狂風 朝雲を卷く。我をして霜月の如く、孤光 天邊に掛らしむ」（「丙子重  
九二首」・一〇九六年作）と感慨を述べている。元符四年（一一〇一年）蘇軾が逝去す  
るや、弟の蘇轍は兄の遺言通り、彼と王閏之を合葬し、「惟だ同穴有り」という宿願  
を果たさせた。蘇軾は三人の妻妾の誰に対しても、深く厚い愛情を抱いていたと言え  
るだろう。「三子は一の如く、愛は天より出ず」という彼の言葉をもじれば、「三妻は  
一の如く、愛は天より出ず」とかれの妻妾たちに対する愛情を喩えることができるで  
あろう。

蘇軾は特別な人生を送り、独特な日常生活の体験をし、そのことによって彼の女性  
観は時代を代表するものとなった。「蘇東坡のように活気に満ちあふれた人生を送った  
人物は、この世で唯一無二の存在である」<sup>164</sup>蘇軾は妻妾たちに対する深い気持ちを絶  
妙な筆端に載せて表現し、自分の理想の女性像を多彩な作品に融け込ませたのであっ  
た。人々の心を動かす妻妾を詠じた詩文の中で、くっきりした、個性的なイメージが  
紙上に躍っている。蘇軾が生活、思想、感情の三方面から行った妻妾たちの描写は、  
現実生活の基礎の上に妻妾のイメージを構築し、彼の進歩的な婚姻観を体現しており、  
同時に北宋士大夫たちの固有な妻に対する観念と、価値観を反映している。



## 第六章

### 結 語

#### 残された問題の所在と今後の課題

## 結 語

梅堯臣、曾鞏、蘇軾は北宋期を代表する文学者であった。三人は政治や文学の分野で大きな業績を上げた。彼らの政治的主張、人生に対する態度はその時代思潮を色濃く反映している。この三人の妻に対する観念の研究を通して、北宋社会が女性に対して抱いていたイメージの一端を垣間見ることができたと思う。ここに北宋士大夫の女性認識、女性に対する評価と期待が反映されていると思う。

儒家思想が男性の意識を占拠していた宋代に、梅堯臣は妻たちの聡明さと才知を認め、その存在価値を認め、妻を大いに称賛し、肯定的な態度を取った。彼は夫婦であるだけでなく、友人知己であった夫婦関係を表している。梅堯臣は妻を独立した意義を有する人間として詩に描写し、高い評価と尊厳を彼女らに賦与したが、これは彼の進歩的な女性観の表われであった。曾鞏は儒家の思想を遵守すると同時に、その基礎に立って、儒家の思想を更新していたことが分かる。彼は規範的な女性を称賛するとともに、女性に教育を施すことを提唱し、女性が学問をし、読み書きを身に着け、才華に富んだ女性に成長することを強く望み、日常生活で自分の役柄をきちんと演じ切るよう期待したのであった。北宋文壇の指導者蘇軾の妻妾観と梅堯臣と曾鞏の妻に対する観念とを比較すると、蘇軾が妻妾を描いた詩文の中に妻妾の情感を尊重し、才智を称え、彼女たちの人間としての存在価値を肯定した同時に、詩と並び宋代に流行した文学ジャンルであった詞において、妻妾の美貌を堂々と讃えた、妻妾の高潔な人格を称賛し、彼女たちに対する敬意を表明し、さらに、彼の深い仏教信仰の反映として、たびたび亡き妻妾たちの法事を行い、冥福を祈っている。これも他の文学者たちと大きく異なる点である。

このように北宋の代表的な知識人である梅堯臣・曾鞏・蘇軾は詩文の中で、亡き妻を描き出し、妻の婦徳を口を極めて称賛している。妻は賢明で、慈悲深く、道義に厚く、言行はすべて女性としての規範に合致していなければならない、この点は同時代

の文人共通の観点である。彼らは妻となった女性が才華に富んだ女性であることを強く望み、日常生活で自分の役柄をきちんと演じ切るよう期待したのであったのである。彼らは妻妾を詠じた作品を創作する過程で、現実生活の基礎に立ち、理想の妻のイメージを構築していると考えられる。

最後に残された問題の所在と今後の課題を述べて本研究のまとめとする。

### 残された問題の所在と今後の課題

北宋の士大夫達の妻に対する観念を探るために、本稿では梅堯臣・曾鞏・蘇軾のみを扱ったが、彼らの作品を検討する中で、彼らの妻に対する観念が時代に及ぼした影響についても探求を試みた。しかし、本稿は研究の発端にすぎず、北宋の士大夫たちの妻に対する観念の全体をカバーするものでない。この三人の北宋を代表する士大夫は長きにわたって儒家の伝統文化の影響を受けており、妻に対する観念に一定の限界が存在したことは否定できない。彼らの妻に対する評価も多くは道德、品行といった角度から行われている。蘇軾について言えば、妻の情感を尊重し、彼女らの才智を称賛し、彼女らの存在価値を明確に肯定しているが、彼が蓄妾制度に反対しているわけではない。もちろん、我々は時代的制約を無視して彼らに苛烈な要求しようとするわけではない。かの時代の士大夫たちが妻に対して抱いた観念の真面目を、全面的、客観的に明らかにして行きたいと考えている。

というわけで、今後は梅堯臣・曾鞏・蘇軾と同時代あるいは後輩の世代の詩人たちの作品との関連を解明して行きたい。より幅広く、士大夫達の女性を詠じた作品を取り上げ分析して、北宋の士大夫の妻に対する観念を全面的に把握する必要がある。それ故、研究の範囲を北宋だけではなく、さらには南宋と広げて行くべきものと考えている。先ず、北宋の文学者に対して分析を行う。先ず第一に、韓琦（1008年-1075年）、強至（1022年-1076年）、黃庭堅（1045年-1105年）、許景衡（1072年-1128年）など、まとまった数の悼亡詩を残した文学者の作品を精読し、梅堯臣、曾鞏、蘇軾らの

妻に対する観念との比較を行い、北宋の文学者の妻に対する観念を総括する。第二に、北宋、南宋両朝にまたがって活躍した三人の文学者に対して研究を行う。孫覿（1081年-1169年）は「吳令人挽詞」、「與吳世范帖」など七篇の悼亡作品を残している。王十朋（1112年-1171年）は「哭令人」、「悼亡四首」、「挽令人」という十一首の悼亡詩と、「祭令人」、「令人壙誌」という妻を追悼した文章二篇を残している。また、姜特立（1125-?）は「余方悼亡適山圃牡丹芍薬盛開賦長句」、「悼亡」などの六篇の悼亡詩を残している。彼らの作品を精読して、時代交替期の文人が妻に対しどのような理想を抱いていたのかを探る。第三に南宋士大夫の悼亡の作品に対して分析を行う。南宋の数多い文学者のうち、悼亡の作品が最も多いのは劉克莊（1187年-1269年）である。「風入松」をはじめとする二首の悼亡詞、「挽林宜人」、「石塘感舊十絶」をはじめとする五首の悼亡詩、及び「亡室祭文」、「還裏祭亡室文」をはじめとする五篇の妻を追悼した文章を残している。次に悼亡作品十一篇を残した王炎（1137年-1218年）、周必大（1126年-1204年）、陳造（1133年-1203年）、葉適（1150年-1223年）などの文学者の作品を分析する。南宋文人の妻に対する観念を明らかにした後、北宋文人の妻に対する観念との比較を行い、宋代の女性の地位や、文人が女性に対して抱いた感情の性質、彼らの女性観形成の要因を検討分析し、北宋、南宋の文学者の妻に対する観念の一貫性と、独創性を明らかにする。最後に、宋代文人の独特な女性観と価値観を分析し、それが後世にどう影響したかを探求していきたいと考えている。<sup>165</sup>

---

注:

1 たとえば、唐風「葛生」は、出征して亡くなった夫を偲ぶ妻の歌とされる。

葛生

葛生蒙楚、薺蔓於野。予美亡此、誰與獨處？

葛生蒙棘、薺蔓於域。予美亡此、誰與獨息？

角枕粲兮、錦衾爛兮。予美亡此、誰與獨旦？

夏之日、冬之夜。百歲之後、歸於其居。

冬之夜、夏之日。百歲之後、歸於其室。

2 主なものを以下に挙げる。

松本幸男「潘岳の悼亡詩」(『学林』第三号 中国芸文研究会 一九八四年刊)。

斎藤希史「潘岳悼亡詩論」(『中國文学報』第三十九冊 京都大学文学部中國語学中國文学研究室 一九八八年十月刊)。

深澤一幸「韋応物の悼亡詩」(『颯風』第五号 颯風の会 一九七三年六月刊)。

山本和義「元稹の艶詩及び悼亡詩について」(『中國文学報』第九冊 京都大学文学部中國語学中國文学研究室 一九五八年十月刊)。

加固理一郎「李商隱の悼亡詩「房中曲」について」(『横浜市立大学紀要』人文科学系列第八号 横浜市立大学 二〇〇一年刊)。

入谷仙介「悼亡詩について-潘岳から元稹まで-」(『入矢教授小川教授退休記念中国文学語学論集』 東京：筑摩書房 一九七四年十月刊)。

中原健二「詩人と妻-中唐士大夫意識の一断面」(『中國文学報』第四十七冊 京都大学文学部中國語学中國文学研究室内 一九九三年十月刊)。

3 劉克莊『後村詩話』前集卷の二(中華書局 一九八三年刊 二二頁)に、「本朝詩、惟宛陵(=梅堯臣)為開山祖師」とある。

4 以下に、制作年とともに詩題を列挙しておく。なお、梅堯臣の作品と制作年は朱東潤『梅堯臣集編年校注』(上海古籍出版社、一九八〇年)によった。また、引用作品に付した書き下しについては、大平桂一先生、中原健二先生の指導を仰いだ。

慶曆四年(一〇四四) 四十三歳

1、悼亡三首

2、涙

- 
- 3、秋日舟中有感
  - 4、書哀
  - 5、書謝師厚至
  - 6、新冬傷逝呈李殿丞
  - 7、晚歸聞李殿丞訪別言已屢來不遇
  - 8、謝師厚歸南陽效阮步兵
  - 9、師厚明日歸南陽夜坐有懷

慶曆五年（一〇四五） 四十四歲

- 10、正月十五夜出迥
- 11、史尉還烏程
- 12、來夢
- 13、悼子
- 14、懷悲
- 15、師厚與胥氏婦來奠其姑
- 16、開封古城阻淺聞永叔喪女
- 17、寄謝開封宰薛贊善
- 18、七夕有感
- 19、秋夜感懷
- 20、夢感
- 21、秋鴈
- 22、初冬夜坐憶桐城山行
- 23、余之親家有女子能點酥為詩并花果麟鳳等物一皆妙絕其家持以為歲日辛盤

之助余喪偶兒女服未除不作歲因轉贈通判通判有詩見答故走筆酬之

慶曆六年（一〇四六） 四十五歲

- 24、元日
- 25、不知夢
- 26、夢覺
- 27、樞澗晝夢
- 28、靈樹鋪夕夢

---

29、睡意

30、三月十四日汝州夢

31、憶吳松江晚泊

32、憶將渡揚子江

33、丙戌五月二十二日晝寢夢亡妻謝氏同在江上早行忽逢岸次大山遂往遊陟予賦百餘言述所觀物狀及寤尚記句有共登雲母山不得同宮處倣像夢中意續以成篇

34、夢觀

35、悲書

36、麥門冬内子吳中手植甚繁鬱罷官移之而歸不幸内子道且亡而茲草亦屢枯今所存三之一耳遂感而賦云

37、梨花憶

38、刁經臣將歸南徐許予尋隱居之所及亡室墳地因走筆奉呈

39、新婚

慶曆8年（一〇四八）四十七歲

40、戊子正月二十六日夜夢

41、五月二十四日過高郵三溝

42、寄麥門冬於符公院

43、八月二十二日迴過三溝

5 たとえば、森山秀二氏は「秋日舟中有感」に「斗厭驅驅役 終期老薜蘿」句を「斗は驅驅たる役を厭いて、終に老薜蘿と期するや」と読んで、「牽牛（北斗）は、ささやかな年に一度のお勤めが厭で、老至る隠者と、出会いの約束をでもしたのだろうか」と解釈しているが、ここの「斗」は「北斗」ではなく、「斗に厭う 驅驅たる役を 終に期せん 薜蘿に老ゆるを」であろう。詩「夢登河漢」の句「告我無不臧」は森山氏の引用では「告我無不藏」と誤っているし、同様に「豈惜盡告汝」は「常惜盡告汝」、「扣頭謝神官」は「扣題謝神官」と誤っている。これ以外にもいくつかの問題点が存在するが、ここでは省略する。

6 たとえば、「寄宋次道中道」に「中作淵明詩、平淡可擬倫」、「依韻和晏相公」に「因吟適情性、秋欲到平淡」、「讀邵不疑學士詩卷、杜挺之忽來、因出示之、且伏高致、輒書一時之語、以奉呈」に「作詩無古今、唯造平淡難」とある。

7 文学創作上で美文あるいは典故などにこらず、飾り気のない作風あるいは客観事実のみ

---

を描く手法。

8 吉川幸次郎『宋詩概説』（中国詩人選集二集第一巻、岩波書店）は、その序章「宋詩の性質」第四節「生活への密着」において、次のように言っている。

従来 of 詩人が見のがしていた日常生活の細部、あるいは事がらは見のがすべくもなく普通に日常的であるが、あまりに身近であるために、詩の素材とはならなかったもの、それらを宋人はさかんに詩にする。そのため宋人の詩は、従来 of 詩よりも、ずっと生活に密着する。

9 竹里は京口（潤州）の地名で、謝氏を仮埋葬した場所である。

10 『論語』公冶長に、「宰予晝寢、子曰、朽木不可雕也、糞土之牆、不可朽也」とある。

11 「三従」は、「未嫁従父、即嫁従夫、夫死隨子」（『儀礼』喪服）、「四徳」は、「婦徳、婦言、婦容、婦功」（『周礼』天官、九嬪）をいう。

12 遼欽立『先秦漢魏晉南北朝詩』中冊（北京：中華書局 一九八三年版） 一五八四頁。

13 遼欽立『先秦漢魏晉南北朝詩』中冊（北京：中華書局 一九八三年版） 一六四七頁。

14 以下、唐詩の引用は『全唐詩』による。

15 三首の原文を以下に引いておく。

夢井 元稹

夢上高高原、原上有深井。  
登高意枯渴、願見深泉冷。  
裴回遶井顧、自照泉中影。  
沉浮落井瓶、井上無懸綆。  
念此瓶欲沈、荒忙為求請。  
遍入原上村、村空犬仍猛。  
還來遶井哭、哭聲通復哽。  
哽噎夢忽驚、覺來房舍靜。  
燈焰碧朧朧、淚光疑罔罔。  
鍾聲夜方半、坐臥心難整。  
忽憶咸陽原、荒田萬餘頃。  
土厚壙亦深、埋魂在深堙。  
堙深安可越、魂通有時遲。  
今宵泉下人、化作瓶相憬。



---

感此涕洟瀾、洟瀾涕霑頰。  
所傷覺夢間、便覺死生境。  
豈無同穴期、生期諒綿永。  
又恐前後魂、安能兩知省。  
尋環意無極、坐見天將昞。  
吟此夢井詩、春朝好光景。

七月二十九日崇讓宅讌作 李商隱

露如微霰下前池、月過回塘萬竹悲。  
浮世本來多聚散、紅葉何事亦離披。  
悠揚歸夢惟燈見、瀟落生涯獨酒知。  
豈到白頭長只爾、嵩陽松雪有心期。

夢覩 梅堯臣

閉目光不揚、夢覩良亦審。  
既非由目光、所見定何稟。  
白日杳無朕、冥遇嘗在寢。  
此恨不可窮、悲淚空流枕。

16 『晋書』鄧攸伝に次のように言う。

鄧攸、字伯道、平陽襄陵人也。……永嘉末、没于石勒。……石勒過泗水、攸乃斫壞車、以牛馬負妻子而逃。又遇賊掠其牛馬、步走、擔其兒及其弟子綏。度不能兩全、乃謂其妻曰、吾弟早亡、唯有一息、理不可絶、止應自棄我兒耳。幸而得存、我後當有子。妻泣而從之、乃棄之。……攸棄子之後、妻不復孕。……卒以無嗣。時人義而哀之、為之語曰、天道無知、使鄧伯道無兒。

17 梅堯臣略年譜（附録を参照）。

18 劉克莊『後村詩話』（中華書局 一九八三年刊）前集卷二 二二頁。

19 『宋史』（中華書局一九七七年刊 以下同じ）卷四百四十三、列伝第二百二、文苑五「梅堯臣傳」。

20 『渭南文集』卷十五（四部備要集部）（中華書局據汲古閣本校刊）所収。

---

21 魏国英『女性学概論』（北京大学出版社 二〇〇〇年刊）一一五九頁。

在人類社会的發展進程中，人們從政治、經濟社会等不同角度对女性加以關注和研究，形成這樣或那樣的觀念、主張和思想，即是說，人們一一無論男人還是女人，都会形成对女性或零散或系統的認識，我們稱之為女性觀。

22 『新五代史』晋家人傳（北京中華書局 二〇〇四年刊）。

23 『新五代史』唐廢帝家人傳（北京中華書局 二〇〇四年刊）。

24 朱熹『近思錄』（臺灣商務印書館 一九六八年刊）卷八。

唐有天下，雖號治平，然三綱不正，無君臣、父子、夫婦，其原始于太宗也，故其後世子弟皆不可使。

25 朱熹『朱子語類』（中華書局 一九八六年刊）卷一二九。

人便已崇禮義，尊經術，欲復二帝、三代，已自勝如唐人

26 『周易程氏傳』婦妹 二程集（北京中華書局 一九八一年刊）九七九頁。

男女有尊卑之序，夫婦有唱隨之禮，此常理也。

27 伊佩霞『內閣・宋代的婚姻和婦女生活』（江蘇人民出版社 二〇〇四年刊）三頁。

儒学復興運動的領導者尋找把經典中的理想秩序和自身所處時代迅速变化的社会政治秩序整合在一起的途。…彼們尋求恢復古老的禮儀，…為士人制定了對家庭成員承擔責任的禮儀規定。個人的自我修養成為思想家最為關心的事。

28 陳東原『中国婦女生活史』（上海書店 一九八四年刊）一三九頁。

婦女重貞節的觀念，經程朱的一度倡導，宋代以後的婦女生活，便不像宋代以前了，宋代實在是婦女生活的轉變時代。

29 司馬光「訓子孫文」（『影印文淵閣四庫全書』第七〇三卷所收台灣商務印書館 一九八三～一九八六年刊）。

夫，天也；妻，地也。從一而終。

30 王曉麗、劉靖淵『解語花』（河北人民出版社二〇〇一年刊）一四六頁。

妻子的形象極為罕見，即使有也乏味而單調。

31 中原健二「夫と妻のあいだ—宋代文人の場合—」（『中華文人の生活』一九九四年平凡社刊）二六七頁。

32 梅堯臣の悼亡詩についての專論としては、森山秀二「梅堯臣の悼亡詩」（『漢学研究』第二六号、一九八八）がある。また、本論の第二章も参照されたい。

---

33 以下、梅堯臣の詩の引用はすべて朱東潤『梅堯臣集編年校注』（上海古籍出版社二〇〇六年刊）による。

34 前野直彬『中国文学史』（東京大学出版会一九七五年刊）一三四頁。

35 中原健二「夫と妻のあいだ-宋代文人の場合-」（『中華文人の生活』一九九四年平凡社刊所収）二四三頁。

36 元稹『遣悲懷三首』全唐詩卷四百四。

37 李逸安点校『歐陽修全集』（中華書局 二〇〇一年刊）第二冊 卷三十六。

慶曆四年秋、予友宛陵梅聖俞來自吳興，出其哭內之詩而悲曰：“吾妻謝氏亡矣。”丐我以銘而葬焉。予未暇作。居壹歲中，書七八至，未嘗不以謝氏銘爲言，且曰：“（中略）卒之夕，斂以嫁時之衣，甚矣，吾貧可知也！然謝氏怡然處之，治其家，有常法。其飲食器皿雖不及豐侈，而必精以旨；其衣無故新，而澆濯縫紉必潔以完；所至官舍雖庫陋，而庭宇灑掃必肅以嚴；其平居語言容止，必怡以和。（後略）”

38 司馬光『書儀』卷四・居家雜儀（『影印文淵閣四庫全書』台湾商務印書館 一九八三～一九八六年刊）第一四二冊所収、四八二頁。

女子六歲始習女工之小者，七歲始誦孝經論語，九歲爲之講解論語孝經及列女傳及女誡之類，略曉大義。古今賢女，無不觀曆史以自鑒。

39 魏泰『臨漢隱居詩話』（『影印文淵閣四庫全書』第一四七八冊所収）。

近世婦女多能詩，往往有臻古人者。

40 李逸安点校『歐陽修全集』「南陽縣君謝氏墓志銘」（中華書局 二〇〇一年刊）第二冊 卷三十六。

是歲南方旱，仰見飛蝗而嘆曰：‘今鎬兵未解，天下重困，盜賊暴起於江淮，而天旱且蝗如此。我爲婦人，死而得君葬我，幸矣！’其所以能安居貧而不困者，其性識明而知道理多類此。

41 李逸安点校『歐陽修全集』「南陽縣君謝氏墓志銘」（中華書局 二〇〇一年刊）第二冊 卷三十六。

吾嘗與士大夫語，謝氏多從戶屏竊聽之，間則盡能商榷其人才賢否及時事之得失，皆有條理。吾官吳興，或自外醉而歸，必問曰：‘今日孰與飲而樂乎？’聞其賢者也則悅，否則歎曰：‘君所交，皆壹時賢隼，豈其屈己下之邪？惟以道德焉，故合者尤寡。今與是人飲而歡邪？’

42 『孟子』卷7 離婁篇。引用は四部備要本による。

---

43 朱熹『原本周易本義』（『影印文淵閣四庫全書』第十二冊所收）卷二。

內正則外無不正矣。

44 司馬光『書儀』（『影印文淵閣四庫全書』第一四二冊所收）卷四・居家雜儀。

男治外事，女治內事。男子晝無故不處私室，婦人無故不窺中門。有故出中門，必擁蔽其面（如蓋頭、面帽之類）。

45 伊佩霞『內闈・宋代的婚姻和婦女生活』（江蘇人民出版社 二〇〇四年刊）二一頁。

朱熹在他的『小學』裏引用『禮記』「男不言內，女不言外」。一般地說，男人如果不是從不，也可以說很少被告知不要介入妻子做的事；相反，他們的注意力被導向正面，警惕著確保別讓女人闖入男子的領地。

46 余嘉錫『世說新語箋釋』下卷（上海古籍出版社一九九三年刊）第六七九頁。

與嵇阮一面、契若金蘭。山妻韓氏覺公與二人異於常交、問公、公曰、「我當年可以為友者、唯此二生耳。」妻曰、「負羈之妻亦親觀狐趙、意欲窺之、可乎？」他日二人來、妻勸公止之宿、具酒肉、夜穿墉以視之、達旦忘反。公入曰、「二人何如？」妻曰、「君才致殊不如、正當以謙度相友耳。」公曰、「伊輩亦常以我度為勝。」

47 『曾鞏集』（北京：中華書局出版 一九八四年刊）卷第四十六 六二六頁。なお曾鞏が書いた女性の墓誌銘については、第四章に論ずる予定である。

孝愛聰明，能讀書言古今，知婦人法度之事，巧針縷刀尺，經手皆絕倫。…曾氏為冢婦，而其姑蚤世，獨任家政，能精力，躬勞苦，理細微，隨先後緩急為樽節，各有條序。有事于時節，朝夕共賓祭奉養，撫其門內，皆不失所時，將以恭嚴誠順，能得其屬人。…其夫歎曰：‘我能一意自肆于官學，不以私累其志，曾氏助我也。’…

48 司馬光『温国文正司馬公文集』（四部叢刊本 卷七十六）五五二頁。

罄出服玩鬻之以治生，不數年遂為富家。…由是得專志于學，卒成大儒。能開發輔導，成就其夫子。…有國有家者，其興衰無不於閨門。

49 陳襄『古靈集』卷二十（『四庫全書』第一〇九三冊）第六六七頁。

給事所治有異政，號為良吏，抑夫人之助也。

50 『宋史』卷二百六十六 蘇易簡傳。

及易簡參知政事，召薛氏入禁中，賜冠帔命坐，問曰：“何以教子成此令器？”對曰：“幼則束以禮讓，長則教以詩書。”上顧左右曰：“真孟母也。”

51 邵伯温『邵氏聞見錄』（中華書局 一九八三年刊点校本）卷六。

---

教子如此，今之孟母。

52 胡仔『茗溪漁隱叢話』（人民文學出版社 一九八一年刊）。

『高齋詩話』雲：祖無擇晚娶徐氏，有姿色。議親之時，無擇爲館職，徐氏必欲訾相其人；而無擇貌寢，恐不得當也，同舍馮當世豐姿秀美，乃諭媒妁俟馮出局，揚鞭躍馬，經過徐居，曰：“此祖學士也。”徐竊窺甚喜。成婚，始寤其非，竟以反目離婚。

53 『宋刑統』（上）（文海出版會 中華民國五十三年刊）。

若夫妻不相安諧而和離者，不坐。

彼此情不相得，兩願離者，不坐。

54 この點については『關於梅堯臣的悼亡詩』（『中國言語文化研究』第八號、佛教大學中國言語文化研究 二〇〇八年刊）で触れた。

55 朱東潤『梅堯臣伝』（中華書局 一九七九年刊）十五頁、八十八頁。

56 『漢語大詞典』（上海漢語大詞典出版社 一九九七年刊）。

57 于北山校點『文章辨體序說』（人民文學出版社 一九八二年刊）五十二頁。

事祖廣記曰「古者葬有豐碑以窆。秦漢以來，死有功業、則刻於上、稍改用石。晉宋間開始稱神道碑、蓋地理家以東南為神道、碑立其地而名云耳」。

58 羅根澤校點『文體明辨序說』（人民文學出版社 一九八二年刊）一百四十八頁。

按、誌者、記也、銘者、名也。古之人有德善功烈可名於世、歿則後人為之鑄器以銘、而俾傳於無窮…至漢、杜子夏始勒文埋墓側、遂有墓誌、後人因之。

59 清趙翼著『陔余叢考』（商務印書館出版 一九五七年刊）六百八十二頁。

墓志銘之始、王阮亭池北偶談謂、事祖廣記引炙輿子、以為始于王戎、馮鑿。事始以始于西漢杜子春、而高承事物紀原以為始于比干。槎上老舌又引孔子之喪、公西赤志之、子張之喪、公明儀志之、以為墓志之始。…惟封氏見聞錄、青州古冢有石刻銘、云青州世子東海女郎、賈昊以為東海王越之女、嫁荀晞之子者。…司馬溫公亦謂南朝始有銘志埋墓之事。然賈昊辨識"東海王越之女"一事、亦見南史、則晉已有墓志之例。…莊子云、衛靈公卜葬於沙丘、掘之得石椁、有銘曰、不憑其子、靈公乃奪而埋之。

則春秋以前已有銘于墓中者矣。…由此數事以觀、則墓銘之來已久。而王儉謂始自宋元嘉中顏延之、此又何說？竊意古來銘墓、但書姓名官位、間或銘數語于其上、而撰文敘事、臚述生平、則起于顏延之耳。

60 范文瀾著『中國通史』（北京人民出版社 一九七八年刊）第二冊 三八四頁。

---

東漢時立碑極濫，曹操下令不得厚葬，又禁立碑。晉武帝下詔廢禁，自後墓志銘代碑文而興起。

61 清趙翼著『陔余叢考』（商務印書館出版 一九五七年刊）六百八十二頁。

青州古冢有石刻銘、云青州世子東海女郎。

62 （梁）蕭統編；（唐）李善注『文選』（北京中華書局 一九七七年刊）卷五十九 一二九一頁。

既稱萊歸、亦曰鴻妻、複有令德、一與之齊。實佐君子、簪蒿杖藜、欣欣負載、在冀之畦。居室有行、亟聞義讓。稟訓丹陽、弘風丞相。籍甚二門、風流遠尚。肇允才淑、闡德斯諒。蕪沒鄭鄉、寂寞楊冢。參差孔樹、毫末成拱。暫啓荒埏、長扃幽隴。夫貴妻尊、匪爵而重。

63 于北山 校點『文章辨體序說』（人民文學出版社 一九八二年刊）五十三頁。

墓誌、則直述世系、歲月、名字、爵里、用防陵谷遷改。…凡碑碣表于外者、文則稍詳、誌銘埋於壙者、文則嚴謹。…大抵碑銘所以論列德善功烈、雖銘之義稱美弗稱惡、以盡其孝子慈孫之心…

64 洪本健校箋『歐陽修詩文集校箋』（上海古籍出版社 二〇〇九年刊）卷二 三十四頁。

65 傅成 穆儔標點『蘇軾全集』（上海古籍出版社 二〇〇〇年刊）上冊 詩集卷六。

66 以下、曾鞏の詩文引用はすべて陳杏珍、晁繼周點校『曾鞏集』（北京：中華書局出版 一九八四年刊）六三三頁による。

蓋天畀之德而夭其年、遺以相余而奪之蚤。余不知其所以、而又不知其哭之慟也。…人孰不貴？子逢其窮。世誰不壽？子罹其凶。…遺以輔余、曾不梭巡。歲雲其逝、予悲孔新…

67 『曾鞏集』「江都縣主簿王君夫人曾氏墓誌」（北京：中華書局出版 一九八四年刊）六二十五頁。

天乎！吾哭伯姊始逾期、又哭吾妹而志之、其可哀也已！其可哀也已！

68 『曾鞏集』「二女墓誌」（北京：中華書局出版 一九八四年刊）六三六頁。

二女、曰慶老、吾妻晁氏出也。生三歲而夭、…方是時、吾妻晁氏病已革、慶老疾未作之夕、省其母、勉慰如成人、中夕而疾作、遂不救。…實治平三年九月甲寅。是時、余方鎖宿景德寺、試國子監進士、不得視其疾、臨其死也。二女生而值予之窮多故、其不幸又夭以死、所謂命非邪？

69 附録の拙作曾鞏略年譜を参照。

70 『曾鞏集』「金華縣君曾氏墓誌銘」（北京：中華書局出版 一九八四年刊）六〇六頁。

---

夫人嫁王氏、爲侍禦史諱平妻、姓曾氏、…既嫁、夫家貧、養姑盡婦道。輔其夫盡妻道。夫死、寓食于穎、以勤儉積日大其家、以誘教不倦成其子、又可謂盡母道也。

71 『曾鞏集』「試秘書省校書郎李君妻太原王氏墓誌銘」（北京：中華書局出版 一九八四年刊）六一六頁。

夫人姓王氏，太原人。…其行仁孝慈恕，始于爲女，中于爲婦，終于爲母，無不盡其道。

72 『曾鞏集』「沈氏夫人墓志銘」（北京：中華書局出版 一九八四年刊） 六二一頁。  
夫人姓沈氏、其先家于越之會稽。曾祖仁諒、令海州之朐山、徙家于和州歷陽、故今爲歷陽人。…夫人爲人柔閑靜專、事父母盡子道、事姑長興縣太君賈氏盡婦道、事夫盡妻道、爲母及與內外屬人接、一皆盡其道。故其處也、愛于其家、其嫁也、夫之屬人上下遠近皆愛之、而其歿也、哭之者皆哀。

73 『曾鞏集』「天長縣君黃氏墓誌銘」（北京：中華書局出版 一九八四年刊）六〇八頁。  
盡其力、治飲食、衣服以進、及喪、能盡其哀、皆如其夫之志。

父母衣食服禦、待之而後安。既嫁、恭行孝謹、宜于其家。（「壽昌縣太君許氏墓誌銘」）

74 『曾鞏集』「壽昌縣太君許氏墓誌銘」（北京：中華書局出版 一九八四年刊）六一一頁。  
父母衣食服禦、待之而後安。既嫁、恭行孝謹、宜于其家。

75 『曾鞏集』「說內治」（北京：中華書局出版 一九八四年刊）七三九頁。  
居室家、已相與矜車服、耀首飾、輩聚歡言以侈靡。

76 『曾鞏集』「金華縣君曾氏墓誌銘」（北京：中華書局出版 一九八四年刊）六〇六頁。  
以勤儉積日大其家。

77 『曾鞏集』「仙源縣君曾氏墓志銘」（北京：中華書局出版 一九八四年刊）六三六頁。  
王氏故貧、垢衣菲食、未嘗以爲歉。

78 『曾鞏集』「旌德縣太君薛氏墓誌銘」（北京：中華書局出版 一九八四年刊）六一九頁。  
能和其屬人。

79 『曾鞏集』「壽安縣君張氏墓志銘」（北京：中華書局出版 一九八四年刊）六二二頁。  
夫人爲人、仁厚莊靜、自爲女及既嫁、處內外、尊卑、長幼、親疏之際、無不當于禮、而恩稱之。

80 『曾鞏集』「永安縣君李氏墓誌銘」（北京：中華書局出版 一九八四年刊）六一五頁。  
事父母不違其教、事舅姑不違其志、事夫順而有以相其善、遇子至于內外屬人、一以恩而不違于禮。

---

81 『曾鞏集』「池州貴池縣主簿沈君夫人元氏墓誌銘」（北京：中華書局出版 一九八四年刊）六一七頁。

闔門事姑、能盡其孝。

82 『曾鞏集』「知處州青田縣朱君夫人戴氏墓誌銘」（北京：中華書局出版 一九八四年刊）六二七頁。

能順吾志。

83 『曾鞏集』「鄆州平陰縣主簿關君妻曾氏墓表」（北京：中華書局出版 一九八四年刊）六三七頁。

養父母姑舅皆至孝。

其于內外屬、親疏皆盡恩意。

84 『曾鞏集』「祭亡妻晁氏文」（北京：中華書局出版 一九八四年刊）五二九頁。

子有仁孝之行、勤儉之德。…言無疵悔、動應衡規。親疏悅慕、稚艾嗟咨。事姑之禮、左右無違。…衣有穿弊、珥無光輝。

85 『曾鞏集』「說內治」（北京：中華書局出版 一九八四年刊）七三九頁。

不顧舅姑之養、不相悅則犯而相直。…其于舅姑然爾、而況于夫之昆弟、相與爲等夷者乎。（曾鞏「說內治」）

86 『曾鞏集』「夫人周氏墓誌銘」（北京：中華書局出版 一九八四年刊）六一三頁。

夫人諱琬、字東玉…既嫁、無舅姑、順夫慈子、嚴饋祀、諧屬人、行其素學、皆應儀矩。

87 『曾鞏集』「永安縣君李氏墓誌銘」（北京：中華書局出版 一九八四年刊）六一五頁。

夫人姓李氏、其先燕人…夫人嫁駱氏、駱氏亦家許州之長葛。其夫諱與京…夫人仁孝慈恕、言動必擇義理。事父母不違其教、事舅姑不違其志、事夫順而有以相其善、遇子至于內外屬人、一以恩而不違于禮。（曾鞏）

88 『曾鞏集』「永安縣君謝氏墓誌銘」（北京：中華書局出版 一九八四年刊）六一四頁。

寺丞王公諱用之之夫人、尚書都官員外郎、贈尚書工部郎中諱益之母、姓謝氏、累封永安縣君。…余既與夫人之諸孫遊、而嘗得拜于堂上、見其色和、其容謹、聞其言儉而勤、退而聞其爲婦順、爲母慈、知其所以享其福祿者、其宜也已。

89 『曾鞏集』「說內治」（北京：中華書局出版 一九八四年刊）七三九頁。

既嫁則悖于行而勝于色、使男事女、夫屈于婦、不顧舅姑之養、不相悅則犯而相直。

吾未見其可也。



---

90 古語曰：福之興、莫不本乎室家、道之衰、莫不始乎閨內。豈非風俗之厚薄、人道之邪正、壽夭之原系于此歟？（曾鞏「說內治」）

91 『曾鞏集』「祭亡妻晁氏文」（北京：中華書局出版 一九八四年刊）五二九頁。

子有仁孝之行、勤儉之德。宏裕端莊、聰明靜默。窮達能安、死生不惑。可以齊古淑人、爲世常則。…嗚呼哀哉！父失賢女、姑亡孝婦、子喪嚴師、吾虧益友。

92 曾鞏「祭亡妻晁氏文」：言無疵悔、動應衡規。

93 『曾鞏集』「秋夜」（北京：中華書局出版 一九八四年刊）六〇頁。

平生肺腑友、一訣餘空床。

94 『曾鞏集』「江都縣主簿王君夫人曾氏墓志」（北京：中華書局出版 一九八四年刊）六二六頁。

試校書郎、揚州江都縣主簿王無咎妻曾氏、…以歸王氏。王氏家故貧、曾氏爲冢婦、而其姑蚤世、獨任家政、能精力、躬勞苦、理細微、隨先後緩急爲樽節、各有條序。有事于時節、朝夕共賓祭奉養、撫其門內、皆不失所時、將以恭嚴誠順、能得其屬人。…其夫歎曰：我能一意自肆于官學、不以私累其志、曾氏助我也。

95 『曾鞏集』「壽昌縣太君許氏墓誌銘」（北京：中華書局出版 一九八四年刊）六一一頁。

夫人許氏、蘇州吳縣人。…父母衣食服禦、待之而後安。既嫁、惇行孝謹、宜于其家。其夫爲吏有名、稱夫人實相之。

96 『曾鞏集』「故太常博士吳君墓誌銘」（北京：中華書局出版 一九八四年刊）六二六頁。

君諱祥、字某、姓吳氏、事宋爲太常博士。…妻朱氏、某縣君、余姨也、有助于君。

97 『曾鞏集』「知處州青田縣朱君夫人戴氏墓誌銘」（北京：中華書局出版 一九八四年刊）六二七頁。

夫人之考諱奎、娶徐氏女、夫婦皆有善行、聞于其鄉。夫人受教于始笄、從事于既嫁、少而行修于身、老而教行于家。故父母曰“不遺吾憂”、舅姑曰「能順吾志」。夫受其助、子賴以成。

98 『曾鞏集』「福昌縣君傅氏墓誌銘」（北京：中華書局出版 一九八四年刊）六二〇頁。

福昌君在家、爲父母所器異。既嫁而夫屬無退言、布衣惡食、身治細微。…其教子慈以肅。關公起進士、爲郎、爲池、台兩州、年八十以歸、曰「吾少得盡力于官、而老得自休于家、不以家事累吾志者、以有夫人也。」

99 放今之敝、考古之制。「易」曰：正家而天下定。（曾鞏「說內治」）

---

100 夫人許氏、蘇州吳縣人。考仲容、太子洗馬。兄洞名能文、見國史。夫人讀書知大意、其兄所爲文、輒能成誦。（曾鞏「壽昌縣太君許氏墓誌銘」）

101 『曾鞏集』「亡妻宜興縣君文柔晁氏墓誌銘」（北京：中華書局出版 一九八四年刊）六三三頁。

文柔姓晁氏、諱德儀、字文柔、年十有八嫁余…爲人聰明、于事迎見立解、無不盡其理、其概可見者如此。蓋天畀之德而夭其年、遺以相余而奪之蚤。余不知其所以、而又不自知其哭之之慟也。

102 『曾鞏集』「夫人周氏墓誌銘」（北京：中華書局出版 一九八四年刊）六一三頁。

夫人諱琬、字東玉、姓周氏、父兄皆舉明經。夫人獨喜圖史、好爲文章、日夜不倦、如學士大夫、從其舅邢起學爲詩。…有詩七百篇、其文靜而正、柔而不屈、約于言而謹于禮者也。…茲道廢、若夫人之學出于天性、而言行不失法度、是可賢也已。

103 『曾鞏集』「江都縣主簿王君夫人墓誌」（北京：中華書局出版 一九八四年刊）六二六頁。試校書郎、揚州江都縣主簿王無咎妻曾氏、建昌南豐人、先君博士第二女也。孝愛聰明、能讀書言古今、知婦人法度之事、巧針縷刀尺、經手皆絕倫。

104 司馬光『家範卷三·父母』（『影印文淵閣四庫全書』第六九六冊所收 台湾商務印書館一九八三～一九八六年刊）六六九頁。

為人母者、不患不慈、患於知愛而不知教也。

105 『曾鞏集』「壽安縣君錢氏墓誌銘」（北京：中華書局出版 一九八四年刊）六〇七頁。

夫人姓錢氏…夫人色莊氣仁、言動不失繩墨、居族人長幼親疏間盡其宜、事夫能成其忠、教子能成其孝、是皆可傳者也。

106 『曾鞏集』「壽昌縣太君許氏墓誌銘」（北京：中華書局出版 一九八四年刊）六一一頁。有益於夫、有迪於子。

子曰披、國子博士、有吏材。曰括、揚州司理參軍、館閣校勘、有文學。其幼皆夫人所自教。

107 『曾鞏集』「試秘書省校書郎李君妻太原王氏墓誌銘」（北京：中華書局出版 一九八四年刊）六一七頁。

爲人明識強記、博覽圖籍、子孫受學、皆自爲先生。

108 『曾鞏集』「說內治」（北京：中華書局出版 一九八四年刊）七三九頁。

（1）古者公侯卿大夫士、非惟外行淑也、蓋亦有闈門之助焉。考詩之二南、言後夫人之事、

---

明婦人之于夫也、不獨主酒食、奉巾栉而已、固實有以輔佐之也。先王之制、閨門之內、姆保師傅、車服珮玉、升降進退、起居奉養、皆有條法。婦人少習而長安焉、故禔是身正家莫有過也。

(2) 近世不然、婦人自居室家、已相與矜車服、耀首飾、輩聚歡言以侈靡、悍妒大故、負力閥貴者、未成人而嫁娶、既嫁則悖于行而勝于色、使男事女、夫屈于婦、不顧舅姑之養、不相悅則犯而相直、其良人未嘗能以責婦、又不能不反望其親者、幾少矣。其于舅姑然爾、而況于夫之昆弟、相與爲等夷者乎？有祀祭、賓客之禮、不自爲具、而使人爲之。浣濯之服、蠶桑之務、古天子後禮安而常行者也、而今之庶人孽妾羞言之。姆保師傅、佩玉儀節、采蘋蘩、贄棗修之事、則族而笑曰、我豈能是？是非我宜也。一切悖禮、相趨于驕驚淫僻而已、求其所以輔佐夫、可乎？

(3) 噫！古士庶人之妻、知秉禮義、服訓導、而今王公大人之匹反不能、可怪也。剪縷之不工、刻畫之不善、則恥而學焉、至大倫大法之不修、則矜然安之、吾未見其可也。古語曰、福之興、莫不本乎室家、道之衰、莫不始乎閨內。豈非風俗之厚薄、人道之邪正、壽夭之原系于此與？其可以忽然流咨而不返與？曰、如之何而可返？曰、放今之敝、考古之制、而先之于公卿大夫之家、茲可也。易曰、正家而天下定。吾說豈疏乎？

109 陳杏珍、晁繼周點校『曾鞏集』（北京：中華書局出版 一九八四年刊）第二頁。

曾鞏的作品「言古今治亂得失，是非成敗，人賢不肖，以致彌綸當世之務。斟酌損益，比本於今」（『曾鞏行狀』），他主張用儒家之道「扶衰救缺」（『上歐陽學士第一書』），在合乎先王之意的的前提下，對法制度數進行一些改易更革。

110 浣濯之服、蠶桑之務、古天子後禮安而常行者也、而今之庶人孽妾羞言之。（曾鞏「說內治」）

111 李逸安點校『歐陽修全集』「南陽縣君謝氏墓志銘」（中華書局 二〇〇一年刊）第二冊卷三十六。

吾嘗與士大夫語、謝氏多從戶屏竊聽之、間則盡能商榷其人才賢否及 時事之得失、皆有條理。

吾官吳興、或自外醉而歸、必問曰：“今日孰與飲而樂乎？”聞其賢者也則悅、否則歎曰：“君所交、皆一時賢雋、豈其屈己下之邪？惟以道德焉、故合者尤寡。今與是人飲而歡邪？”

112 『曾鞏集』「夫人周氏墓誌銘」（北京：中華書局出版 一九八四年刊）六一三頁。

有詩七百篇、其文靜而正、柔而不屈、約于言而謹于禮者也。

- 
- 113 脱脱撰『宋史』曾鞏傳（臺北：臺灣中華書局 一九七七年刊）卷三一九。  
斟酌損益、必本于經、必止于仁義。
- 114 『曾鞏集』「上歐陽學士第一書」（北京：中華書局出版 一九八四年刊）二三一頁。  
家世爲儒、故不業他。
- 115 『曾鞏集』「夫人周氏墓誌銘」（北京：中華書局出版 一九八四年刊）六一三頁。  
昔先王之教、非獨行于士大夫也、蓋亦有婦教焉。故女子必有師傅、言動必以『禮』、養其德必以『樂』、歌其行、勸其誌、與夫使之可以托微而見意、必以『詩』。此非學不能、故教成于內外、而其俗易美、其治易洽也。茲道廢、若夫人之學出于天性、而言行不失法度、是可賢也已。
- 116 羅根澤校點『文體明辨序說』（人民文學出版社 一九八二年刊）一百四十八頁。  
述其人世系、名字、爵里、行治、壽年、卒葬年月與其子孫之大略、勒石加蓋、埋于壙前三尺之地、以爲異時陵容變遷之防、而謂之誌銘、其用意深遠、而於古意無害也。
- 117 于北山 校點『文章辨體序說』（人民文學出版社 一九八二年刊）五十三頁。  
誌銘埋於壙者、文則嚴謹。…大抵碑銘所以論列德善功烈、雖銘之義稱美弗稱惡、以盡其孝子慈孫之心。
- 118 『禮記鄭註·大學第四十二』（臺北：臺灣中華書局 一九七〇刊）卷十九。  
治國必先齊其家。
- 119 古語曰：福之興、莫不本乎室家、道之衰、莫不始乎閨內。豈非風俗之厚薄、人道之邪正、壽夭之原系于此與？其可以忽然流咨而不返與？曰：如之何而可返？曰：放今之敝、考古之制、而先之于公卿大夫之家、茲可也。『易』曰：正家而天下定。（曾鞏「說內治」）
- 120 伊佩霞『內閨·宋代的婚姻和婦女生活』（江蘇人民出版社 二〇〇四年刊）第七十頁。  
女人的婚姻大事不能耽擱，這是長久以來的傳統。《禮記》說女子應在 15—20 歲結婚，男子不晚于 30 歲。法律條文只規定最低婚齡，宋代爲女 13 歲，男 15 歲。
- 121 伊佩霞『內閨·宋代的婚姻和婦女生活』（江蘇人民出版社 二〇〇四年刊）第六十頁。  
一種很普遍且令人奇怪的親戚間的通婚是娶已逝妻子的妹妹。確實，經常是第一個妻子提出這樣的建議。比如，韓琦報道，他的兒媳呂氏(1039~1065) 27 歲快要去世時，對丈夫說：‘我疾勢日加。萬萬不可治，我有幼妹在家。君若全舊恩以續之，必能恤我子。又二姓之好不絕如故，我死無恨矣。’…雖然我們知道中國曆代都有人娶前妻的妹妹，但是看起來這事在宋代特別多。

---

122 (宋)姚勉著・(宋)姚龍起編『雪坡舍人集』(南昌：退廬 一九一六年刊)。

123 以下、蘇軾の詩文の引用はすべて『蘇軾全集校注』(張志烈・馬德富・周裕鍇主編 河北人民出版社 二〇一〇年刊)による。

三子如一、愛出于天。

124 張志烈・馬德富・周裕鍇主編『蘇軾全集校注』「朝雲墓誌銘」(河北人民出版社 二〇一〇年刊)

東坡先生侍妾曰朝雲、字子霞、姓王氏、錢塘人。敏而好義、事先生二十有三年、忠敬若一。紹聖三年七月壬辰、卒于惠州、年三十四。

125 『都市文化研究』(納谷朝陽訳 二〇一〇年刊 十二号) 第一二〇頁。

126 葉嘉瑩主編『蘇軾詞新釋輯評』(北京：中国書店 二〇〇七年刊) 第四頁。

127 薛瑞生箋證『東坡詞編年箋證』(西安：三秦出版社 一九八八年刊)。

128 『大正新修大藏經』三十八卷(大正一切經刊行會)。

129 金開誠・董洪利・高路明著『屈原集校注』(北京：中華書局 一九九六年刊)。

130 張志烈・馬德富・周裕鍇主編『蘇軾全集校注』「亡妻王氏墓誌銘」(河北人民出版社 二〇一〇年刊) 一六二四頁。

君諱弗、眉之青神人、鄉貢進士方之女、生十有六年而歸于軾。有子邁。君之未嫁、事父母、既嫁、事吾先君、先夫人、皆以謹肅聞。

131 張志烈・馬德富・周裕鍇主編『蘇軾全集校注』「祭亡妻同安郡君文」(河北人民出版社 二〇一〇年刊) 七〇六二頁。

嗣爲兄弟、莫如君賢。婦職既修、母儀甚敦。三子如一、愛出于天。從我南行、菽水欣然。湯沐兩郡、喜不見顏。

132 張志烈・馬德富・周裕鍇主編『蘇軾全集校注』・「後赤壁賦」(河北人民出版社 二〇一〇年刊) 三九頁。

客曰、今者薄暮、舉網得魚、巨口細鱗、狀如松江之鱸。顧安所得酒乎。歸而謀諸婦。婦曰、我有鬥酒、藏之久矣、以待子不時之需。

133 林語堂著『蘇東坡傳』(上海書店 一九八九年刊) 第二二八頁。

蘇東坡家庭很幸福，在他的一首詩裏，他說妻子很賢德。這句話的意思是他妻子並不像他好多朋友的妻子，或是過去曆史上好多名學者的妻子那洋凌虐丈夫。雖然長子邁這時也能寫詩，但幾個兒子並沒有什麼才華。晉朝大詩人陶潛也以憂傷任命的心情寫過一首「責子詩」，說兒子

---

好壞全是天命，自己何必多管，他說：“天意苟如此，且進杯中物。”蘇東坡說：“子還可責同元亮，妻卻差賢勝敬通。”敬通爲東漢學者。蘇東坡這句詩自己加的注腳裏說：“仆文章雖不逮馮衍，而慷慨大節乃不愧此翁。衍逢世祖英容好士而獨不遇，流離擯逐，與仆相似，而其妻妒悍甚。仆少此一事，故有勝敬通之句。”

134 林語堂著『蘇東坡傳』（上海書店 一九八九年刊）第八頁。

蘇東坡的妻子在杭州買朝雲時，她才十二歲。按照宋朝時的名稱，我們可以說她是蘇太太的妾。妻子的丫鬟可以升而爲丈夫的妾，在古代中國是極平常的事。如此一個妾，無論在哪方面，都不失爲太太的助手。因爲妻子要伺候丈夫，比如準備洗澡水，妾就比壹個普通丫頭方便得多，不必在丈夫面前有所回避了。

135 『蘇轍集』「亡嫂王氏を祭る文」（中華書局 一九九〇年刊）一〇九八頁。

兄剛而塞、物或不容。既以名世、亦以不逢。轍驟而從、初未免憂。嫂以婦人、處之則優。兄坐語言、收畀叢棘。竄逐邾城、無以自食。賜環而來、歲未及期。飛集西垣、遂入北扉。貧富咸忻、觀者盡驚。嫂居其間、不改色聲。冠服肴疏、率從其先。性固有之、非學而然。族人咨嗟、觀行責報。

136 張志烈·馬德富·周裕鍇主編『蘇軾全集校注』「朝雲詩並引」（河北人民出版社 二〇一〇年刊）四四四九頁。

樂天亦云、病與樂天相伴住、春隨樊子一時歸。則是樊素竟去也。余家有數妾、四五年相繼辭去、獨朝雲者、隨予南遷。因讀樂天集、戲作此詩。朝雲姓王氏、錢唐人。嘗有子曰幹兒、未期而夭云。

137 張志烈·馬德富·周裕鍇主編『蘇軾全集校注』「朝雲墓誌銘」（河北人民出版社 二〇一〇年刊）一六三〇頁。

東坡先生侍妾曰朝雲、字子霞、姓王氏、錢塘人。敏而好義、事先生二十有三年、忠敬若一。

138 張志烈·馬德富·周裕鍇主編『蘇軾全集校注』「惠州薦朝雲疏」（河北人民出版社 二〇一〇年刊）六八六四頁。

軾以罪責、遷于炎荒。有侍妾王朝雲、一生辛勤、萬里隨從。遭時之疫、遽病而亡。念其忍死之言、欲托棲禪之下、故營幽室、以掩微軀。

139 張志烈·馬德富·周裕鍇主編『蘇軾全集校注』「悼朝雲並引」（河北人民出版社 二〇一〇年刊）四七六七頁。

---

駐景恨無千歲藥、贈行惟有小乘禪。……歸臥竹根無遠近、夜燈勤里禮塔中仙。

140 第三章四十頁—四十五頁參照。

141 張志烈·馬德富·周裕鍇主編『蘇軾全集校注』「亡妻王氏墓誌銘」(河北人民出版社 二〇一〇年刊) 一六二四頁。

其始、未嘗自言其知書也。見軾讀書、則終日不去、亦不知其能通也。其後軾有所忘、君輒能記之。問其他書、則皆略知之。又是始知其敏而靜也。從軾官於鳳翔。軾有所爲于外、君未嘗不問知其詳。曰、子去親遠、不可以不慎。日以先君之所以戒軾者相語也。軾與客言于外、君立屏間聽之、退必反覆其言曰、某人也、言輒持兩端、惟子意之所嚮、子何用與是人言。有來求與軾親厚甚者、君曰、恐不能久。其與人銳、其去人必速。已而果然。將死之歲、其言多可聽、類有識者。

142 『漢書』の引用は中華書局排印本による。

143 (宋)趙令時撰·孔凡禮點校『侯鯖錄』(北京:中華書局 二〇〇二年刊)第一二〇頁。元祐七年正月、東坡先生在汝陰、州堂前、梅花大開、月色鮮霽。先生王夫人曰、春月色勝如秋月色、秋月色令人淒慘、春月色令人和悅。何如召趙德麟輩來飲此花下。先生大喜曰、吾不知子亦能詩耶。此真詩家語耳。遂相召、與二歐飲。用是語作減字木蘭花詞云、春庭月午、影落春醪光欲舞…不似秋光、只共離人照斷腸。

144 鄒同慶、王宗堂著『蘇軾詞編年校註』(北京:中華書局 二〇〇二年刊)第七〇四頁。

145 張志烈·馬德富·周裕鍇主編『蘇軾全集校注』「悼朝雲並引」(河北人民出版社 二〇一〇年刊)四七六七頁。

朝雲始不識字、晚忽學書、粗有楷法。蓋嘗從泗上比丘尼義沖學佛、亦略聞大義、且死、誦金剛經四句偈而絕。

146 林語堂著『蘇東坡傳』(上海書店 一九八九年刊)第二二九頁。

在蘇家把她買進門時、有些人作詩給她、就猶如她已經是個富有才藝的杭州歌妓一般。但仔細研究、則知實際並不如此。由蘇東坡自己寫的文字上看、朝雲是來到蘇家才開始學讀與寫。

147 (宋)蘇軾撰·王松齡點校『東坡志林』(北京:中華書局 一九八一年刊)卷十一。

148 『大正新脩大藏經』三十八卷(東京:大正一切經刊行會刊)。

是身如浮雲、須臾變滅。

149 張志烈·馬德富·周裕鍇主編『蘇軾全集校注』「海月辯公真贊」(河北人民出版社 二〇一〇年刊)二五〇八頁。

---

予方年壯氣盛、不安厥官、每往見師、清坐相對、時聞一言、則百憂冰解、形神俱泰。

150 張志烈·馬德富·周裕鍇主編『蘇軾全集校注』「阿彌陀佛贊」（河北人民出版社 二〇一〇年刊）二四一一頁。

見聞隨喜悉成佛，不擇人天與蟲鳥。但當常作平等觀，本無憂樂與壽夭。丈六金身不爲大，方寸千佛夫豈小。此心平處是西方，閉眼便到無魔媯。

151 曾棗莊、舒大剛主編『三蘇全書』（北京：語文出版社二〇〇一年刊）第一四四五頁。

152 張志烈·馬德富·周裕鍇主編『蘇軾全集校注』「釋迦文佛頌」（河北人民出版社 二〇一〇年刊）二二四一頁。

端明殿學士兼翰林侍讀學士蘇軾、爲亡妻同安郡王氏閨之、請奉議郎李公麟敬畫釋迦文佛及十大弟子。元祐八年十一月十一日、設水陸道場供養。軾拜手稽首而作頌曰、我願世尊、足指按地。三千大千、淨琉璃色。其中眾生、靡不解脫。

153 『大正新脩大藏經』三十八卷（東京：大正一切經刊行會刊）。

154 張志烈·馬德富·周裕鍇主編『蘇軾全集校注』「阿彌陀佛贊」（河北人民出版社 二〇一〇年刊）二四一一頁。

蘇軾之妻王氏、名閨之、字季章、年四十六。元祐八年八月一日、卒于京師。臨終之夕、遺言捨所受用、使其子邁、迨、過爲畫阿彌陀像。紹聖元年六月九日、像成、奉安于金陵清涼寺。贊曰：佛子在時百憂繞、臨行一念何由了。口誦南無阿彌陀、如日出地萬國曉。

155 張志烈·馬德富·周裕鍇主編『蘇軾全集校注』「朝雲詩並引」（河北人民出版社 二〇一〇年刊）四四四九頁。

阿奴酪秀不同老、天女維摩總解禪。經卷藥爐新活計、舞衫歌扇舊因緣。丹成隨我三山去、不作巫陽雲雨仙。

156 張志烈·馬德富·周裕鍇主編『蘇軾全集校注』「朝雲墓誌銘」（河北人民出版社 二〇一〇年刊）一六三〇頁。

蓋常從丘尼義沖學佛法、亦粗知大意。且死、誦金剛經四句偈乃絕。浮圖是瞻、伽藍是依。如汝宿心、惟佛之歸。

157 林語堂著『蘇東坡傳』序言（上海：上海書店一九八九年刊）。

從佛教的否定人生，儒家的正視人生，道家的簡化人生，這位詩人在心靈識見中產生了他混合的人生觀。

158 李逸安点校『歐陽修全集』「南陽縣君謝氏墓志銘」（中華書局 二〇〇一年刊）第二冊



---

卷三十六。

吾嘗與士大夫語、謝氏多從戶屏竊聽之、間則盡能商榷其人才賢否及時事之得失、皆有條理。

159 張志烈・馬德富・周裕鍇主編『蘇軾全集校注』「亡妻王氏墓志銘」（河北人民出版社 二〇一〇年刊）一六二四頁。

軾與客言于外、君立屏間聽之、退必反覆其言曰、某人也、言輒持兩端、惟子意之所嚮、子何用與是人言。有來求與軾親厚甚者、君曰、恐不能久。其與人銳、其去人必速。

160 中原健二『宋詞と言葉』（汲古書院 二〇〇九年刊）第一二二頁。

161 清水茂『唐宋八大家』（東京：朝日新聞社 一九六六年刊）。

162 『曾鞏集』「亡妻宜興縣君文柔晁氏墓誌銘」（北京：中華書局出版 一九八四年刊）六三三頁。

文柔姓晁氏、諱德儀、字文柔、年十有八嫁余……爲人聰明、于事迎見立解。無不盡其理、其概可見者如此。

163 張志烈・馬德富・周裕鍇主編『蘇軾全集校注』「祭亡妻同安郡君文」（河北人民出版社 二〇一〇年刊）七〇六二頁。

我曰歸哉、行返丘園。曾不少須、棄我而先。孰迎我門、孰饋我田。已矣奈何、淚盡目乾。旅殯國門、我少實恩。惟有同穴、尚蹈此言、嗚呼哀哉。

164 林語堂著『蘇東坡傳』原序（上海：上海書店一九八九年刊）。

元氣淋漓富于生機的人，總是不容易理解的。像蘇東坡這樣的人物，是人間不可無一有二

的。

165 本研究は以下の論文に基づき再構成を行った。第二章は、「關於梅堯臣的悼亡詩」（『中国言語文化研究』第八号 佛教大学中国言語文化研究会 二〇〇八）、第三章は、「梅堯臣の詠妻詩とその妻に対する観念」（『人間社会学研究集録』第六号 大阪府立大学大学院人間社会学研究科 二〇一一年二月刊）、第四章は、「曾鞏の妻に対する観念—女性墓誌銘を中心として」（『人間社会学研究集録』第七号 大阪府立大学大学院人間社会学研究科 二〇一二年二月刊）に基づいている。第五章の「蘇軾の妻妾に対する観念」は書き下ろしで、現在『人文学論集』に投稿中である。

- 
- 参考文献：
- 1 汪玢玲『中国婚姻史』（上海人民出版社 二〇〇一年八月刊）。
  - 2 于北山校點『文章辨體序說』（人民文學出版社 一九八二年刊）。
  - 3 大平桂一『中国人の夢』（中国技術史の研究 京都大学人文科学研究所 一九九七年十二月刊）。
  - 4 入谷仙介「悼亡詩について-潘岳から元稹まで-」（『入矢教授小川教授退休記念中国文学語学論集』東京：筑摩書房 一九七四年十月刊）。
  - 5 伊佩霞『内闈・宋代的婚姻和婦女生活』（江蘇人民出版社 二〇〇四年五月）。
  - 6 魏国英『女性学概論』（北京大学出版社 二〇〇〇年刊）。
  - 7 魏泰『臨漢隱居詩話』（『影印文淵閣四庫全書』第一四七八冊所収）。
  - 8 王晓麗、劉靖淵『解語花』（河北人民出版社二〇〇一年刊）。
  - 9 加固 理一郎「李商隱の悼亡詩「房中曲」について」（『横浜市立大学紀要』人文科学系列第八号 横浜市立大学 二〇〇一年刊）。
  - 10 清水茂『唐宋八大家』（東京：朝日新聞社 一九六六年刊）。
  - 11 金開誠・董洪利・高路明著『屈原集校注』（北京：中華書局 一九九六年刊）。
  - 12 洪本健校箋『歐陽修詩文集校箋』（上海古籍出版社 二〇〇九年刊）。
  - 13 笥文生「梅堯臣論」（『東方學報』京都 三六号 四二三頁-四五六頁）。
  - 14 胡仔『苕溪漁隱叢話』（人民文学出版社 一九八一年刊）。
  - 15 小川環樹・山本 和義『蘇東坡詩集』（筑摩書房 一九八三年）。
  - 16 佐藤保「宋詩における女性像および女性観」（『中国文学の女性像』汲子書院一九八二年三月 二一一頁-二四二頁）。朱熹『近思錄』（臺灣商務印書館 一九六八年刊）。
  - 17 朱東潤『梅堯臣集編年校注』（上海古籍出版社、一九八〇年）
  - 18 薛瑞生箋證『東坡詞編年箋證』（西安：三秦出版社 一九八八年刊）。
  - 19 蕭統編、李善注『文選』（北京中華書局 一九七七年刊）。
  - 20 朱熹『朱子語類』（中華書局 一九八六年刊）。
  - 21 朱東潤『梅堯臣伝』（中華書局 一九七九年刊）。
  - 22 司馬光『訓子孫文』（『影印文淵閣四庫全書』第七〇三卷所収台湾商務印書館 一九八三~一九八六年刊）。
  - 23 司馬光『書儀』（『影印文淵閣四庫全書』台湾商務印書館 一九八三~一九八六年刊）。

- 
- 24 司馬光『温国文正司馬公文集』（四部叢刊本）。
  - 25 司馬光『家範』（『影印文淵閣四庫全書』台湾商務印書館 一九八三～一九八六年刊）。
  - 26 邵伯温『邵氏聞見録』（中華書局 一九八三年刊点校本）。
  - 27 蘇軾『東坡七集』（臺北：臺灣中華書局 一九八三年六月）。
  - 28 蘇軾撰・王松齡點校『東坡志林』（北京：中華書局 一九八一年刊）。
  - 29 脱脱〔ほか〕撰『宋史』（中華書局 一九七七年刊）。
  - 30 趙翼著『陔余叢考』（商務印書館出版 一九五七年刊）。
  - 31 趙令時撰・孔凡禮點校『侯鯖録』（北京：中華書局 二〇〇二年刊）。
  - 32 鄒同慶、王宗堂著「蘇軾詞編年校註」（北京：中華書局 二〇〇二年刊）。
  - 33 曾鞏撰『曾鞏集』（北京：中華書局出版 一九八四年十一月）。
  - 34 曾棗莊、舒大剛主編『三蘇全書』（北京：語文出版社二〇〇一年刊）。
  - 35 張志烈・馬德富・周裕鍇主編『蘇軾全集校注』（河北人民出版社 二〇一〇年刊）
  - 36 陳東原『中国婦女生活史』（上海書店 一九八四年刊）。
  - 37 陳尚君「唐代的亡妻与亡妾墓志」（中華文史論叢 二〇〇六年第二期）。
  - 38 中原健二「蘇東坡の悼亡詞について」（『人文学論集』第二四号 一九九〇年十二四十三頁—五十五頁）。
  - 39 中原健二「詩人と妻-中唐士大夫意識の一断面」（『中国文学報』第四十七冊 京都大学文学部中国語学中国文学研究室内 一九九三年十月刊）。
  - 40 中原健二「夫と妻のあいだ—宋代文人の場合—」（『中華文人の生活』一九九四年一月十九日）。
  - 41 中原健二『宋詞と言葉』（汲古書院 平成二十一九月八日）。
  - 42 范文瀾『中國通史』（北京人民出版社 一九七八年刊）。
  - 43 房玄齡『晋書』（北京：中華書局 一九七四年十一月）。
  - 44 深澤一幸「韋応物の悼亡詩」（『颯風』第五号 颯風の会 一九七三年六月刊）。
  - 45 保莉佳昭「蘇東坡の詞に見られる「多情」の語について」（商学集志人文科学編一九九三年）。
  - 46 松本幸男「潘岳の悼亡詩」（『学林』第三号 中国芸文研究会 一九八四年刊）。
  - 47 前野直彬『中国文学史』（東京大学出版会一九七五年刊）。
  - 48 森山秀二「梅堯臣の悼亡詩」（『漢学研究』第二十六号 一九八八年三月）。

- 
- 49 吉川幸次郎『宋詩概説』(中国詩人選集二集第一卷、岩波書店)。
- 50 山本和義「元稹の艶詩及び悼亡詩について」(『中国文学報』第九冊 京都大学文学部中国語学中国文学研究室 一九五八年十月刊)。
- 51 山本和義『蘇軾』(東京：筑摩書房 一九七三年十月)。
- 52 余嘉錫『世説新語箋釋』(上海古籍出版社一九九三年刊)。
- 53 葉嘉瑩主編『蘇軾詞新釋輯評』(北京：中国書店 二〇〇七年刊)。
- 54 姚勉著・姚龍起編『雪坡舍人集』(南昌：退廬 一九一六年刊)。
- 55 羅根澤校點『文體明辨序説』(人民文學出版社 一九八二年刊)。
- 56 李逸安点校『欧陽修全集』(中華書局 二〇〇一年刊)。
- 57 内山精也『蘇軾詩研究——宋代士大夫詩人の構造』(研文出版、二〇一〇年)。
- 58 林語堂(合山 究[訳])『蘇東坡(上・下)(学術文庫 七六八)』(講談社、一九八六、一九八七年。)
- 59 林語堂著『蘇東坡傳』(上海書店 一九八九年刊)。
- 60 李逸安点校『欧陽修全集』(中華書局 二〇〇一年刊)。
- 61 劉克莊『後村詩話』(中華書局 一九八三年刊)。
- 62 遼欽立『先秦漢魏晉南北朝詩』中冊(北京：中華書局 一九八三年版)。
- 63 『渭南文集』(四部備要集部)(中華書局據汲古閣本校刊)。
- 64 『新五代史』晋家人傳(北京中華書局 二〇〇四年刊)。
- 65 『新五代史』唐廢帝家人傳(北京中華書局 二〇〇四年刊)。
- 66 『周易程氏傳』婦妹 二程集 (北京中華書局 一九八一年刊)。
- 67 『宋刑統』(文海出版会 中華民國五十三年刊)。
- 68 『大正新修大藏經』三十八卷(大正一切經刊行会)。
- 69 『都市文化研究』(納谷朝陽訳 二〇一〇年刊 十二号)

「附帯資料」

一、梅堯臣略年譜

- 咸平五年（一〇〇二） 一歳 宣城（安徽省）に生まれる
- 天聖五年（一〇二七） 二十六歳 謝氏（二十歳）と結婚
- 天聖八年（一〇三〇） 二十九歳 桐城県（安徽省）主簿
- 天聖九年（一〇三一） 三十歳 河南府（洛陽）主簿、欧陽脩と知り合う
- 天聖十年（一〇三二） 三十一歳 河陽県（河南省）主簿
- 明道二年（一〇三三） 三十二歳 徳興県（江西省）知事
- 景祐二年（一〇三五） 三十四歳 建徳県（安徽省）知事
- 宝元二年（一〇三九） 三十八歳 襄城県（河南省）知事
- 康定二年（一〇四一） 四十歳 湖州府（浙江省）税務官
- 慶暦四年（一〇四四） 四十三歳 税務官を終え、湖州から都の汴京（河南省開封市）へ向かう途中、七月七日、高郵（江蘇省）で妻謝氏が亡くなる。
- 慶暦五年（一〇四五） 四十四歳 忠武軍節度使（河南省許州属官）
- 慶暦六年（一〇四六） 四十五歳 刁氏と再婚
- 慶暦七年（一〇四七） 四十六歳 許州での任を終え、汴京に帰る。
- 慶暦八年（一〇四八） 四十七歳 鎮安軍節度使（河南省陳州）
- 皇祐元年（一〇四九） 四十八歳 父の梅譲が亡くなり、故郷の宣城で喪に服す。
- 皇祐三年（一〇五一） 五十歳 喪が明ける。
- 皇祐五年（一〇五三） 五十二歳 母が亡くなり、故郷の宣城で喪に服す。
- 至和三年（一〇五六） 五十五歳 はじめて中央官僚（国子監直講）となる。
- 嘉祐五年（一〇六〇） 五十九歳 四月、疫病で亡くなる。

二、曾鞏略年譜

- 天禧三年（一〇一九） 一歳 南豊（江西省）南城に生まれる。
- 天聖二年（一〇二四） 六歳 父の易占宋郊榜の進士に登第。
- 天聖四年（一〇二六） 八歳 生母呉氏が亡くなる。
- 天聖八年（一〇三〇） 十二歳 「六論」を試作する。欧陽脩がこの文を見て驚嘆する。
- 至和元年（一〇五四） 三十六歳 晁氏と結婚。

---

嘉祐二年（一〇五七）	三十九歳	進士科に合格した。太平州（今安徽当涂）司法参軍。
嘉祐五年（一〇六〇）	四十二歳	館閣校勘、集賢校理、兼判官告院。
嘉祐七年（一〇六二）	四十四歳	晁氏が亡くなる。
治平元年（一〇六四）	四十六歳	李氏と再婚。
熙寧二年（一〇六九）	五十一歳	越州（浙江紹興市）通判。
熙寧四年（一〇七一）	五十三歳	齊州知州（山東済南市）。
熙寧六年（一〇七三）	五十五歳	襄州知州（湖北襄樊市襄陽城）。
熙寧十年（一〇七七）	五十九歳	洪州知州（江西南昌） 福州知事（今福州市）。
元豊元年（一〇七八）	六十歳	明州知州（寧波市）。
元豊三年（一〇八〇）	六十二歳	滄州知州（河北省）。
元豊四年（一〇八一）	六十三歳	史館修撰。
元豊五年（一〇八二）	六十四歳	中書舍人。
元豊六年（一〇八三）	六十五歳	四月江寧府（南京市）でなくなる。